

神獄塔メアリスケルター AnotherFinale

謎のコーラX

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

ジェイル——それは「生命ある監獄」と呼ばれる難攻不落の人間収容所。

数十年前に突如生まれたこの監獄は、「メルヒエン」と呼ばれる化物や

それを統率する狂気の存在「ナイトメア」によって管理されている。  
ジャック率いる血式少女達は、

「運命からの脱獄」を果たし見事地下監獄から地上へと昇り着いたのであった…。

その目で見たのは……綺麗な青空、雲、草原の広がる正常な世界だった、しかしジャックには、いや血式少女達、黎明の皆には違和感があった、ハーメルンは急に倒れ、メルヒエンの大群が押し寄せ、ナイトメアも現れる、しかし、血式少女戦線と名乗る3人によって窮地を脱し、黎明は都市に向かって歩を進めた。

もう一人のマッチ売りの少女 マチ

仲間のためにその血の一滴さえも捧げる血式少年 ジャック

復讐を誓う、唯一の処刑台少年 ノコギリ

過去を乗り越えた血式少女 つう

ヒカ리를思う普通の少年 マモル

知らない過去に蝕まれる血式少女 ハーメルン

全ては縛られた怪物の姿をした神獄塔に眠っている

過去が目を覚ました時、全てが紡がれる。

今、彼らのもう一つの最後の脱獄劇が始まる

この作品には神獄塔メアリスケルター3シリーズのネタバレが多数存在します、神獄塔メアリスケルター 希望の炎の続編でもあるためそちらも読んでおくとより楽しめます

まだF i n a l e がきてないため、あまり話は進みません、10月にまた更新されます。

追記 F i n a l e のネタバレがありますので注意

# 目次

## 一章

1話	正常な世界	1
2話	血戦都市 前編	6
3話	前の世界 今の世界 血戦都市 後編	9
幕間①	死体の上の平和 前編	13
幕間②	死体の上の平和 中編	16
幕間③	死体の上の平和 後編①	21
幕間④	死体の上の平和 後編②	26
幕間⑤	歌の下手な踊り子	32
幕間⑥	鉢被りの悪態少女	36
幕間⑦	無力の天才鍛冶師	39
幕間⑧	足癖の悪いウサギさん	44
幕間⑨	処刑	48
幕間⑩	王子様	52
幕間11	山での邂逅 出会い	57
幕間12	マッチ売りの少女達	61
4話	影法師	65
5話	橋立小女郎 前編	70
6話	橋立小女郎 中編	74
最奥①	赤ずきん	79
最奥②	シンデレラ	81
7話	橋立小女郎 後編	84
8話	今の世界 悪夢少女	88
9話	ハーメルン編① 心病む悪意の嵐	92

幕間 1 3	マチとメアリー、そして悪夢少女ついて	前編		95
幕間 1 4	マチとメアリー、そして悪夢少女ついて	中編		

99

幕間 1 5	マチとメアリー、そして悪夢少女ついて	後編		104
幕間 1 6	ナイトメア・ボーイ／ガール			108
1 0 話	ハーメルン編②	ジエノサイド・ガーディアン		111
1 1 話	ハーメルン編③	子を愛し、子を護り		115
1 2 話	ハーメルン編④	慎ましやかな平和		119
1 3 話	ハーメルン編⑤	悪を挫く 人振りの剣とならん		123
1 4 話	ハーメルン編⑥	一人ぼっちだった王様達		128

## 二章

1 5 話	つう編①	過去は常にあなたの側に		132
1 6 話	ジャック編①	理想的な現実		136
1 7 話	動き出す現状			140
1 8 話	救われぬ者と救われた者のその後			142

## 一章

### 1話 正常な世界

ジェイル、それは突如として空から飛来し、人々、動物、建造物、全てが擬態化という侵略を受け、ある日本最大の繁華街、東京は地面が陥没、空は閉じ、人々は閉じ込められたのだ、白い月が空に輝き、人々は怪物、メルヒエンによる拷問によって一時も安心できない毎日を送っていた、しかし、黎明の血式少女の活躍により、人々は再び脱獄をはたしたのだ。

——数瞬の白から晴れ、次に僕達の目に入ったのは、青い空、白い雲、そして黒い太陽がサンサンと輝いていた、とても眩しい、これが……空？、草原が広がり、気持ちの良い風が草花を揺らしている。けど、これは。

「……なんだろう、違和感がある」

『やったぞ！、外に！、外に出られたんだ！』

『おお！、見慣れた風景だ！、』

大人達は皆喜びの声をあげている、けど、僕達血式少女やハルさん達はどうも反応がおかしい、いや、これは僕と同じ感覚なのだろう、何かが違うと。

「ジャック……おかしいの、本で見た風景のはずなのに、違うつてわたし、思ってしまったの」

アリスは、頭を抱えている、僕にもそれはわからない、いったいどういうことなんだ。

「——これ、は……」

皆状況に困惑しながら、ハーメルンだけは明らかに異質だ、顔は真っ青で、手は震えている。

「ハーメルン？」

「違う……なんだこりよ記憶は……われの、われの知らない……われは……いったい——」

そのままハーメルンは気を失い、草原の上に倒れた。

「ハーメルン!？」

『きゃー!、メルヒエンよ!』

ハーメルンに駆寄ろうとした瞬間、人々が声を上げた、多数のメルヒエンがこちらに近づいてきている。外にもちやんといるのか。

「おいジャック!ハーメルンのことは気になるけど、とりあえずはメルヒエン退治だ」

マチさんは背中中のマッチを持ち、メルヒエンの集団に向かっていった。

「ちよつと!、先走るんじゃないわよマチ、行くわよシンデレラ」

「わかってますわ赤ずきんさん!」

赤ずきんとシンデレラもマチさんに続いていった。

「ギギイ!」

息もつかせず、今度は別方向からメルヒエンが向かってくる、他の血式少女の皆が向かっていき、これは、囲まれているのか?。

「そんな、こんなに早くにメルヒエンが」

ヒカリは力を使おうとするが、脱獄前に言っただ通り、もう残ってないらしく、倒れそうになる、それをマモルが支えた。

「ヒカリ、無理するな」

「マモル……」

「大丈夫さ、それに血式少女の皆は強いんだ、これくらい……ヒカリ?」

「マモル、その傷はどこで?」

ヒカリが指をさした場所、首にいつの間にか何か痕がついていた、まるで切られた後くつついたような、生々しい傷が、なんだろう、この傷、とても不自然だ。

「ん?、よく見えないが……確かに首に何か変な感じが……おい、お前ら、それ」

マモル以外にも、カエデ、タツミ、イツキにも同じような痕がついていた、この傷には何か意味があるのか?、他の人達にはそんなものがあるようには見えないが。

「なんなんだ、いったい」

「おおおおああつとー!」

先程向かっていったマチが凄いスピードでこちらに飛んできた、手に持っていたマツチは折れており、少し頭から血が出ている、あのマチさんが怪我を!?

「マチさん!?!」

「いつつ、聞いてないぞ、ナイトメアがいるなんて!」

ナイトメア、脱獄前に、幾度も戦ったメルヒエンの親玉、不死身の怪物だ、それが何故ここに!?!、さつきから驚きが多すぎる、いや、情報不足というのが適切なんだろう。

どうやらナイトメアが現れたのはマチさん達のところだけらしい。

「けっ、再生持ちっぽいな、さつきつけた傷が塞がっている、さて、いけるかな、マツチ何本刺せば死ぬかな」

マチさんが向かおうとした瞬間、他の方向のメルヒエン達がみるみると減っていく。

「ああ?なんだ?」

「血式少年少女戦線です!、皆さん無事でしょうかー♪?」

そのような大きな声が、聞こえてくる、今度はなに?、血式少年少女戦線?。

「ギギイ!」

「ふむ、大きいですね、これはそこそこ弾を使わされそう」

軍服を羽織ったラプンツェルほどに見える少女がナイトメアを飛び越えて、赤ずきん達のところに見えた、手にはマガジン式の拳銃と刀が握られている、この子もしかして血式少女?。

「ちよつと!、ここは危ないわよ!」

「そうですわよ!、こんなところに子供がくる場所では」

「はは、赤ずきん、それとシンデレラですね、こんにちは、はじめまして、わたしは」

少女はナイトメアに背を向けて、赤ずきんとシンデレラにお辞儀をした、それを見逃さずナイトメアはその腕を振り下ろす。

「危ない!」

二人がそう言った次の瞬間、見えなかったけど、刀で斬ったのか、ナ



イトメアの四肢は斬られていた、そのままナイトメアは地面に力無く倒れる。

「マリアチャイルド、皆からはそう呼ばせているわ」

マリアチャイルドと名乗った少女は、ナイトメアに今度は拳銃を向け、撃鉄を5発鳴らした、銃弾はナイトメアの胴体に命中する。

「ちよつと、ナイトメアは核を壊さないよ」

「存じております、まあ見ればわかりますから」

数秒後、ナイトメアは身体をバタつかせて、苦しんでいる、身体がポコポコと膨れ上がり、次の瞬間、ナイトメアは肉を飛び散らかして爆発した……ナイトメアが死んだ？。

「な、何が起こりましたの!？」

「ああ、これはですね」

「なんすかなんすかなんすかそれ!!」

大声をあげて、くららが飛び出していった、ああ、ああいう不思議なやつ好きそうだしね。

「えつと」

「どうして倒せないナイトメアが爆発したんすか!、どういう造りの弾なんすか!、その刀もかなり切れ味良いんすけど」

「わかった!……後で話しますので、とりあえずついてきてください」

「え、でもメルヒエンが」

僕の疑問は答えを待たずにすぐにわかった、既にメルヒエンは全て掃討されていた、数百はいたはずなのに、アリス達が強くなったとは言え、ここまでの速度は出せない。

「ら、ラプンツエル達、ほとんど活躍できなつたよ、あなた誰？」

「んー♪、わ♪た♪し♪は、カーレン♪、どうもこんには、小さきマドンナさん♪」

マリアチャイルドと同じ軍服に本で見たようなドレスを着て踊っている少女、ラプンツエルは少し困惑してる様子だったけど、すぐに自分も踊りだした。

「あ……の、そ……の……」

「うーん、綺麗な緑の髪、眠たげな瞳、そしてふくよかな乳!、眠り姫

さん、どうか僕と一緒にデートを、僕は牛若丸、これでも血式少年さ！」

「なんなのよー！」

同じくちゃんと軍服を着ている少年は眠り姫を口説いていた、それを親指姫が蹴りを入れているが全て避けられている。

「んー、きみは……対象外！」

「殺すー！」

「えつと……その、いい奴らなんですよ、牛若も、カーレンも……」

マリアチャイルドは遠目で諦観といった感じだ。

「ああうん……実力はあるみたいだしね、て、そんなことより、あなた達、何者？」

赤ずきんが話を切り出した、敵ではないのは確かだけど、それよりも。

「なんで、言ってもいないのに、あたし達の名前を知ってるのよ」

そうだ、僕達は一度も名前を言ってない、それなのに何故名前を出せたのか。

「……まあ、ついてきて、私達の都市に」

そう言っつてマリアチャイルドは指を鳴らして、牛若という少年と、カーレンという少女を側に呼び、歩き出した。

「……どうする、ジャック」

マチさんは疑っている様子だけど、僕は。

「行こう……もしかしたらこの違和感の正体もわかると思う」

「それも、そうか、まあもしもの時はマチがなんとか護ろう」

この正常で、違和感のある世界……二人の血式少女と一人の血式少年、マリアチャイルドが言う都市に行けば、全てわかるかもしれない。

## 2話 血戦都市 前編

「さて、いろいろと聞きたいことがあります。まずはそこのお二人さん、何者ですか？」

マリアチャイルドはローザと茨木童子を指さした。どうやらジャバウオックについては知らないらしい

「吾輩は茨木童子、わけあって血式少女についてきている身だイチレンタクシヨウってやつだ」

「同じく、わたしもよ、ローザというの」

「ふむ、ジャバウオック……ね」

何か含みのある言い方をするな……マリアチャイルドはそれだけ聞くと、無言になった。質問をしたけど聞き耳を持つてくれなかった、都市についたらっていった感じなのだろうか。

それからしばらくしてメルヒエンなどを片付けながら、僕達はただり着いた。

「こいつは……いったい」

ハルさんが動揺してる、それはわかる気がする、高い建物が見え、人の活気が感じ取れる、巨大な鉄の門に閉ざされていてそれがわかる、ジェイルではこんなことは無かった、いったい何なのだろうか、この都市は。

「ようこそ、血式少年少女戦線都市、通称血戦都市に、歓迎するよ」

マリアチャイルドはそう言って大きな門を開けた、それも手で、とてもそんな力が強いとは思えないが、ただハーメルンの例もあるし血式少女とはそういうものなのだろう。

それからこの先に必要のない大人、子供とは別れ、黎明の重要人物とジャバウオックの二人、無理矢理ついてきたくららとともに血戦都市で一番大きな建物、マリアタワーに来た。

「それにしても凄い活気ですね、僕達のいたところとは違いすぎる」

「ねえ、ここってお菓子とかどんなものがあるのかしら」

グレーテルが少しワクワクした感じでマリアチャイルドに聞いた。そうだね、グレーテルはお菓子が好きだから、それは聞きたかった

と思うよ。

「わたしから聞くより、見たほうが早いとは思うね、とりあえず、わたしの部屋に、そこでいろいろと話そう、それからは自由時間だ」

「それも、そうね、わたしもいろいろと聞きたかったから、この世界について」

グレータールは何かわかつてる様子だ、いや、僕も気づいているのかもしれない、けど、いったいどうしてこんなにも平和なんだ……。

タワーに入ると、そこには大きな鉢を頭に被った僕と同じくらいの背の少女がいた、この人も血式少女だろうか。

「うん、想定通り……だね、わたくし……皆さん……わたくしは……」  
「鉢かづき姫だ、転移の魔法が扱えるうちの第2戦線の者だ」

「さき……いつちゃ……め」

魔法、というと親指姫みたいなものだろうか。

「鉢かづき、早いところ転移を」

「うん……わたくし……わかった」

鉢かづき姫が床に両手が触れると、僕達を囲うように魔法陣が現れる。

「いって、らっしやい」

次の瞬間には、僕達はある一室に転移していた。

「……私とは比べられないほどに長けているわ、あの鉢かづきってやつ」

親指姫もそれなりに扱えるが、確かにヒカリのようなことをあかも容易にできるのは確かに凄い。

「さて、改めて、わたしこそは血戦の長、マリアチャイルドだよ」

「ああ、やっぱりそうなんですね」

「反応うっす、こんな自分で言うのもなんですがこんな小さな身体の長がいると思ってたんですか？」

「うん、でもナイトメアを容易に倒せる実力や、他の二人を統率してる感じからそうだと思っていたよ」

「はあ……わたしさぶらいず向いてないかも」

結構落ち込んでいる、わざとでも驚く仕草しといたほうが良かった

かな？。

「……て、そんなことよりも、一番聞きたいことがあつたんだつたね、まあとりあえずこの世界についてだね」

「マリアチャイルドは窓の先をゆびさす、そこには……。」

「な、なんですかあれは」

そこには、ここからでもわかる超巨大な肉の象のようなものが、地面に繋がれた鎖で縛られた状態で存在している、かなり遠いが、あれだけの大きさのモノは見たことがない。

「わたし達でも詳しくはない、ただドロシーがあれを目覚めさせるのが目的としか」

あんなモノが目覚めたら、とても勝てそうにない、そしてやっぱりドロシー、監獄塔で出会ったヒカリに似た髪とピンクの瞳の少女。

「ま、次にわたし達が貴方達のことを既知の理由ですが……これを」

マリアチャイルドが指を弾き、後ろの扉が開いて大人の兵士が何か包帯が巻かれたモノを、担架で運び込まれた、それはどこか人の形をしていた

「一応言っておくけど、覚悟して見てね」

包帯の顔の部分を解いていく、そこには――。

……かなりの時間、僕達は思考が停止していた。

「な……なによこれ」

赤ずきんは顔から血の気が消え、

「嘘、嘘でしょ、ここに~~あるはずがないよ~~」

「~~姫、大丈夫……マリアチャイルド！、いったいこれはどういうことだ！~~」

人魚姫は倒れそうになり、それをつうが支える。

「マチにもわからないが、偽物にしては出来過ぎているな」

「あら……ふふふ、不可思議すぎるわね、ドツペルゲンガーっていうのかしら」

そこにあつたのは、あるはずのない、いや、あつてはいけない人が横たわっていた。

「――アリス」

### 3話 前の世界 今の世界 血戦都市 後編

「どうして……わたしが……」

アリスはそのまま一人の自分の死体に触れようとする、しかし、その手をカーレンの手によって握られて止められる。

「話は最後まで聞こ？♪」

「ふーん……ほい」

それと同じタイミングにマチさんがもう一人のアリスの死体に触れる、するとすぐにマチさんの様子が変わる、冷や汗が流れ、呼吸が少し荒くなっている。

「——なるほど、お前らはこうやってマチ達を知ったと」

「マチー、大丈夫!？」

「凄い汗ですわ、いったいどういうことですか?」

赤ずきんとシンデレラが心配になって駆け寄った、マチさんは大丈夫だと、親指を立てるけどかなり辛そうではある、何か起こったのだろうか、あの死体に何が……。

「これはく……どういうことですか、マリアチャイルドさん」

かぐや姫の間に、マリアチャイルドはため息を漏らす。

「はあ、それを今から言おうとしたのに間髪入れずに貴女達が触れたので言うタイミングを見失ってました、わかりやすく言うと」

「知らない白い血式少女隊の服のアリスの視点が早回しで頭の中に流れ込んできた、全部わかってしまうし、死ぬところまで流れるから本当に辛いなこれ、アリスがナイトメアってマジだったんだな」

「……………マチさんの言うとおりです」

言いたいことを取られて若干マリアチャイルドの眉間にシワが寄ったり、青筋が浮き上がってる。怒る手前なのがわかる。

「マチさん、この先はマリアチャイルドに譲りましょう」

「ん?、まあそうするか」

「ふうふう……で、アリスさん、貴女は一番触れてはまずいでしよう、なんせ前の世界

のことです、実体験として覚えてしまい、最悪重度のブラッドスケ

ルター化が予想されます、簡単に戻れませんし、心が強い負担が残るでしょう」

「……なら、この私はなんなんですか、前の世界というのはおつうが言っていた世界なら、私が2人いることになるんですが」

「それについては私でもわかってない、ただ」

パキ、そんな音がマリアチャイルドの声を遮ったかと思うと、マリアチャイルドの後ろの壁が壊された。

「……早いな、もう来てしまったのか」

壁を破壊したソレは、素早く移動し、死体に向かっていく、それに反応したのはカーレンだった、カーレンはソレと死体の間に入り、ソレは脚を振るい、攻撃してくる、それらをカーレンは脚で捌き、逆に一撃蹴りを入れた、やはりかなり強いな、ここの血式少女は。

「……………」

ソレが止まったことで、やっと僕らでも視認できるようになった……小さいが、それは僕らは見覚えのある人だった。青い長い髪、シンデレラだ。

「こ、今度はわたくしですよの!?!」

その小さいシンデレラは、白の血式少女隊の服を着ており、両脚にはマモルと似たような傷跡がついている。

「やっぱりだ……つう、これって」

「ああ、僕がいた世界で間違いない、でも何故ここに存在しているんだ」

「……………」

小さなシンデレラには感情と言えるものが伝わってこず、

ただ前の世界のアリスをじっと見つめている。

「とりあえずは、アリスの死体が目的なんでしょ、渡したくないなら、応戦しないと!」

「わかってる!」

僕はメアリガン抜き、つうもメルヘンスケルター、ジェイルで身につけた制御されたブラッドスケルター化を行った。

「——戦力確認、作戦実行を不可と断定、帰還します」

最初に初めて発したのは機械のような声だった、そうやって小さなシンデレラは先程壊した穴からなんの躊躇なく飛び降りた。

「!、待て!」

つうは追いかけてしようとしたが、既に小さなシンデレラの姿は無かった。

「……マリアチャイルド、何かわかってることはあるのか、それと、この僕の姿に何の驚きもないみたいだけど」

「……まあわかってることですと、この世界が異常であることと、メルヘンスケルターは既にこちらでもできることかな」

メルヘンスケルターのことまで……いや、なんでメルヘンスケルターという名称を?、それに血式少年少女戦線……、こちらと同じことを何故?。

「何故メルヘンスケルターという名称が同じなのかって聞きたいのだからうけど、簡単な話さ……そちらと繋がりがあるやつがいるっただけ、そうだね、フユさん」

その言葉に、全員の目が、フユさんに注がれる。

「……はあ、今まで言わずにすまなかったね、いろいろとバレると危険な任務だったもので」

フユさんは懐からカードを取り出す、そこには、「血式少年少女戦線 研究班 班員 フユ」と書かれている、写真には子供のフユさんが写っている。

「ふーん……そ、まあ裏切ったわけじゃないからマチとしては別に」

「うん、あたしも別に驚きはしてもそんな黒い気持ちはないかな」

皆、フユさんが戦線の人でも関係ないと言った感じだ、僕としても、今までのいろんなことの合点が言った感じだ。

「さて、まあこの先はご自由に、もう皆解散で良いだろう、知りたいこと、前の世界のこととかは自ずとわかるはずだよ」

「じゃあ僕から最後に一つ聞いていいですか、マリアチャイルド……さん」

「何かなジャックくん」

「あなた達の目的はなんですか」



「決まってるだろう、今までのお前達とは逆さ……監獄塔の成長の阻止だよ」

それは、確かに僕たちが今までやってきたことの逆の目的だった。

## 幕間① 死体の上の平和 前編

「……ほんつと、美味しいわあ」

「うん、美味しいね、グレーテル」

私はグレーテルとヘンゼルと一緒に血戦都市一番の甘味処にやってきた。その端の席の畳の上で、テーブルを挟んで3人で来ていた。

「……まあそれもいいけれど、マリアチャイルドでしたっけ、本当に平和ね、メルヒエン、更にはナイトメアが監獄塔以外にもいる世界なんて、随分と物騒なのに、よくこれだけの人がいるわね」

グレーテルは辺りを見渡す、何十人の客が笑顔でなんの心配もなく甘味を食べている、本当に平和だよ、うん。

「そちらのナイトメアは核から離れないのが多いようだね、まあこちらからすればそれが珍しいのですが。ええ、平和ですよ、死体の上」に、だけどね」

私は唇を噛みしめる、ああ、思い出すだけで吐き気がする。でも、思ひ出さないといけない、そうしないと語れないから。

「死体の上、ね、戦闘によってにしては、反応が違うわね、話してくれないかしら、この血戦都市の前のこと」

人の心情を知らずか知ってか、なるほど、サイコ（パス）ガールね。「まず、一つ言うべきことだけど、あのフユっていうの、あっちではどんなことをしてるか知らないけど、こっちではクソ女とだけ言っておくわ」

「クソ女ね、まあブラッドスケルター化や、メルヘンスケルターとか、こちらの知らない、いや、知ることができなかったことから、その存在すら無かったことまで知っていたわね、常々聞いてきたけど全てあしらわれてきたわ、そのフユがどういうのかも、教えてくれるのかしら」

「ええ、ところで、貴女達もここのを食べに？」

私は前の席の人達に話しかけた、バレバレの気配ね、わかってることだけど、3人とも、私達と同等か以上ね。

「結構すぐにバレましたわね」

シンデレラに

「やっぱりでしたわね」

かぐや姫

「あははー、こういうのやっぱり向いてないわねあたし達」

赤ずきん、そして、

「マチは堂々と行こうって言ったんだが、誰だよスパイごっこしようって言ったの、マチか!」

マチ、もう一人のマッチ売りの少女、あちらとは比べられないほど強いわね、あのナイトメアだつて覚醒すれば容易にいけたのでしょ  
うに。

「貴女達も聞きます?」

「是非、マチも聞きたかったし、この異様な平和な都市について」

「じゃあ、語りましょうか、私の出生から、あのフユについて」

○

私がいたのは暗い洞窟、そこでは弱肉強食がルールだった、弱いメルヒエン、ナイトメア……ベイビメアとも言われるものは喰われていく、私も例外ではなかったが……いや、今にして思えば例外と言うべき存在だったんだろう。

もはや洞窟にある食料は尽きて——気づいたときには私はメルヒエンを喰らっていた、腹が裂けた、メルヒエンを。

「おいー、そこのキミ!、大丈夫でありますか!」

女性の声が聞こえる、軍服?というモノを着て、何人もの人を連れて、その中に、幼い少女——フユもいた。

「誰……?」

「わたくしですか?、わたくしはあんというであります!」

元気ではつらつに自己紹介をした、本当に元気で、私はつられて笑みが浮かぶ、いい人馬鹿そう、というのが最初の印象だった。

『ほ、本当にあつたぞ!』

『これが、あのメルヒエンか、子供の戯言だと思っていたぞ』

「よかったねえ、で、近くのメルヒエン、早いとこ調べてー、あ、フユだよ」

小さいけど、どこか達観していて、こんな状況なのに緊張感などなく、余裕で満ちている。そんな印象を受けた。

「あの、どういう集まりなんですか」

「ふむ、よく喋るね、推定年齢3歳と言ったところか、ワタシ達かな、そうだね……黎明だよ」

○

「……ふむ」

ワタシは研究室で、あの子供の血液を調べていた、すると、研究室からワタシの予想とは反対の結果を聞かされた。

『報告します、あの少女の血液を調べた結果なのですが、どうやら、メルヒエンを血液を破壊する効能が現れました』

……なんだって？、ワタシはこちらに来て初めての驚きに直面したのかもしれない、メルヒエンを破壊する血液だって？、こんなこと聞いてないぞ。

「それは確かなのか」

『はい、先程、辺りにいたメルヒエン全てを調べましたが全てに血が付着した部位から広がるように血液が破壊されておりました』

「ふむ……ワタシの目で見ます、案内を」

ワタシは実験室に向かった、扉を開き、メルヒエンの死体が安置されている場所までくる。

「ふむ、確かに血液が黒く変色している、残ってるのは鉄分だけって感じだね、見事に破壊とも言うべきことが起きてる、そういえばきみ誰だっけ」

『はい、間宮といいます』

「ふーん、そ、それにしても破壊の範囲はだいたい人の頭一つ分か、ふふ、これからの実験が楽しみだね、間宮くん」

『はい』

ワタシが知らない血式少女、いやはや、この世界はワタシを飽きさせることはないようだね。

## 幕間② 死体の上の平和 中編

「……………変わらないな、こここの空は、あれから数年経ってるのに」

ワタシは、タワーの頂上の柵にもたれながら、今までのことを思い返していた。

その中には、地上のこと、ジェイルのことなど……………そして研究のことが頭の中に思い浮かんでいく。

「……………よう」

「……………なにさ、ハル」

隣にはハルがいる、ハルはこの携帯食料を食べながら、言葉を続ける。

「お前、なかなか嫌われているな、ここに来るまでにお前の悪口が凄かったぞ?」

「事実、だからね」

「そうかい、あつちと何ら変わらなかつたわけか」

「そうかもね……………はは」

ワタシの口から乾いた笑いがでる、昔なら笑っていた筈なんだけどもね。

「よく、顔を出せたな、フユ」

後ろから聞き覚えのある声がある、いや、少し低くなつたが、ワタシは振り返る、そこには牛若丸がいた。

「牛若丸か、どうしたのかな、ワタシとは顔を合わせたくないと思つていたんだが」

「今だつてそうだ、昔のお前だつたら地上に出でいたらすぐに殺そうと思つていた、いたんだが……………!」

牛若丸は肩を震わせる、ああ、この子は本当に人の変化に敏感だな。「なんなんだよ、その後悔した目は!、昔ならあんなやつらを置いていくお前が!、なんで長なんかについて!、徳にならない人の運命を変えたりしてるんだ!」

「……………ゴメンとは言わない、ただの、心変わりつてやつかもね」

「!」

牛若丸は憤怒の表情で腰の刀を抜き、歩を進め、ワタシを斬りにかかる。

ああ……本当に、すまなかったわ、牛若丸……マリア。

○

曰く、私は一人目の血式少女であり、未知の血式少女らしい、私は検査などを行った、白く清潔で、空気も美味しい。

黎明、メルヒエン、ナイトメアから人々を護る組織らしいが、既に戦える人は少ないらしい、ほとんどをナイトメアに殺されている、そんな時にフユが現れた、数々の知恵を与え、壊滅に近かった黎明を立て直した、本人は研究員としてだけでいたらしく、長にはなりたくとのこと。本部として今だに無事な建物の多い都市の中心にあるビルだ、私もそこで生活をしている。

あれから3日、私はフユに連れられて、研究室に訪れる、そこには、一人の私と同じくらいの少年がいた。髪は黒く、顔も整っていて、イケメンの部類だろう。

「おおー、きみが僕のお嫁さんになる娘かい？」

「……は？」

第一声がこれである、なんなのだろうこの少年は。

「うーん、でも発展するような胸してないからねえ、ゴメン！」

「ははは……フユこいつ殺していい？」

「駄目だ、コイツは牛若丸、オマエと同じメルヒエンの因子を宿す、血式少年だよ」

「よろしくー！えつと名前なんだっけ？」

私は牛若丸から差し出された手を速攻ではたき落とす。

「マリアだ」

これが私と牛若丸の最悪の第一印象からの出会いだった

それから一年、私は4歳になり、言葉もそれなりに喋れるようになった、

「ちよつとー、マリアちゃん！、聞いてでありますー、旦那がさあ」

「はいはいなに？、また喧嘩でもしたのかな」

あんとは最初に出会って以降はよく話すようになった、他の人と話している、なんだか胸が痛くなるものだから、この人と話しているのが一番楽というのもある。そして私の部屋に突然上がりこんで、お酒を飲み始めたあん、完全に酔ってる感じで、机にもたれかかっている。「そうなんでありませうよー！、アスカのやつせつかく作った料理をもう食べてきたって言って残していったんでありますよー！、そういうのはほうれん草してくれでありますよー！」

「はいはい、悲しかったねー、でも仲直りは早めにねー」

「うう、マリアちゃんありがとうございませうでありますよー」

私があんを私の膝に移動させた、何時ものことだけど、この日々は悪く無い、だって、心が一番楽になる時間だから。

「そういうえば、なんで私の名前はマリアなんですか？」

私には名前が無かった、本来血式少女は名前を自ずと持つらしいが、そういうものは私には無かった、そんな時、あんが私につけたのがマリアだった。

「んー？、そうでありますねえ、白くて綺麗な髪とかー、癒やされる顔とかがー、聖女様って感じがしてそんな名前つけた感じー、であります」

「ふふ、なにそれ、まあ聖女っていうのも悪くないですね」

「でしょー——ズガア」

「あ、寝ちゃった、まったく、だらしないんですから」

私はベッドにあんを寝かせた辺りで、扉が開き、フユが入ってくる、フユということはつまり。

「実験の時間だよ、マリア」

「……はいはい」

私は、研究室に連れられ、そのまま硝子のケージの中にはいった、それなりに広さがあり、目の前にはメルヒエンが立っている、何時もは毒物を見るような目で引き下がるが、栄養がなく、半ば凶暴状態だ、まあもう一つ理由があるが。

「……それじゃあ、開始」

フユが指を鳴らすと、メルヒエンは私に飛びかかる、そのまま私の腕に齧りついた。

「っ——！」

痛い、肉が潰れ、骨が軋む、けど、反撃はしてはいけない、今はそういう実験だから。

「ギギイ！……ギギ？」

数分経った辺りで、メルヒエンが腕から離れ、もがき苦しみだした、そのまま口からピンクの血を吐いて動かなくなる。

「ふむ、血液を致死量手前まで抜いて、別の人の血を輸血したが、なるほど、効力が現れるまで時間はあったがそれなりに薄くても良さそうだな、さて残りの血でアレを作らないとね、あ、実験終了だよマリア」  
私にそれだけ言って研究室の奥に、フユは消えた。

ああ、本当にこれは慣れない、クソみたいな実験、もう一年経つけど、人の命を度外視してるモノが多い、ブラッドスケルター化だったり、限界まで戦闘させられたりと、本当に嫌になる、けど……。

「……（こ）は」

どうやらあの後私は倒れていたらしい、齧られた右腕は包帯が巻かれ、私は病室のベッドの上だ、そして隣にはあんが寝ている、目元に涙の跡があり、哀しんでくれていたのだろう、本当にこの人はいい人だよ。

「……う？、そういうえばここから目の前のベッドには妊娠していたマールビルさんがいたような……あのー！」

私は看護師を呼んだ。

「なんででしょう」

「あの、あそこにいたマールビルさんは何処に？」

「……退院されましたよ」

ふと、胸に痛みが走った、ただ、牛若丸やあん以外と話すところがあるんだ、本当になんだろう、と、子供の私は思った。

「そうですか、また会えると思っていましたんですけどね」

「……ん？、あー、マリアちゃん！良かったであります！、どこか痛いところは無いでありますか!？」



「いや、特には」

「良かったあ、あー、リングゴ持ってきたでありますから食べるであります?」

「……食べる」

「了解であります!」

ああ、本当に心が楽になる、こんな日々がこれからも続くと、そう思っていた、私は……。

「退院されましたよ」、その言葉に疑問を抱いていたら……私は、後悔せずにいられていたのかな。

### 幕間③ 死体の上の平和 後編①

そして更に一年、私に新たな武器が渡された、メアリガン、可愛い名前と裏腹に、銃弾には私の血液を固めたものを使用して、メルヒエン、及びナイトメアに命中すれば中で血液の破壊が行われ、爆散、あるいは苦しみ悶て死ぬ、らしい、恐ろしいものだ。

次に新しい血式少女がきた、まだ名前はわからないらしく、生まれてからの赤子だ、それから何人かの赤子が黎明にくるようになり……それに伴い最近病院の産婦人科の部屋が空いてきた、私は子供ながら退院したという言葉を鵜呑みにしていた。本当に私は純粹だと……今の私は忌避ししていた。

「ふふ、また蹴つたでありますよ、マリアちゃん」

「それ何回目かな、あんさん」

あんさんは病院のベッドの上、お腹が膨れており、それを大事に擦っている、赤子が生まれる、そうあんさんは言っている、正直コウノトリが運んでくると常々言ってきたのにあんさん、自分の子が生まれるとわかったら手のひら返して人間の雄しべ雌しべごつつンゴだと……まあ、最初こそ驚きはしたけど、もう慣れた。

「うふふ、なんて名前つけようかしらであります、マリアちゃん案は無いでありますか？」

「そういうのは父親と話しなさいな、私がつけたら問題にならない？」

「大丈夫！、もうマリアちゃんは私の子供みたいなもんだし、家族！、つまりアスカも何も言えないキューイーデー！」

「――、ふふ、家族、か」

私はその言葉が大好きだ、自分が一人でない、そう実感できて。

「だからマリアちゃんも私のことお母さんと」

「言わない！」

「もー、恥ずかしかって可愛いなあであります」

「だからそういうの——ん？」

ふと、外で何か騒いでる様子だ、ここは3階の病室、聞こえてくるのは入口辺りだ。

『お——子——マーベル——返せ!』

そんな声が聴こえてくる、なんだろうと窓を開けて下を見ると……そこには黎明の兵士の銃によって男の頭が撃ち抜かれた瞬間だった。

「——え?」

そのまま死体は、兵士によって担がれて、病院の中に入っていった。

「んー?、何が見えたでありますか?」

「その……」

胸が痛む、声に出そうとしても、空気が漏れるだけ。

「……っ!」

「あ!、マリアちゃん!」

私は病室から出て、答えを知ろうと、下に向かう。

到着すると小さな騒ぎになっており、先程の兵士が何か言っている。

『ですから、あれは暴徒だったため、仕方なく殺してしまったんです、

何時ものことですよ』

『そつかあ、最近そういうの多いなあ』

『怖いわねえ、私も襲われたりしないよう夫と一緒にいるようにするわ』

兵士の言葉にまた胸が痛む、本当になんなのだろう、前々からフユに聞いてもわからないと返すだけ。

「……何なんだろう、いったい」

……それから一ヶ月が経過した夜、寝付きが悪く、目を覚ました私は、外に夜風を浴びに出た。

「——気持ちいいな」

空を見上げる、月、満月だ、そういえばあんも好きだったな、今度団子を買いにいこう、その時はアスカと赤子、四人一緒に。

「……戻ろうかな」

『おい、ちゃんと運べよ、壊れてはかなわん』

遠くに闇夜に隠れるように、何かを運んでいる集団を見つけた、あの膨れ具合は……。

「……あんさん?」

私は急いで黎明のビルに急いだ、研究室にあるメアリガンとメルヒエンから作った刀を取りに。

「……よし、あった」

私はそれらを手にまだ遠くに行つてない、どうか間違えであつてほしい、そう思い、研究室から出ようとする。

「おや、マリアか、こんな時間に物騒だね」

突然、フユが現れ、呼び止められる。

「ごめん、急いでいるの」

「……洞窟」

「？」

「お前が生まれた場所、あそこに行つてみるといい」

「……わかつた、あの集団のこと知つてるの？」

「前々からね、連続誘拐犯さ、やつと居場所がわかつたんだ、ワタシに今黎明を動かす力は無いけど、まあガンバ」

……また胸が痛む、この人と話すときはいつもそうだ、本当に安心できない人だ。いや、そんなことよりあんだ、病院に確認に行つてる暇は無いだろう。

「それじゃあ、フユ」

私は急いで洞窟に向かつた、どうか別人であつてほしい、あん！。

「……さあ、見せてくれ、ニンゲンにどのような効果が、そしてオマエの実力を」

○

急いで私は、野良のメルヒエンを掃討しながら、洞窟までたどり着いた、既にメルヒエンがいないはずの場所には、壁にいくつもの目玉のようなものが生えていた。

「不気味ね」

私は奥へ、奥に進んだ、しばらくすると、広い場所についた、そこには先程の集団がおり、中心には……あんがいた。

「あんー！」

私は急いで向かつた、次の瞬間、悲鳴のような奇怪な声が辺りに響き、触手のようなものが天井から伸び……あんの胸に刺さつた。

「ア——ガアアアア！」

すぐに変化が起きた、あんからとは思えない怪物のような……メルヒエンのような声が出され、肉が身体からあんを覆う。

「——マリア」

「あん!!!」

あんはそれだけ言うと、あんだった肉塊は……メルヒエンへと変わった。

「ギギイ……ギガアア！」

『よし！、すぐに銃の……おい、そこにいるのって』

「……何なんだよ、何なのよ！」

私の目がピンク色に輝き、ピンクの光輪が私の後ろに現れる。

『き、貴様！血式少女！』

「何なんだアアア!!」

……それからことはわからない、ただちゃんと記憶してるのは、赤い血に濡れていたことと、あんのメルヒエンによって抱きしめられていたこと。

「ギギ……マリア……オチツイテ」

とてもあんとは思えない高い声だけど、私にはあんだとわかる、心地よさがあった。

「あん……なの？」

私の目から涙が溢れ、目も普通になっていた。

「ゴメン……ネ、コンナコト、ナツテ、ワタシ、ケイカイアマカッタ」  
「なに言ってるの！こんなことわかるはずがないよ！、そうだ！、フユのところに行こう！、そうすればそんな身体も」

「ダメ……ギギ、ダメ、アノヒトノメイレイ、ダツテ、アノヒトガ……ワタシヲサラワセタツテ、イツテタ」

「え？……それは、それは……そんなまさか」

私は怒りに、憎悪に震えた、これまでのことはまだ許せた、けど、こんなことは。

「……ユルシテ、アゲテ」

「なんで！、あんをこんな姿にしたやつを許すって言うんだ！」

「ギギ、アノヒトモ……ジブンガドンナヤツナノカ、サガジデル、クル  
シンデイル、ギギイ、ダガラ、ギギギ」

あんの声が震え、言葉も汚くなつていつてる。あんは私を突き飛ば  
すと、手を広げた。

「ギギイ、コノマ、マダト、カンゼンニメルヒエンニナル、ソノマエニ  
……ゴロジデ」

「そんな……そんなことできない！、いくらあんが化け物になつても  
！、私は一緒にいる！」

「ダメナノ……コンナカラダジャ、オナカノコドモヲ、ギギ、オソツ  
チャウ、ソソナノイヤナノ……オネガイ、マリアチャン！」

「——！！、ああああああ、うわああああ！」

私は……メアリガンの引き金を引いた、銃弾はあんの胸を貫き、あ  
んの身体が崩れていく、壊れていく。

「……ありがとう、マリアちゃん、お誕生日おめでとうであります」

そんな声が聞こえたような気がした……既にあんはこときれてい  
るのに。

「……さようなら、お母さん」

涙が溢れる、止まらない、ああ、私は……なんて……無知だったん  
だ。

## 幕間④ 死体の上の平和 後編②

「ぐっ——うう、うう、ウワアアアアア！」

思考が淀む、キエル……身体から衣服が消え、背後の光輪が禍々しくピンク色に、トゲトゲしくなっていく、目のピンク色により輝き、殺意が、憎悪が、流れ込んでクル、イタイ、ツライ、殺したい、コロス、殺すころす、コロスコロスコロスコロスコロスコロ——。

——駄目だ。

「アアアアあ!!、こんなところで私は!!、止まっていられないんだああ!!」

瞬間、何かが私から消えていく、いや、馴染んでいく、白い羽衣が現れ、白い修道服、白い光輪が現れ、メアリガンも、刀も白く変化している、目はピンク色なのに、血の池に映る自分の姿は……まるで聖女だった。

「……は、聖女?、聖女がこんなにも血で汚れているものかよ……聖女だとしても、私は……そう」  
聖女の子供  
マリアチャイルドで充分だよ。

「……さて、思考も明瞭、いや、今までで一番スッキリしている、いろいろと腑に落ちないことも……全てわかる気がする」

推測として、黎明が、フユがやっていたのは私と同じ血式少女を誕生させることだろう、試しに私は……気が引けるが、あんの腹を刀がカッ捌いた。そこにはピンク色の目をした男の赤子がいた。

「……当たりかな」

この一件だけではないだろう、増えていく赤子、消えていく人々、病院前の兵士が殺した男、前々からやっていたことは明白だろう……ああ本当に、何故私は早くに気づけなかったんだ。そして、あの洞窟の目玉。

「……見ているんだろう、フユ」

私は近くにあった壁の目玉にメアリガンを向ける。

「どうせ貴女のことだ、逃げる算段はついているのだろう、だが、私は殺さない、それがあんの望みなら、復讐なんてしている暇は……私には

ない」

そう、私は……これから黎明を変えなくてはならないんだから。

○ 「……はは、ははははは!!」

隠し部屋、ワタシは椅子に座り、監視カメラの映像を見ていたが、監視カメラは全て破壊され、洞窟は、ジエイルは完全に崩れたことが感じた、しかし、しかしワタシは。

「成功だ!、ついにやってくれたよ! マリア!、アナタなら到達してくれると信じていた、これで!、これでワタシはこの世界が前に進む可能性を手に入れることができた!」

ああ、ホントウに、祝福できる、早いところ、あそこに向かわないと。そう思つて椅子から立ち上がると、トランシーバーから音が聴こえてくる、ワタシは懐のトランシーバーを耳に近づける。

『おい! フユ!、これはどういうことだね!、何故マリアが黎明に攻め込んでくるのだ!』

その声は聞き覚えがある、黎明の長だ、バックの音から人の悲鳴が聴こえる、どうやら攻めてきた感じのようだ、当然かな。

「ははは、自業自得ですね、あれだけの犠牲がでることを行つたんだ、大人しく死んで下さいな、長殿」

『ふぎけるな!!、これも全て貴様が進めてきたことだろう、私はこんなところで死ねないんだ!。もつと、もつと力を、あのマリアのようなちか——』

男の声が途切れ、トランシーバーが落ちる音と、頭が落ちる音が聴こえる。

「ふふ、早いね、ホントウに」

ワタシは白衣を脱ぎ捨て、トランシーバーを捨てて、約束の場所に向かった。

○ 「……これで良いんだろ、マリア」

牛若丸は、長の死体を見ながら、哀しそうな目を向けて言った。

「マリアチャイルドだよ、今の私は」



「そうか……これからどうする気だ、お前の話が本当ならフユに復讐するべきだろう」

牛若丸には黎明肃清の前に、今までのことを話した、怒り、憎悪した目をしていたが、すぐに冷静さを取り戻してくれた、良い心の強さだ。

「しないさ、例え私の中が煮えくり返ろうとも、あんのためなら私は鬼になるし、聖女にだってなってる」

「……お前は本当に強いよ、マリア、マリアチャイルド」

——それから10年、私は15歳を迎えた、最初の頃、私が、黎明、いや、血式少女戦線の長になったときは反対する者が多かった、だが、見せしめの黎明の長の首、様々な事業、メルヒエン、ナイトメアの殲滅などで、私は認められ、いや、畏れられた。あの聖女の姿に何時でもなれ、ナイトメアすら倒せるそれは、メルヘン・スケルター、フユの資料にはそんな名前があった。

私は長の椅子に座り、様々な書類を見てははんこを押している、そこに扉を開いて入ってくる子がいる。

「お姉ちゃん！、またメルヒエン狩ってきたであります！」

私には数十の妹、弟達がいた、鉢かづき姫、カーレン、橋立小女郎、双子の妖精、リリー、サリー、……桃太郎、浦島太郎、金太郎3兄弟、ローザ、ジバル、茨木童子に、ドロシー、そして目の前にいる、あんの子供、一寸法師。イツスの愛称で呼ばれ、私を慕い、私と並ぶほどのメルヒエンを狩ってきた。

「あーはいはい、凄いわね、私仕事なんだけど」

「別にそれだけを言いに来たわけじゃないであります！、カーレンから面白い話を聞いたであります」

「何？」

「……ここに都市を造ろう！、であります！」

○

「これが、全容だよ」

「まで、つまりジャバウオックのやつらって……お前のところのやつらってことじゃないか！」

マチはかなり驚いている、他の聞いていた5人も、いや、グレーテルとヘンゼルは納得したような表情をしている。

「なるほどね、どうりで童話の名前を使われていたわけね、でも彼女達はナイトメアから生まれたって聞いたわよ」

「間違いではないが正確ではない……やつらは一回死んでいるのさ、その死体に、ドロシーにナイトメアの細胞を埋め込まれて、偽の記憶を擬態の力で作られてね」

「……マジかよ、それかなり重要な内容じゃないのか？、何故皆の前で言わない、あ、そうか……そんなこと言えば」

「そうだよマチ、あの二人が聞けば、必ず精神に異常をきたす……一度知っているからね」

「……ナイトメアの細胞が埋め込まれているのに、殺せたのは、そのメルヘンスケルターがナイトメアを殺せるから、かしら、でもフユの言っていた同じ童話のナイトメアの細胞を取り込むか、既にナイトメアの因子があるかでなれるのに、話からしてあなたはブラッドスケルター化を克服、進化して、なったように思えるけど」

「正解だよグレーテル、本来ブラッドスケルター化を乗り越えた先にあるのがメルヘン・スケルター、その細胞を取り込むのもありではある、何人かはそれで行っているからねこっちも、ただ、出力が段違いだよ、例えるならドアがあるとすると、ナイトメアを取り込むのは、ピッキング、ブラッドスケルター化は鍵を使うくらいだよ」

「なるほど、前者だといつも開いているから暴走するリスクがある感じなのね」

「聡明で助けるよ、……ちゃんと聞いてる？」

他の3人はまとも聞いてない感じだ、特にかぐや姫は寝ている。

「……さて、これで話は終わりだよ」

「まで、酒呑童子は何なんだ？、あいつもジャバウオックだったが」

「悪いけどそんな名前は血戦にはいない、が、ふむ……興味深くはあるな、今度調べておく、で」

私は入口のほうを目をやる。何か角が少し見えたような気がする  
「どうした？」

「……いや、なんでもないよマチ、さて、この際だからあなた達……メルヘンスケルターを獲得したくない？」

「……まあね……だが一つ最後に聞きたい、この世界をお前はどうか映る、この平和な世界を」

私は俯き、考えた後顔を上げて言った。

「そうね……こんな死体の上の平和な世界、私は嫌だな」

○

「……なぜ邪魔をする——イツスン！」

一瞬のことだった、ワタシのポケットから出てきたと思ったら、大きくなり、牛若丸の刀を、その小槌と刀が合体した武器で受け止めた、これがあの一寸法師……あんの子供、背は牛若丸より頭一つ大きく、ガタイも良く、黒髪を白い布で隠し、法師といった感じ。

「流石に姉さんの決め事を破る行為は許せないでありますよ、兄さん」  
「くう、だが！、そいつはお前の母を殺したんだぞ！」

「そのとおりだよ、ワタシは間接的に、あんを殺している、牛若丸に切られても構わないだろう、だが死ぬわけにはいかない。ワタシにはやるべきことがあるから」

「やるべきこと？、あんなにも積み重ねた死体の上にあるお前の計画ってなんなんだよ！」

「それは……言えない、言うわけにはいかない」

「……なんなんだよ、それは！」

牛若丸は再び激昂し、刀を振り下ろそうとするが……途中で止めた。

「……っ!!、くそ！」

牛若丸は刀を鞘に戻し、きたドアに向かい去ろうとする。

「マリアから言われているから止めたんだ……そのやるべきことが少しでも僕達を傷つけるものだったなら……迷いなく殺してやるよ」

それだけ言い残し、牛若丸はドアを閉めた。

「……悪かったわね、一寸法師」

「なに、当方も殺したい気持ちがありますから……」

「オメエが話で聞いていた第2戦線の隊長か」

「こちらにも聞いております、黎明の武器職人殿」

「へ、そんな大層なものじゃねえよ……で、そこで何隠れているんだ、ジャック」

ハルは入口のほうを見た。

「……あはは、バレていたんだ」

入口の上にある小さな場所から、ジャックが立ち上がり、姿を見せる。

「大方、高い場所に来て、俺たちがきたから出ようにも出れない状況になった感じか」

「……はい」

ジャックは渋々、そこから飛び降りて、こちらに来る。

「ふうん、お前さんがジャックねえ、一寸法師であります」

「ぼ、僕はジャックです」

ジャックは一寸法師から差し出された手を握る。

「……ふむ、いい手でありますね、ジャック、お前、当方の弟子になれ！」

「えっ……ええええええ!?!」

これは……面白いことになってきたね。

## 幕間⑤ 歌の下手な踊り子

「姫、次は何処に行きましようか？」

「うーん、そうだね、おつうちやんが行きたい場所って何処かな？」

私はおつうちやんと一緒に血戦都市の繁華街のいろんなところを回ってる、新しいマイクとかもあつたけど、私には今のこれがあつて  
いる。

「僕ですか……うーん、そうですね」

おつうちやんが考えながら一緒に歩いていると、人だかりが出来て  
いるのを見つける。

「気になりますか？」

「う、うん」

「それじゃあ失礼しますね」

「わ、わー！」

おつうちやんは私を肩車してくれる、ちよつと恥ずかしいけど、こ  
れで見えるかな。

「♪♪♪」

人だかりの中心には、確か、カーレンって人だったかな、その人は  
綺麗な踊りをしていて、音楽もないのに、まるであるのかのように魅  
せてくれる。

数分後に、カーレンさんはお辞儀をすると、人だかりも消えていっ  
た。

「どうでしたか？」

「うん！、凄い綺麗な踊りだったよ！音楽が無いのが残念だけど」

「あら、見てくれたみたいね♪、黎明のお二人さん♪」

カーレンさんが、こちらに近づいてくる、その足どりも綺麗で、常  
に踊っている感じだ。

「きみがカーレンか、僕はつう、こちらは姫」

「人魚姫です、あの、なんで音楽を使わないんですか？」

「うーん、そうだね、私は衝動とか血式リビドーって言うのかな、踊ら  
ないといけないって思うんだ♪、まあ好きでやってる感はあるけどね

♪、で、何故音楽を使わないと言うと、単純な話、私に合わないからかな」

「合わないって？私からすればもったいない気がするけど」

「私は音楽に合わせてなんて絶対に嫌なの♪、だってそんなの音楽作った人の操り人形みたいだし、私は私の踊りをしたいの」

「なら自分で歌えばいいんじゃないか？、僕ならそうするけど」

「……聞きたい？」

「え、うん」

おつうちちゃんがカーレンさんの謎の圧に気圧されてる、カーレンさん、そんなに嫌なのかな。

「じゃあ……うー♪」

……聞いたのは1分ほどだったけど——酷かった、音程がバラバラで、なんとも言えない歌だった。

「ね？、酷いもんでしょ？、私結構頑張ってるのに一向にこれなの♪、才能がないってやつ♪」

「うん、僕から見ても酷いね……それなら姫と一緒にするのはどうかな？」

「おつうちちゃん!」

「ふむ……試しに歌ってみて」

「はい、じゃあ……」

私も1分ほど歌った——歌い終わると、カーレンさんは肩を震わさていた。

「あの……駄目でしたか？」

「——良い、良いよ!!人魚姫さん!」

カーレンさんは大きな声をあげて、私の手を両手で掴んだ。

「これだ!、私はこの声を待っていたんだ!、どうか私の踊りを歌ってくれないか!」

「ええ!」

「ちよつとカーレンだったけ、僕の姫に何を勝手に」

おつうちちゃんは手を離そうとしてるけど、別に強い力で握ってないのに離れない。

「一曲！、一曲だけでいいから！」

「いや、別に私断る気は無いんですけど」

「良いのかい！、やったあ!!」

カーレンさんは手を離して、背を向けてガッツポーズをしている、本当に嬉しそう。

「じゃあ、広場に行こうか！」

「あの、練習とかは」

「そんなことしてるほど私は我慢強くないよ！、ほら！」

カーレンさんは私を抱えると、全速力で走った、おつうちちゃんも追いかけてきてるけど、追いつけそうにない。

広場の中心にやってくると、すぐに人が集まってくる。

『お？、今日も踊ってくれるのかなカーレンちゃん』

『あら、同い年くらいの娘が新しくいるわね、これは楽しみね』

「さて……人魚姫さん、私は踊るから貴女はただそれを見て感じたことを声に出して欲しい、簡単ではないのかもしれないけど、お願いしたい」

「あ、はい……」

「それじゃあ、レッツダンスング！」

カーレンさんはそう言って踊りだした、やっぱり綺麗だ、これに合わせるべきなのは……うん、そうだ、合わせるんじゃない、感じたことを歌にするんだ。

「ら〜♪」

「いいねえ、やっぱり貴女は最高だよ！」

私とカーレンさんは思う存分、歌い、踊った……。

日が沈むかけの頃、私とカーレンさんは終えて、汗だくになりながら、静かにお辞儀をした。それと同時に集まっていた大勢の人達の拍手喝采が耳に響いていく。

『良かったぞー！二人とも！』

『ええ！、こんな良い見せもの、そう見て聞けるものじゃないよ！』

「はあはあ……カーレンさん、これで良かったんですよね」

「ええ、最高だったわよ人魚姫さん……あの、それでなんだけど」

「どうしましたか？」

「これからも……またこうやって歌ってもらえませんか？」

「なんだ、そんなことですか、はい！、私からもお願いします！」

「！、ありがとうございます！」

その後おつうちちゃんにカーレンさんが怒られていたけど、こういうのも悪くないかなって思えたな。



## 幕間⑥ 鉢被りの悪態少女

「はあ……」

私は親指姫……今は血戦の町中をウロウロしてる、それで道すがら子供子供と言われてちよつと心が疲弊してる、ジエノサイドするほどじゃないけどね。

ネムも白雪も今はいないし、はあ……。

「ねえ、そのの、お人」

私はそう呼ばれ振り返ると、そこには大きな鉢を被った女の子がいた。

「あんたって、確か血戦の」

「はい、第2戦線所属の、鉢かづき姫と、います」

「ふーん、その鉢かづき姫さんが私に何のようで？」

「はい、単刀直入に言いますとですね——そんなヨワヨワな力で、あの子達を守れますか？」

……うん、キレたわ、なにこいつ、急に悪態ついてきたわね。

「喧嘩なら買うわよ」

「買えるほど強くありませんでしょ？」

こいつ……、私はカードを取り出して、そこから火球を放つ。

「うーむ、弱いですね、マチという人の下位互換ですかあなたは」

鉢かづきは中指を弾くと、私の火球を消し飛ばした、ちい、もつと魔力込めないと、でも……。

「いや、あのイレギュラーの下位互換というのもおかしいか、実力が違いすぎるからねえ」

「お前……」

「ああそれにしても、こんなに無駄に虚勢を、いやツンツンと言うのかな、こんな娘を慕っているなんてあの二人も弱いんだろうなあ」

「——わかったわ、やってやるわよ、私の全力で！」

私は魔力をさっきの倍をカードに込める、巨大な火球を作り出し、放つ、通る人のことなんて知るもんか、私はこいつを……！。

「……ま、こんなものか」

鉢かづきは両手を合わせた後、両手を広げる、すると透明な壁が現れて、火球を防いだ、更に火球が爆発する瞬間、箱のように透明な壁が他に4つ現れて爆発を抑えた。

その後、攻撃が来るのかと身構えたけど、一向に来る気配がない。

「……………どうしたの、攻撃しないの?」

「……………ふっ、自慢じゃないけど私には攻撃と呼べる魔法は持ちわせてないもので」

「はあ!?、そんなんで楯突いてきたの!?!」

「うん、でも事実でしょ、そんなんじゃないしよ……………ドロシーには遠く及ばない」

「ドロシー……………」

監獄塔の頂上で現れた魔法使い、推定ジャバウオックの首領……………私なんかには遠く及ばない魔力量……………、私はあのときのことの恐怖を思い出して、怒りの血の気が引いていく。

「少しは冷静になったかな、私が煽ったのもあるけど、ごめんね、本気の魔法を見たかったの、今のあなたのね」

「……………私をどうしたいの」

「簡単な話、私には戦う力が無い、できるのは守ることと、瞬間移動くらい、だけど私にはあなた程度では知らない魔法の知恵がある、一つ提案、あなた、私の弟子になりませんか?」

「……………はあ!?!」

私は驚きの声を上げる、いや、でも地上に出たときお荷物だったわけだし、どうなの?。

「妹達を、守りたいんでしょ、事実そんなヨワヨワな火力じゃその辺のメルヒエンなら一人でいける、普通のナイトメアならマチ以外が集まっていけば倒せるでしょう」

普通のナイトメア?……………核のないナイトメアのことかしら。

「だがジャバウオック、こちらでの、言い方なら屍ネクロ悪夢少女ナイトメアガール、ならお前らは抵抗することなく、やられるだろう」

「でも今まで普通にやれていたわよ」

「浦島太郎や酒吞童子のことでしょうけど、それはメルヘン・スケル

ターやマチの手助けあつてのこと、どちらもあなた達はお荷物だったんじゃないかしら」

「ぬう……」

事実ね、何時も戦っていたのはつうやマチ、ジバルのときも戦えて無かった……。

「——わかったわよ、けど！、強くならなかつたら承知しないわよ！」

「いいわね、やる気はじゅうぶんって感じ、辛いわよ?」

「上等よ！」

つうやマチ姉には頼らない、強くならないと、私も妹達を守る力を。

## 幕間⑦無力の天才鍛冶師

「ふー、はー」

マリアチャイルドに設けられた自室で、俺はサンドバッグを殴っていた、日課のようなものでもあり、今の自分ではヒカリに守られてしまふ、あの地上に出てすぐに現れたメルヒエン、あいつらは普通に戦っていたが俺達にはジェイルとは比べられないほどに強い力が感じられた、俺は腰を抜かし、ヒカリは俺の前に立っていた。

「はあー」

サンドバッグを貫く、中のクズ布が出てくる、ここに来て5個目が駄目になった、サンドバッグは壊せても、俺にはこの地上の一番弱いメルヒエンにも勝てる気がしない、だけど、こんなところでただ守られているなんて、俺は嫌だ。

「だけど、人間の俺には限界がある……どうすれば」

「人間さん、苦悩してるねリリー」

「そうだねサリー、苦しそうだよね」

「!?、誰だ!」

俺はベッドのほうを見る、そこには蝶のような羽を生やした同じ顔の少女がそこにはいた。

「わたしサリー」

「ぼくはリリー、苦しんでるね、人間さん、あ、この羽偽物だよ、今は飛べないよ」

同じような声で混乱しそうだが、サリーは赤い羽、リリーは青い羽という違いでなんとかするしかないか。

「何のようだ」

「わたしはただ導くだけ、その目をしてる人間はあまりいないから、ついてきて」

「まあぼくたちについてこれただけだね」

「!、まて!」

リリーとサリーと名乗った双子は、窓から飛び出していった、一体何なんだ、俺も窓から出て、近くの木に飛び移る。

双子はまるで羽毛のように軽やかな足取りで家々の屋根に飛び移り、なんの迷いもなく走っている。俺にはそれほどの身体能力は無く、地を蹴ってあいつらを追っている。

しばらくすると、裏路地に入り複雑な道を通っていく、俺の体力がもうすぐ尽きるかの時、双子はある扉の前で静止した。

「やるね、ぼくたちについてこれるなんて、驚いたねサリー」

「そうだねリリー、わたしの予想ならすぐにバテるはずだったけどね、ま、それじゃあ人間さん、わたしたちはこの辺で、後はきみ次第だよ」

「あー、おいいきなり現れていきなりなんなんだよ！」

双子は高く跳躍して、再び家々を飛び移ってこの場から消えた、そして俺の前には一つの扉だ、やつらが連れてきたここに何があるっていうんだ、まあ無駄足で終わるのもしゃくだし入るとするか。

「ごめんください……と」

俺は扉を開き、中に入ると、すぐに鉄の匂いが鼻をつく。温度も外よりかなり暑く、まわりには重火器から近接武器など様々な武器が飾られている、これは……鍛冶屋か？。

「……誰だ」

その奥にある、カキンカキンと金属がぶつかる音の先には、赤く熱くなっている鉄を、叩いている人がいた。

「えっと、なんか双子に誘われてきた……です」

「ほう……あのガキ達か、それなら盗人ってわけでは無さそうだな」

その人は叩くをやめて、俺のほうに振り返る、年は40代くらいか、髪や顔は整えられてはいるが、服はボサボサで、黒い汚れが多数見える。

「……アスカだ、お前は」

「マモル、えっと、ここは鍛冶屋なのか？」

「ああ、それも……血式武器専門のな」

「血式武器か、つまり血戦御用達の鍛冶屋ってことか？」

「まあそうなる、とりあえずここで話していると熱中症になるだろう、こっちだ」

アスカは右のほうにある、ドアを開き、中に入った、俺も続いて中

に入ると、冷たい風が身体を癒やし、目の前にはソファアールと長テーブルがある、来賓室、休憩室とも言うやつか？。

「座れ」

俺は言われた通り、ソファアールに座る、アスカは俺と反対側のソファアールに座った。

「さて、ここに血式少女以外がきたということは、お前は少女達に任せずに、自らが戦いたいと思ってるってことだが」

「ああ、その通りだ」

アスカは俯くと、目を鋭くして、話を続ける。

「そうか……、この血戦都市には敵は4種類いる、一つはメルヒエンやナイトメア、これはお前らも知ってることだな、もう一つは白月教団、ナイトメアの因子を取り込んでやがり、白い月、それに類する少女を信仰してるイカれたやつらだ」

白月教団……確か血戦とは敵対関係だったか。

「次にネクロ・ナイトメアガール、ドロシーが組織した、血式少女の死体を主戦力としたやつら」

シンデレラの死体のやつらか、明らかに意思はみなれなかったが。あるやつらもいるのかね。

「そして最後にジェノサイド・ピンク、血式少女とほぼほぼ同じやつらだが傲慢で自己中心的、その中でも処刑台少女と呼ばれるやつらは強大な戦闘力と殺戮衝動を持つてるらしい」

……初めて聞いたよな？、なんで知らんが、前にも何処かで聞いたよな……いや、今は気にしないでおこう。

「そして、お前ら人間は、そのどれにもまともに勝てない、無駄に命を散らし、最弱のメルヒエンでも犠牲が出る、非効率的だし、血式少女に任せるのが普通の人間の考え方だ」

確かにそうだろう、ジェイルでもまともにメルヒエンを戦おうとは思わなかった、ハーメルンの時だって皆で……？、いや、あのかきはすぐに花坂さんに助けてもらったわけだよな……どういことだ、勘違いにしては実感があるよな……いや、そんなことよりもだ。

「俺は……勝つために戦うんじゃない、守るために戦うんだ、ヒカリを

守れば、メルヒエンを殺せなくてもいい」

アスカは目を丸くして、再び俯き、苦笑した、どこか悲しそうな目をになると、俺のほうを見る。

「……僕にはそんな意思は持てないな、守るべき我が子を人を導く立役者、力の無い僕にできるのはこうやって戦う武器を造ることだけ……良いだろう、マモル、お前に武器を造ってやる、メルヒエンに特効のある武器をな」

「ほ、本当か！」

「ああ、そのグローブから見て拳で戦うんだろう、一週間待て、その時になったらお前の自室に直接渡しに来る、ただ、僕の武器を持つということは」

「わかってる、覚悟はしているさ、メルヒエンと戦うことを強いられるんだろ」

「……物分りの良い子供は好きだよ、それじゃあ僕はきみの武器を造る、帰ってもいいよ」

「ああ、ところで採寸とかはいいのか？」

「お前の手を見ただけでわかる」  
「すげえな」

○

マモルが帰り、アスカは一人、ソファアに座っている。久しぶりの前を向いた人間、ただ力を求めるやつらとは違う、守りたいという意思を持った人間、自分には無い心の強さを持っている人間、アスカにはそれが眩しくて、嫉妬してしまうが、どこか満ち足りている。

「お父さん、久しぶりに良い顔してるね」

いつの間にか部屋の端に、マリアチャイルドが立っていた、しかし、アスカは驚くことなく、笑みを浮かべる。

「マリアか、仕事はいいのか」

「終わらせて来たよ……あなたは強いですよ、残された父親はこの都市には多い、私達を恨む人は多いでしょう、なんせ母親が死んだ原因にもなった子供なんですから」

「恨まないさ、僕には、そんな資格はない……無力な僕は、知っていた

んだフユが行っていた計画も、あの子供達が何処から来たかも……あんなには来ないと、現実逃避していた、僕にはそんなことは許されない、むしろきみが恨むべきのはずだよ、マリア」

マリアチャイルドは何も言わずに、アスカの隣に座る。

「……恨みませんよ、あなたは無力なのかもしれない、だけど、誰に力を与えることはできる、私にとって、貴方は誇りべき父親ですよ」

「——マリア」

久しぶりに、アスカは泣いた、それをマリアチャイルドは優しい笑みを浮かべて、彼を抱きしめた。



## 幕間⑧ 足癖の悪いウサギさん

「……はー、休日だけでも、やることないなあ」

私は因幡の白兔、というコードネームで白月教団の戦闘部隊、満月の隊長を務めている、久しぶりの休暇を貰って、頭の耳を隠すために帽子とフードを被り、町中に繰り出したのは良いが……やることが無い。

うん、私って基本戦闘しかしないからな、趣味と呼べるものは無いに等しい……。

「よし、帰って寝るー！」

そう思い、帰路につこうとした時、ある二人が目に入る。

手には大量の袋、形からして服だろうか、それを持っている青い長い髪の女性がこちらも長く、金髪の少女が窓に張り付いているのを引き剥がそうとしている、確かあそこは食べ放題のお店だったか。

「らぶらぶー、いい加減離れてくださいまし！」

「うー！、ラプンツェルあれ食べたい！、食べたいの！」

「もうお金がありませんのよ！、それにらぶらぶが最初はただついていくだけって言ったじゃないですのー！」

どうやら、既に服にお金を使ったらしく、らぶらぶなる少女は食べ放題にいきたいらしい。

「……はあ、あの、そこのお二人ども」

私はため息を吐きながら彼女らに近づいて声をかけた。まあただ寝るよりは有意義なるかな。

「な、なんですの」

ああ、やっぱり警戒されたか、こんなフードと帽子被った怪しい人物、私なら蹴りそうだ、それに今夏っていう季節だし、でも脱ぐわけにはいかない、ここの人達には顔がバレているからな。

「ああ、すまんな、私は……あ、アンナだ」

一応本名だ、それにしてもこの二人、何処か不思議だな、身体がぎわつく。

「アンナさんですか、それでわたくし達になにか御用でも？」

「ああ、それは」

○

「おいしー！、おいしーよどれも！」

『お客様、あまり大きな声は他の客の迷惑になるので』

「す、すみませんですの！」

二人は青い髪の方はシンデレラ、金髪のはラプンツェルというらしい、シンデレラはラプンツェルが大声で感想言っただけで店員が注意してきた、シンデレラは謝っている。

若干今の声でキンキンする。

「はあ……えと、アンナさんでしたか、すみませんね、お金出してもらって」

「別に良いですよ、私だって暇持て余しやがってましたから、3人で15000円でしょ、安い安い」

まあ実際自由に動かせる金が多くて腐るほどあるからな、さて、それよりもシンデレラにラプンツェルか、血戦には確実にいなかったが……、情報が正しいなら汚染地帯から来たやつらか。なら。

「なあ、シンデレラさん」

「シンデレラでいいですわよ」

「ガツガツガツガツ」

ラプンツェルは一心不乱に食い物を食べてる、あれだな、なんか精神が削れるテーブルゲームでこんな感じなのあったな、いやそんなことよりもだ。

「シンデレラ、あなたのところにかぐや姫っていうジェノサ——血式少女はいやがりませんか？」

「……はい、いま」

シンデレラが言い終わる前に、銃声が響き店の窓硝子が割れる。

『おい！、全員動くな！、金を出せ！』

更に扉から数十人ほどのフェイスマスクを被ったいかにもすぎる強盗が入ってくる、いや本当今どきやるか？。

「な、なんですかの!?!」

「とりあえず手を上げとけ」

シンデレラと私は手を上げる、まあ数分経てば、店の中は連絡は無理でも、外の人が通報するだろうね、その間に人が死なないとは限らないが。

覆面どもは店の金庫やレジスターを叩いて壊して、中の金を袋に詰めていく、手慣れた動きだ、何回かやってる感じがあるね。

『おい！、そのガキ！』

覆面どもの一人がさつきから食ってるラプンツェルのほう、つまり私達に近づいてくる、まあ目立つよねそりゃあ。

「ガツガツガツガツ」

『おい！、聞いてんだよ、お前だよ！金髪のガキ！』

「あー、えつと、あまりその娘に構わないで欲しいな、生きて帰りたいなら」

『ああん！、てめえには聞いてないんだよ！』

覆面はラプンツェルに銃を向ける、それに反応してシンデレラが蹴りを……入れる前に私がその銃を持った腕を蹴り、Vの字を曲がった。

『ぎ、ぎやあああ！』

覆面は悲鳴を上げて気絶したのと同時に、他の覆面どもも私達に銃口を向けた。

「あー……はあ、穏便にすませたかったんだけどなあ、まあこっちのほうが性に合ってるか」

「アンナさん？」

「大丈夫、あなたの手を借りる必要は無い」

私は肩を鳴らし、軽く跳ねた後、覆面どもに近づいていく。

『く、来るんじゃない！、うつぞー！』

「どうぞ勝手に、こっちは久しぶりの休みを満喫していたんですよ、五体不満足で返してやるから覚悟しやがれ」

『く、うてえー！』

お、馬鹿かな、どうやら真ん中のあいつがリーダーらしい、他の覆面達は銃をぶっ放す、この程度、汚染動物が混じった私にはゆっくり

なもんだ、スルスルと弾を避けていき、リーダーの男にドロップキックをかました……あ、いや、まずった。

「……わー、うさぎさんー!」

「あら、可愛いですわね」

ちよつと冷静さかいていたな、さつきのドロップキックの勢いで、帽子が取れてしまった……、隠していたうさぎの耳が見えてしまい、普通なら可愛いと思うだろうな、外から来たシンデレラとラプンツェルなら、だが私を知ってるやつなら違う。

『ひい!?、てめえ、因幡の白い兎かあ!?』

『な、なんでこんなところに、誰か血式少女を!?』

客も強盗も戦々恐々である、いやどうしようねこれ。

「あー……うん、お前ら金置いて去るかここで命日にするか決めてください」

『ひ、ひいいい!!』

強盗達は一目散にリーダーを連れて外に出ていくが、そっこうで外にいた血戦の兵士に取り押さえられた、いや、いたのか。

「あの、アンナさん?」

「……ここで会ったことはナイショでお願いする、じゃあ」

私は割れた窓から飛び出して、この場から去った……結局かぐや姫いるのかとか聞けなかったな。

○

「あー、おいしかった!、またきたいね!」

「わたくしはごめんですわ……それにしても、アンナさん、皆さんから恐れられていましたが、そんなふうには見えませんよね」

「うん!、ラプンツェルもいいひとだとおもったよ!」

「ですわよねえ……また、会えるでしょうか」

シンデレラとラプンツェルは、アンナにまた会えることを思いながら、マリアチャイルド用意された寮に向かって歩を進めた。

## 幕間⑨ 処刑

——ここに、書き記した日記の郊外は、禁じる。

〇〇〇〇ねん〇月〇日

私はある者のもとで暮らしていた。

そいつは人を球根に人を近づけて寄生させて増やしていた、私はその者に拾われ、そいつの言うとおりに動くことを強いられていた、裏切ればやつのジェノサイド・ピンクにより、死に至るだろう、死ぬわけにはいかない、私にはまだやるべきことが残されているのだから。

〇〇〇〇年〇月〇日

あれから6年が過ぎた、私には隠し事があった、3人のジェノサイド・ピンクをやつに隠れて育てていた、名は処刑人の剣、スコッチ・メイデン、ハリファックス断頭台、スコッチ・メイデンとハリファックスは同じ腹から生まれており、双子の姉妹なのだろう、もう一人の処刑人の剣、とは呼んでいるが、本人はサンソンと呼んでほしいらしい、男の名前だがれっきとした女の子だ。

〇〇〇〇年〇月〇日

やつがあの子達の存在に気づいた、このままでは私は確実に死ぬことだろう、だが、このまま彼女達をやつに渡すわけにはいかない、やつは狂っている、そんなやつは元で育てば、人間に牙をむく存在になり果てるだろう、そんなことは許せない、彼女達は良い子だ、殺人衝動こそ強いがちゃんとした親のもとで育てば、あの衝動にも打ち勝ち、人間として暮らせるはずだ、信頼できる場所がある、黎明、今では血式少年少女戦線というのだろう、そこにいる私の友人に彼女達を預けることにする。

我が娘たちよ、もしまた会えたなら、その時は  
優しく抱いてあげたい

(血で読みにくいがそう書いてある)

〇

『お、おい！、何処なんだここは!?!』

ある一件で強盗を行おうとした集団は、ある場所に連れてこられ

た、気絶させられていた男達は目を覚まし、辺りを見渡す、ところどころに赤黒く汚れたその場所は、男達は嫌でも理解できてしまうだろう。

「処刑場だよ、貴様らのね」

目の前の鉄の扉が開き、一人の男装をした少女が入ってくる、その手には剣が握られ、優しい笑みを浮かべている。

『なんだよあんた！』

「そうだね、自己紹介しよう、サンソン、処刑人の剣とも呼ばれる者だ、所属は血戦第0戦線、処刑道具のジェノサイド・ピンク、まあ貴様らのような悪人を殺すゴミ処理担当の戦線かな」

『じよ、ジェノサイド・ピンクだと!?なんでそんな大悪人どもが血戦にいるんだ！』

「丁寧に全て答えてあげよう、最期だしね、僕達は公表されてないから当然だよ、いや、あの二人は違うかな……さて、痛みはない、一瞬で死ぬことができるよ、ここではね」

『ほ、本当か?』

男達の一人が前に出る、その表情には恐怖はないが絶望が滲んでいる。

『おらあ、もうこんな生活こりこりだったんだ、母も父もいねえ、ああ、お願いしたい』

「……では」

サンソンが人振り、剣を横に。男は（ありがとう）と、口だけ動かすと、首は一人でに、落ちてった。血は流れず、ただ静かに身体は倒れた。

「……来世では、きっと良い人生が待ってますよ」

サンソンは男の開いていた目を閉じ、残りの男達のほうを向くが、そこには既に男達はいなかった。

「……後悔は先にたちませんのに」

男達は必死に走っていた、死ぬわけにはいかなない、俺達はまだ稼ぎ、豪遊したいんだと……それが血戦に暗黙に許された、刑までのキップだと知らずに。

『はあ、はあ、ひ、光だ！、やったぞ！外に』

男達がそこまで精いっぱい走った、そして、出口だと思っていた場所は……もう一つの処刑場だった。

空は開き、鳥が数匹入ってくる、日の光が処刑場を照らし、鳥たちはそこに居る処刑人の二人の肩や頭に乗っている。

「……空は良いよね、青くなったり赤くなったり……黒くなったり、僕は好きだな、サリー」

「そうねりりー、私も好きよ……さて、悪人の皆様、楽な死は既に消えています、では、それを捨てた皆様には、苦しみの果ての死を、行きましょう、スコッチ」

「はい、ハリー」

先程まで普通の肌だった色が、青黒くなり、角も生え、目も青くなる。二人は服を脱ぎ捨てると、その下から白い戦闘用の服が姿を見せる。

『ひ、ひいいい!!』

男の一人が逃げようと、先程の道に戻ろうとするが、既に閉まっている。

「では、まずは一人、右手を」

「ええ、一人、左手を」

スコッチとハリーはどこからともなく斧を取り出し、一瞬で、逃げようとした男の右手を、左手を切り落とした。

「あ、ああアアア!!」

男は苦悶を声を上げる、その様をスコッチとハリーは苦々しげに見つめている。

『ま、待ってくれ！、もう強盗はしない！、それに俺には家族が』

「何か言ってるね、スコッチ」

「うん、言ってるよハリー、いったい何回言っただろ、いったい何回同じ罪を重ねたんだろ、一回なら反省させて許す、2回は罰を持って許す……3回以降は刑によってその罪を許すよ」

『ま、待て！、待ってくれ！、まだ死にたく』

その後は凄惨であった、急所を外し、できる限りの最大の苦しみが、

苦悶が、後悔が彼らに襲いかかる。

一時間に及ぶ刑は終了する、辺りには血が、肉が散乱している。

「……サンソンに……姉のところでおとなしく殺されてれば良かったのね、リリー」

「ええ、サリー、さて、血で濡れちゃったね」

「……ご苦労さまでした」

閉じた扉が開かれ、サンソンが入ってくる。

「辛い役回りをさせてすまないね、二人とも」

サンソンは悲しそうな顔をする、二人はそれに笑顔で返した。

「いえ、わたし達がやるべきことなので、サンソン姉もお疲れさまです」

「うん、僕からもお疲れさまです、さて、身体を洗ったら、マリアチャイルドの命令が無いカタワーにいつて、無かったらスイーツ食べいこうか」

「わーい！」

3人にはある約束があった、大切な親からの約束。

「君たちが殺すことを強いられている、だから止めはしない、けど、悪人だけだ、許されない悪人のみを、わたしのわがままかもしれない、けど……約束だ、守ってくれたらなら……わたしは嬉しいな」

その言葉を守り、いつか親と再開できることを願って、彼女達は今日を生きていく。



## 幕間⑩ 王子様

「姫、次は何処に行きましようか」

「うーん、そうだね、おつうちゃんは何処行きたい？」

「僕ですか？、僕は……この血式少女隊の服以外の物を買いたい、ですかね」

ジエイル脱出から一ヶ月、僕は姫と一緒にこの血戦都市を見回っていた、それだけなら何時ものことだが。

「ねね♪！、もしかしてジエイルではまともに服とか無かったのかな♪、それなら私オススメのところがあるんだけど♪」

「カーレンちゃんのオススメ！、行く行く！、おつうちゃんも良いでしよ！」

そう、カーレンも一緒なんだ、あれから二人は趣味が合うのか、歌と踊りというリビドーが合うのか、今では親しい友人になっていた、正直嫉妬しないと云われるとウソになるけど、近い趣味を持つ少女はジエイルにいなかったし、ここまで仲良くなれたのはカーレンが初めてだろう。

「おつうちゃん？」

「つつちやんどしたの？」

「あー、うん、行くよ僕も、後つつちやんって何さ」

「かわいいでしょ？」

「そういう問題ではなくて……ん？」

『キヤーー！』

これは、悲鳴？、いや歓声か、それが服屋の近くできこえる、カーレンのときのような人だかりができていて、見た感じ老若様々な年齢の女の人が集まっている。

「なんだろう？、カーレンちゃんは何知ってる？」

「あー、これはあの人かな♪、はいはい退いて退いて♪」

カーレンが近くに来ると、人だかりがカーレンが進む道にだけ無くなる、僕と姫もそれに続いていく。

「ああ、やっぱりあなたか、サンソン」

人だかりの真ん中には、見た感じは容姿が整った、金髪黒目、中性的な見た目の、僕から見ても王子様のような人がそこにはいた。

「おや、カーレンか、僕になんかようですか、今僕は新しい服を買って、お姫様達に僕の姿を見せていたところだけど」

「ははは、邪魔なんだよ、なんで私オススメの服屋に集まらせていたんだ」

「おや、これはすまない、お姫様達が今すぐ撮りたいと言うものだから、これは詫びです」

サンソンと呼ばれる人はカーレンの手を取り、手の甲にキスをした、カーレンは身震いをしたあと、思いつきりサンソンに腹に蹴りを入れようとした。

「やめろって前から言ってるよね！」

「——あはは、困ったお姫様だ」

僕では視認できなかった蹴りを、サンソンは腰につけていた鞘から抜いた剣で受け止めた——そしてその剣から、微かながら血の匂いを感じた、それもメルヒエンのような甘い匂いではなく、鉄臭い、人間の血の匂いが。

「お、おつうちゃん、サンソンって言うの剣から……」

「姫も感じたのか、その匂いに立ちくらみをした。」

「姫！」

「おや、やはり人前で剣を見せるものではないね、大丈夫かな、お姫様」

僕はすぐに支えようとしたとき、それなりに離れていたのに、サンソンが姫を支えた。

「だ、大丈夫です、ですけど……その剣からなんで人間の血の匂いが？」

「そうだ、血式少女ならメルヒエンの血の匂いがするはず、人間の血の匂いがするなら、それは人を殺しているジェノサイド・ピンクだ。僕はすぐに腰の剣を。」

「待て、そいつは大丈夫だ」

抜こうとしたとき、カーレンが静止した。僕は少しムツとしながら、カーレンの言葉を待つ。

「ここで話すことではないかな、サンソン、お前も気軽にその剣を抜く  
な、血式少女にはその匂いは洗ってもわかるものだ」

「ふふ、すまないねカーレン、華奢なお姫様も、男装をしているお姫様  
も、ゆっくり話せる場所に招待しよう」

○

僕達は、地下にある、静かなレストランに来た、あまり人はおらず、  
疎らで、僕らはその端のほうの席に座った。

「さて、とりあえず少しハメを外すけど、良いかなカーレン」

「ご自由に、ここの人達は寛容だから」

「では」

そう言うとサンソンの見た目が変わっていく、頭から角も生え、  
目も青くなり、肌も灰色で、心の底から恐怖を覚える……いや、こ  
れは、思い出す？

「――処刑台少女」

僕の口から知らないはずの言葉が出てきた。

「おや、カーレン、もしかして教えたのかな」

「いや、一言も発してない、つまり、そういうことかと、姫ちゃんも同  
じかな」

「は、はい、何か知ってるんですか」

「ふむ、その口ぶりだと思いついたのは名前だけ、か、サンソン、この  
際、自己紹介ついでに話してみては？」

サンソンは少し考える動作をしたあと、口を開いた。

「……僕はサンソン、正式名称は処刑人の剣、処刑道具の概念が擬態化  
したジェノサイド・ピンク、処刑台少女だよ、ああジェノサイド・ピ  
ンクというのはわかりやすく言うとな野良の血式少女とだけ覚えてお  
くと良い、血戦都市に属しているから、僕も一応血式少女の枠に入る  
かな」

……何か大事な部分を言っていないような気がするけど、とりあえず  
味方って言うことでもいいのかな……ん？、少女？。

「えっと……もしかしてサンソンって女の子なのか？」

「ん？、なんだ、僕のこと男と思っていたのかな、男装のお姫様」

む、男装のお姫様……僕はそれにかんさわった。

「僕は王子様だ、姫のね」

「——へえ、王子様、君もなのか、それにしてお胸が大きいけど、大きいけど」

（何故2回？）「別にこんなモノ望んでなかったわけじゃない、さらし巻く必要あって苦しい」

「——」

「——つつちゃん」

「おつうちちゃん……」

あれ？、なんか姫含め、3人の視線が痛いな、何かいけないこと言っただかな。

「と、とりあえず、サンソンって何の役割をしてるんだ？」

「そう、だね、僕は第0戦線、役割は……罪人の第一処刑、かな」

処刑……名前の処刑人の剣だから薄々わかってはいたけど、この都市そんなものまであるのか。

「第一処刑ってことは、第二もあるんですか？」

「お姫様、正解、僕の第一処刑は安楽の処刑、痛みも無く、安らかに、血を流さずに、罪人の首を落とす……その域までいくのにそれなりの時間は要したけどね、そして僕の処刑を拒み、逃げた者は第2の我が妹達による苦痛の処刑、まああえて言わなくてもわかるね？」

「な、なるほどです……」

「……ま、話はこのくらいにして、レストランに来たんだし、飯を食べよう、オーダー！、牛乳パフェ一つ！」

「あ、私も♪！」

「私もお願いします」

皆牛乳好きだなあ。

○

僕はハンバーグを食べて、皆は牛乳パフェを食べてレストランを出た。

「今日はありがとうございました」

姫は元の姿になったサンソンにお辞儀をする、僕も一緒にお辞儀を

すると、サンソンが僕の耳元で囁いた。

「今度王子様について語り合おう」

「え、あ、うん」

少し困惑しつつ、僕は了承した。

「そっか、じゃあ人魚姫さん、つう、また会おう」

サンソンは、それだけ言うと、走り去った。

「何だったんだ」

「……姫ちゃん、つっちゃん」

「だからつっちゃん呼び——」

訂正しようとしたが、あまりにもカーレンが神妙な面持ちだったため、言葉が詰まった。

「栓が抜けたんだ、もし、流れてきても、取り乱さないこと」

「な、なんの話だ」

「カーレンちゃん、それってどういう」

「……」

カーレンは黙って返答を待っている、流れてくるって、いったい、それに栓って。

「わかったよ」

とりあえず僕と姫は了承した、それを聞くとカーレンは笑みを浮かべた。

「そ、じゃあお二人さん、今日はこのへんで、しーゆる♪」

カーレンはそう言って、走って去っていった……何だったんだろ  
う、さっきの言葉。

——その答えは、一ヶ月後に理解することになった。

## 幕間1 1 山での邂逅 出会い

「……よしー、テントよしー、折りたたみテーブル、椅子よしー、具材、調理器具よしー!」

マチは一人、近くの（徒歩2時間、走ってマチなら30分）山の頂上の、開けた場所でソロキャンを始めようとしている、夢に見た山でのキャンプ、ふふふ、わくわくが止まらないぜえ。

「さーて、赤ずきんとシンデレラは珍しく用事があるとかでないし、本当にソロで……ん?」

動物は軒並みいないとして、虫の羽音が聞こえる、それだけなら良い、それがキャンプの環境音だから、だが何故寝息が聞こえるんだ?、それも3人も。

「……何故」

幽霊とかは信じないが、正体は知っておいて良いかもな、マチはその聞こえた方向に、マツチを両手に持って向かった、木々の間を通りながら、奥へと進んでいく、すると、そこには、草を寝床に、眠り姫とその胸の上で寝ているラプンツェル、そして長靴を履いた、猫のような寝方をした猫耳を生やした知らない少女を見つける。

「……おい、起きろ眠り姫、ラプンツェル」

眠り姫を揺ると、胸が右へ左へと揺れる、ぐぬぬ、眠り姫は目を擦りながら、身体を起こす。

「……ふわ……、あ……マチだあ……」

「うーん、あ、マチ!」

ラプンツェルも起きて、元気な笑顔ですマチを指さす。

マチはため息を吐く、この様子だと別に攫われたとか、迷子なわけではないのか、いや迷子の線はまだあるか。

「うん、マチだが、で、なんでこんな寝ていたんだ」

「うん、それは」

ラプンツェルが言う前に、マチは背後に忍び寄る者を、身体を捻り、蹴りを入れる。

「ニヤははー、怖いにやあ、別に膝カツクンをするだけにやのに怖い怖

い」

猫耳の少女は戯けたように、笑う、その様子に悪意のようなものは感じられない

「ラプンツェル、眠り姫、知り合いなのか？」

「うん！、ペロちゃんだよ！」

ラプンツェルは元気に答える、ペロ、ペロね、血式少女……にしては、何か違う気がするんだよな。

「どうも、わたくしペロって言いますにやん、どうぞお見知りおきを」  
ペロはスカートの裾を持ち、お姫様のようなお辞儀をした、ちらつと見えたが、下は短パンか、いやマチはおっさんかよ、なに確認してるんだ。

「……で、どういう関係で？」

「にやに、ただのお眠り友達ってだけにや、ああそれとこんなところに来た理由としては」

「嫌な匂いがあったて避難してきた、だろ」

「あら、マチ殿も？、わたくしらも同じですにや」

「うん！、なんかへんなにおいがしてて、ぐっすりねむれないの！、みんなにきいてもよくわからないって」

「ん……ん」

ふむ、鼻がきく少女が逃げてきたわけか、確かになにか嫌な匂いだったな、心がざわつくような……似ているものあげるなら、確か前に虫を殺すスプレーがあったな、あれに似ているな。

「……前々から気になってはいたが、あの都市はいろいろと何かありそうだな」

「……へえ、にやにかな、マチさん」

ペロは笑みを浮かべてマチの言葉を待っている。

「まず山に来てわかったことだが、ペロ、お前は一回でもこの山でメルヒェン、ナイトメアに会ったか？」

「メルヒェン？、ナイトメア？、随分とファンシーな名前にやってるね、汚染動物なら干からび死体なら何度か、それがにやに？」

「ああ、この地上にもメルヒェンやナイトメアが跋扈してると思つて

はいたが、どうやら一部の遠い村々や、この血戦都市の近くくらいみたいだ、遠いところから来た市民からそう聞いた」

「近く……にやら、なんで血戦は討伐しないのかにやあ」

「それがわからないから疑念が生まれているんだ、まあ近くとは言っても、すぐに討伐されてるらしいぞ、メルヒエンはその遠い場所から来る……まるで吸い寄せられるようにな」

「にやはは、つまりマチさんはあれかにや？、血戦は意図的に何らかの方法でメルヒエンを呼んでいると」

笑みを先程からペロは浮かべているが、どこかその声は試している風にも見える。

「……すう」

「……うーん、ラプンツェルそういうのよくわからない！」

眠り姫は再び眠って、ラプンツェルはお腹を鳴らして、ジタンダを踏んでいる、まあそういう考えること苦手そうだなんな。

「ふむ、確かにお腹が減る時間か、二人とも、昼飯食うか？」

「食べるー！」

「わたくしは猫缶でいいですよにやあ」

「無いわうなもん」

マチは元いた場所にいく、眠り姫を抱っこして運んで、テントの中に入れ、マチは料理を始めた、まあ簡単なものだが、パンに焼いた肉や野菜を挟んだサンドイッチ、ここの肉も野菜もあるから良かった、肉に関してはようわからないが、まあ今は食べるか。

「それじゃあ」

「「いただきますー！」」

——腹も膨れ、夜になり、ラプンツェルもテントの中で眠り、マチはペロと焚き火を挟んで、折りたたみ椅子に座りながら、軽い雑談をしていた。

「ふむ、猫がいるのかお前の家には」

「はいにや、皆わたくしの家族ですよにや」

「いろいろと驚きだが……で、お前は何者何だ？」

マチは本題を切り出した、最初会ったとき、膝カックンとは言つて



いたが、殺意も悪意も無かった……が、確かに一瞬だったが、後ろに隠していた腰の細剣に触っていた。

「……ニヤハ、どうせ全てお見通しそうだにやね、わたくしは長靴を履いた猫というコードネームで通つてる白月教団の一人にや」

「ほう、簡単に吐いたな、このままはぐらかせば、だまし討だつていけたのにさ」

「にやははー、それでもマチさんなら反応してたでしょうにや、ま、心配せずとも、わたくしはそんな真似はいたしませんにや、自らの狭義に反するし、あの人が望んでませんにや」

「あの人ねえ、秘密かな」

「ですにや……それじゃあ最後にわたくしから一つ情報を」

「ふむ？、聞こう」

逆に情報をはくのか、怪しいところだが、まあ聞くだけただか。

「――」

「……ふうん、面白い話だな」

マチはペロの話を聞いた、なかなか良い内容だ、真偽はどうあれな。

「じゃ、わたくしはこの辺で、また会いましょうにや」

ペロはそう言つて、木々を猿のように飛び移りながら、山を降りていった。

「……ふう、やっと一人だ」

マチは持ってきた魔法瓶なるものに入れたコーヒーをコップ移し、飲みながら、夜空を見ながらゆつくりする。

――夜はまだまだ長そうだ。

## 幕間12 マッチ売りの少女達

俺には、名前が……ある、メアリーっていう名前が、いつ、誰が与えてくれたのかはわからない、けど、他の血式少女みたいに自ら名乗った感じではないのはわかってる。

俺は何時ものように、マッチを擦り、妄想にふけていた、血戦都市でも誰も俺のことを視認しない、いや、時々視線を感じることはあるか、気のせいってやつかもしれないが。

マッチが消え、幻が消える。

「はあ……ノルマ、こなすか」

俺は何時も通りに、商店街で、マッチを売る。

「マッチ……マッチはいりませんか……なんてね」

今日も一本も売れずに終わるんだろう、そう思っていたんだが、一人、俺と同じ赤い髪の女がこっちに近づいてくる。

「マッチね、マッチが造ったやつ以外のも使うのもいいかもね、1つくないか？」

「お前……俺が見えるのか？」

「驚きだった、存在感が極めて低い俺のことを視認しているんだ、こいつは。」

「はあ？、何だお前、幽霊かなんかなのか？、こわ」

首を傾げ、不思議そうにしてやがる、なんなんだいったい。

俺は、人通りが少ない路地裏で、マッチを再び擦っている、今回は一人ではなく、こいつも一緒だ、何処からともなくマッチが出現させる様はマジックみてえだ。

「な、なあ、あなたなんて名前なんだ、俺は……メアリー、だと思っ」  
「マチはマチだ、メアリー、お前も血式少女に見えるが、どうしてこんなところにいるんだ」

「あなたにはわからないとは思うが、俺は存在感が薄いんだ、それに根暗だし、こんなマッチの幻覚を見て笑ってるやつだぜ？、どうなんだって話だ」

こいつは一切笑うことなく、俺の話を聞いてやがる、良いやつなん

だろうな、仲間も多そうだ。

「ふむふむ、なるほど、まあ人の自由だからどうこう言うつもりは無いが、頑張れ」

「は、頑張れね、何をどう頑張れってんだ」

俺が苦笑したとき、商店街のほうで、悲鳴が響いた。

『きやあああ！、メルヒエンよお！』

「……マチは行くぞ、お前はここで待っている」

「お、おう、頑張れ」

「うん、頑張るさ」

マチは、俺に一瞥すると、すぐさま走り出していった。

「……少し、興味があるな」

俺は好奇心からか、そいつのあとを追った。

『うええん！、お母さん！』

何匹ものメルヒエンが現れて、人々は逃げまどっている、一人残された男の子は、涙を流しながら、母親を呼んでやがる、なんだろうな、すげえ既視感だ。

『あっ』

男の子は躓き、転んだ、そこに一匹のメルヒエンが近づいてくる。

大人はメルヒエンに近づくことができず、ただ見守ることしかできない、そしてメルヒエンの手が、男の子の頭を。

「やめとけ」

掴みことができず、逆にメルヒエンの頭が吹き飛んだ……あの小さなマツチの投擲によって、いややっぱ既視感あるぞ。

「さっさと逃げろ小僧」

「う、うん！、ありがとうお姉ちゃん！」

男の子が逃げるのを見守る背中に一体のメルヒエンの爪が振り下ろされる、確かこのとき陽炎だった気が……、マチはその爪を片手で摘んで止めた。

「邪魔するなよな」

マチはもう片方の手に、大きなマツチを出現させる、それを一雑すると、メルヒエンの身体が横に真っ二つになりやがった。

『ギギイ!?!』

「どうした?、来ないのか?」

残りのメルヒエンはマチのただならぬ雰囲気には怯えている。

『ギ、ギギギイ!!』

メルヒエンどもは1体では駄目だと思ったのか、固まって襲いかかる。

「力の差もわからないとは愚かだな、お、そうだ、試しにやってみるか」  
マチは大きなマッチ棒に火をつけて、メルヒエンどもに向けた、火は大きくなり、次の瞬間、マッチ棒の火が巨大な炎となって、放射される。

『グギヤアアア!!』

メルヒエンどもは一瞬でその炎に包まれて、灰となった。

「ふう、意外とできるな、ただマッチ棒がこうなるのはどうなんだって話だが」

持っていたマッチ棒もまた消し炭になっている……少し違うが、ああ、そうだ、これはまるで妄想の俺だ

「ん?、なんだ見てたのか、メアリー」

俺が物陰から見ていたのを見つけたマチは、俺に近づいてくる。

「……あんた、強いんだな」

「まあな、正直物足りなさが凄いが、なあメアリー、今後も仲良くできないかね」

仲良く、仲良くね、俺と、マチと……。

「……へへ、お前は良いよな、強くて、存在感があつて、きつと仲間だつてたくさんいるんだろ」

「何が言いたいんだ」

本当にすげえよ、いろいろと違うところがあるが、妄想の俺そのものだった、だからこそ……自分が嫌になる。

「俺なんてな、こんな弱くて、存在感無くて、仲間も一人もないんだぜ?、そんな俺と、あんたが仲良くなんて」

「決めつけは良くないな」

「は?」

「お前がそんなのは現実から逃げているからだ、自分を変えようと思わないからだ」

……ああ、そんなの、そんなこと。

「——わかってる、わかってんだよ！」

俺はそう叫んで、逃げるように路地裏まで走っていった。

「……メアリー、ねえ」

マチはそれを、ただ哀しそうに見守っていた。

## 4話 影法師

「はあはあ……はあ」

メアリーはそれなりに暗い路地裏の奥までくると、壁にもたれかかり、体育座りをした。

「なにやってんだろうな、俺」

あいつが本当に、俺の妄想の産物なわけがない、そんなことできるとしたら、ウィッチクラフトくらいだ、だけど俺は一度でもそんなモノを見たことも無い、ならあいつは何なんだ？、いや、逆なのかもしれない、俺があいつの妄想の産物じゃないのか？……考えても仕方ないか。

「……マッチ、擦るか」

懐から俺はマッチ箱を取り出して、箱から一本のマッチ棒を摘んだとき……誰かが近づいてくる足音が聞こえた。

誰だ？、あいつか？、いやこんな足音を鳴らすやつだったか？、随分と軽いような。

「探しましたよ、メアリーさん」

そいつは暗闇の中から現れた、修道服みてえのを着てる変なやつだった。そいつは一回お辞儀をすると、喋りだした。

「拙僧は影法師、貴方様をお連れに来ました」

「連れに……ね、血戦のやつとは違うみたいだが俺が見えてるみたいだが何者だ？」

「ふふふ、そういうのは拙僧の仲間のところで話しましょう、さあ」

黒服の野郎が手を伸ばすと、俺は自分の影の中に沈んでいく。

「んなつ!?、俺は行くとは一言も」

「貴方様の考えは聞いておりません、さあ行きましょう」

ズブズブと沈んでいきやがる、足搔いてもまるで泥みたいに身動きが……ヤバい、このままじゃ。

「ふーん、そういうことするんだ」

完全に沈みきる前に、火のついたマッチ棒が黒服の野郎の伸ばした手を吹き飛ばした、それと同時に俺も影から抜け出せた。

「……つけてきましたね」

「悪いか?、こういう裏路地では不審者が出るのが相場らしいからな」  
俺を助けたのは、さつき会ったマチだった。

「お前……なんで」

「下がってる、メアリー、こいつ、たぶんジャバウオックで間違いないぞ」

「ジャバウオック?、なんだそれ、て、何だあれ!」

俺は言われた通り後ろに下がる、ジャバウオックがどういう存在かは、目の前にいる野郎からわかった、先程吹き飛んだ手が、グジュグジュと、再生してる……?。

「ジャバウオックというのは旧いですね、拙僧らは悪夢少女ナイトメア・ガールですよ」  
「少女だったのか、まあ知ったこっちゃないが、今すぐ引き下がってくれたら、荒っぽいことせずに済むんだけどな」

「ふふふ、それはこちらの台詞ですよ!」

野郎は一度目をつぶると、目を開けたとき、目が黒くなっていた。

「な、何だその目!?!、気持ち悪!?!」

「……ふーん、どつかで見たことあるな」

「はは!、影縛り!」

野郎は笑いながら、手を合わせると、影が伸びて、マチの影と繋がる。

「なんのま……動けないなこれ」

「ほほ、どうですかな、拙僧の術は、それでは貴方様もお連れ」

「ふん!」

動けないはずなんだが、マチは重い足取りながら一歩ずつ野郎に近づいていつてる、意外と束縛が緩いのか、マチの力が上なのか……。

「なっ!?!、くっ、この!」

野郎は影を剣や槍の形にして、マチを攻撃する。

「言っておくけど、たぶん」

マチは、大きなマッチ棒を手に出現させて、着火させる、そしてそれを影の攻撃を全て消してみせた、影だから、光に弱いってこと……。てっ、うおっ、俺の横を少し掠ったぞ今の攻撃!

「おい！、ちゃんと全部消せよ！」

「わがまま言うな、自分で避ける！」

「ちい、やはり相性悪いですね、ですが！」

野郎は影の中に沈んだ、逃げたのか？。

「……………」

「た、助か——!?!」

俺が声を出そうとしたとき、俺の影から手が伸びてくる、何本も伸び、俺の身体を拘束して、影の中に引きずり込む、マチは気がついねえ、くそ、どうする。

『ふふふ、このまま一瞬で……………ん?』

「……………ほい」

マチは、一本の普通のマツチ棒を空中に投げる。

「目をつぶれ、じゃないとやばいぞ」

俺が目をつぶると、次の瞬間、強い光が瞼ごしに輝いた。

一気に火を超高温にした感じか、やべえなあいつ。

『グアアアア!!』

「お前に対して最高にキメられる一本だろ?、受け取れ」

影の中から、野郎の汚い悲鳴が聴こえてくる、かなり効いてる感じだな。

影が消えたことで俺は弾き出される感じに出てきた、野郎も苦しみに悶ながら出てくる。ザマアねえな

「ぐっ……………」

それでも野郎は俺に掴みかかろうとする。結構焼かれてるのに元気なやつだな。

「蹲れ」

マチの言葉に従い、蹲ると、頭上にさつき見た火炎放射が通り、若干俺の髪が焼けた。

「……………もう良いぞ」

「お、おう」

俺は立ち上がり、後ろを見ると、焼けた野郎の死体があった、炭の臭いがしやがるな、流石に生きて……………無いよな?。



「ふう、意外とやれるな、鉢かづき姫に魔力のコツを聞いて実戦始めてだが」

「な、なあ、殺したよな?」

「たぶんな、昔戦ったナイトメアと同じようにしたわけだし、とりあえずここから離れるぞ」

「ああ、そうする……」

俺は、マチととりあえずは明るい場所に出ようとする、野郎の死体を横切った、その時、うめき声が聞こえた。

「はあ!?」

「マジか」

俺らが驚いて振り返ると、野郎は起き上がり、全裸ながら、もう8割は回復している感じだ、炭になっていた部分が皮のように剥がれていってやがる。

「まだ……まだやれるぞ! 下等生物ども!」

声を荒げて、そうは言ってるが、流石に効いてるらしく、ふらふらしてる。

「なんだ、もう少し念入りにしたほうが良さそうだな、お前の場合」

マチは再び大きなマッチ棒を出現させる、今度は大丈夫だと思いたいな。

「下がれ、影法師」

突如空から声がしたかと思うと、俺らと野郎の間に、分厚い氷の壁が現れた。

「なっ!?、ヤオ!」

氷越しにヤオと呼ばれるやつが降りてきた、水色のローブを身に纏って顔はフードで見えないが、俺よりも小さな子供くらいの背丈だった。

「無様だな、相手の力量、相性もわからずに特攻するなど、それでもドロシーと同じ7人の悪夢少女ナイトメア・ガールに名を連ねる者か?」

「ぐっ……」

「良いのかね、マチらにそのこと言っちゃって」

マチは再びマッチ棒での火炎放射をするが、貫通には至らない。ヤ

オってやつは、笑みを浮かべて、自身より背丈のある影法師の野郎を抱えた。

「別に、問題無い、影法師はなんとかなつたみたいですが、彼女は絡め手が主だから、はたして他の娘らにはどうするかな、マチ」

「……そうだな、今のところお前が上だし、今日は帰ってくれると助かるね」

「ええ、そうさせてもらうわ、では、また会いましょう」

ヤオってやつは、一瞬で、その場から消えた、氷の壁を残して。

俺らは外に出れた、さつきまでのこともあり、どつと疲れが出た、汗もびっしよりだぜ。

「……う、おいお前、いつの間に俺と同じ場所に傷を？」

マチの顔を見ると、頬に傷ができていた。

「？、ああ、確かについてるな、全部避けたはず……まさか」

マチは、しばらく考える素振りをしてると、俺の肩に手を置き、笑みを浮かべた。

「お前、しばらくマチの側決定だ」

「……はあ?！」

○

名も無い少女は、名を得て、自らと似た少女と出会う、幻想はいつしか……現実へと置き換わる、それが良いことか悪いことかは、本人らが決めることなのだろう。

## 5話 橋立小女郎 前編

その頃、血戦都市、寮にて、赤ずきんは一人、廊下を歩いていた、訓練で流れた汗を拭くために。

「ふう、まさか自分で取りに行くはめになるとはね、用意してないとか思わないでしょ、何時もはあるのに」

赤ずきんはシンデレラと共に、メルヘン・スケルターの会得の訓練を行っていた、実戦もしてるが、メインはブラッドスケルター化を制御するために、精神負荷に耐えられる心を得るために、特殊な薬で夢の中で、自身が一番嫌なモノを見せられる、それに耐えるのがマリアチャイルドが提示した訓練の1つだった、未だに2〜3回やればブラッドスケルター化し、その都度マリアチャイルドによって制圧、血式少年の血液によって沈静化されている。

「はあ……後もう少しって感じなのにね」

自室の前までたどり着き、そこにあるタオルを取りに扉を開こうとした時、聞き覚えのある声が聞こえる。

「おーい、赤ずきん」

マチだ、手を振ってこっちに笑みを浮かべ、近づいてくる、赤ずきんもそれに応えるように手を振る。

「探したぞ、今までどこ行っていたんだ？」

「ああうん、ちよっと訓練をね」

「ふむ、まあいいか、ところで聞きたいんだがハーメルンは今どこにいるんだ？、会って確かめたいことがあるんだが」

「確かめたいこと？、それって何？」

「ああ、それは本人に会ってからだな、で、何処にいるんだ？」

「……そうね、ついてきて案内するから」

「おお！、ありがたいな」

赤ずきんはそう言って歩きだす、その後ろをマチは続いていく。

「ところでさ」

「ん？、なに」

赤ずきんは振り向きざまに、マチの首を片手で締め上げる。

「がっ！——な、なにを！」

「——化けるなら相手を選んで、マチに化けるなんて、あたしは心底怒り心頭ってやつよ！」

そのまま飛び上がり、思いつきり床にヒビが入るほどの勢いで、大きな音をたてて、マチを叩きつけた。

「ぐはっ！——」

「目的はハーメルンかしら、何が目的？」

「……はっ、そんなことしていいのかな、こんなに大きな音をだせば」「赤ずきんさん？」

そこに、シンデレラが現れる、シンデレラも汗を流すために、自室にあるシャワーを浴びに来ていた。

「そら——し、シンデレラ！、赤ずきんが急に」

「あら……随分と良く出来てますわね、この偽物」「は？」

なぜだ？、何故すぐにバレたのか、完璧なまでに再現したはずなのに、マチの偽物は予想外の事態に混乱していた。

「何故バレたのかわからない様子ですわね、赤ずきんも同じ意見ですわよね」

「ええ、簡単な理由よ」

「な、何だいったい」

「マチがこんな簡単に倒されるわけがないから」「それだけよ」

「ええ、わたくしはそれだけですわ、でも赤ずきんさんはもう一つある様子ですが」

「な、なんだよ」

「……ハーメルンは既に地上に出たすぐになくなったわ、マチはそれを知ってるはずよ」

「なに？」

初めて知ることだった、影法師め、盗聴をしくじったな、そう思い、苦々しげに、マチの偽物は印を結ぶ。

「撤退だな」

その瞬間、マチの偽物の身体は人形の紙となり、窓から外にひらひらと飛んでいった。

「あつー、くそ、汗を拭くのは後ね、追いかけるわ」

「でも、場所がわからないですわよね？」

「なに、あたしに少し考えがあるわ、たぶん合ってるとは思うけど、とりあえず武器を取りに行くわ」

「わたくしもそうしますわ、では後で、それともう一人連れて行くかどうか」と

「もう一人？」

「ええ、暇してるでしょうから、それじゃあ後で」

「暇？、あああの娘ね、ええ、後でね」

二人は自室に入り、武器を取りに行く。

○

「——くそ！、他も駄目だ！」

血戦都市で二番目に高い、ビルの上、そこである和服を着た狐の耳と尻尾を生やした少女は座禅を組んで、偽物達を操っていた、しかし、その全てが看破されて、今人形の紙が全て少女の元に集まった。

「なんでなんでなんで！、うちの式神が完璧に化けていたのに！なんでもバレルん？、くそ、影法師がもう少し情報を集めていれば」

「へー、影法師と知り合いなんだ、お前」

そこに術で固定されていた扉を蹴りで壊し、マチと後ろからメアリーが姿を見せる。

「なあ、なんでわかつたんだ？」

メアリーは疑問を言う

「んー？、なに、高い場所かなくて思ったのと、不意に空に紙ツペらが集まっているのが見えて気まぐれに」

「ほぼ勘だな、俺には無理なことだな」

「ちい……まさか特記戦力の一人と相對することになるなんて、うちも運が悪い」

「ああ、だが今回はマチは戦わないぞ？」

「？、それはどういう」

少女は、3つ、ビルを駆け上がってくるのを感じた、普通の人間にはありえない芸当、なら、血式少女!。

「よつと……意外と一発でわれたわね」

「やっぱり勘でしたのね」

「あのー、なんでわらわはよばれたのですかー」

赤ずきん シンデレラ そしてかぐや姫の3人だ。

「来たか、じゃ、頑張れ、3人とも」

マチはメアリーと共に、端っこに座り込んだ。

「ええ、あたし達に任せてね」

「あ、わらわはやりませんよー、面倒ですし」

「あら、そう、じゃあシンデレラと二人でかしら」

かぐや姫もマチの隣にバンブー1号かぐや姫の何時も乗っている浮遊する乗り物で移動し、見物することにした。

「さて、名前は聞こうかしら」

「……うちは橋立小女郎、悪夢少女の一人や」  
ナイトメア・ガール

「ふーん、橋立小女郎、確かマリアチャイルドから聞いた名前ね、裏切り者の血式少女」

「ふん、裏切ったんやない、うちは何時だつてうちの味方や」

「自尊心高そうですわねえ、ま、良いですわ」

「ええ、じゃあ」

赤ずきんとシンデレラは一瞬で橋立小女郎との間合いにを詰めて、左右から赤ずきんは鋏、シンデレラはピンヒールのような具足での蹴りを、橋立小女郎に攻撃をするが、それらをどちらも右手と左手を使い、防いでみせた。

「ここはいっちょ、強くなったあたし達の力、見せてあげるかしら!、シンデレラー!」

「ええ……行きましようか!赤ずきんさん!」

更に二人は連続で攻撃を加える、橋立小女郎は後退する、が、表情は楽しげだった。

「良いわ、力の差を教えてあげましょ、来なはれ!」

赤ずきん&シンデレラVS橋立小女郎の戦いが幕が開けた。

## 6話 橋立小女郎 中編

まず、前に走り出したのは、シンデレラだった。

そのままの勢いで、蹴りを入れようとするが、軽々と、橋立小女郎は首を横に振って、避ける。

「はん！、その程度のアマチュアな蹴りでうちは倒せへんよ！」

「あら、ならアマチュアなりに習った戦い方でいきましようか」

「ぬかせ！」

橋立小女郎は、突きや蹴りをシンデレラに連続で放つが、それをシンデレラはこちらも楽々と脚や手で受け流したり、止めていく。

「なっ！、その戦い方、カーレンの……」

「あら、やっぱり知ってるんですわね」

一ヶ月前、ある日、シンデレラが精神の特訓を一時終わらせたとき、カーレンが修行場に現れた。

「……ね♪、シンデレラだっけ、私と同じ足技が得意の♪」

「はあ……そうですけど、何かわたくしに？」

「一つ、私に鍛え上げられたくない？、正直本気の戦いが処刑台少女以来あまりやれなくてね、試しに他の人に教えてどんくらいなのか見てみたいの♪、良いでしょマリアチャイルドちゃん」

「ご勝手に、自らの修練も大切にね、踊だけではなく」

マリアチャイルドは興味なさげに、座禅を組みながら言った。

「じゃ決定ね♪、シンデレラちゃんも良いよね」

「……良いですわ、強くなれるなら、何でもやりますわ！」

「いい心がけね♪、厳しいわよー♪」

それから、精神修行の合間に、何度もカーレンとやり合い、未熟ながら、それなりの力を手に入れた。

「あのカーレンがねえ、ふふふ、けど攻撃ができなきゃ」

「出来ますわよ？」

シンデレラは反撃に転じる、受け流すだけではなく、逆に

受け流した拳で、脚で相手を攻撃していく、そして、右足の蹴りが、

橋立小女郎の頬にクリーンヒットして、橋立小女郎はよろめいた。

「ぐっ……なめる」

攻撃しようとするも、横から赤ずきんの蹴りをくらい、柵に激突する。

「二人係っていうこと、忘れてもらっては困るわね」

「——なら！、これならどう！」

橋立小女郎は印を結び、青い炎の玉をいくつも作り出す。

「はあー！」

それらを、一気に打ち出し、赤ずきんとシンデレラに当たり、爆発が起きる。

「お、おい！、大丈夫なのか！」

メアリーは心配げにマチに聞くが、マチは一切顔色を変えてない。かぐや姫も同様だ。

「大丈夫ですよー、あれくらい」

「ああ、あの二人なら、いや、シンデレラなら大丈夫と言ったほうがいいか？」

「へ？、それってどういう」

「すぐにわかる」

「は……はは！、なんだ！、この程度かえー！」

橋立小女郎は勝った気であるが、炎が消えると、そこには赤ずきんとシンデレラの姿は無かった。

「あ……れ？」

橋立小女郎が確認のために、数歩進んだ辺りで、背後から気配を感じた。

「気づくのが遅いわね」

「!?、うし」

赤ずきんとシンデレラは、今度は拳で同時に殴りつける、橋立小女郎は何度かバウンドして、そのまま動かなくなる。

「……勝ったの……かしら？」

「二人ともく、あまり油断されないように」

かぐや姫は手を橋立小女郎に伸ばすと、竹が床から生え、橋立小女郎を包み込み球体となった。



「ほー、バンブーウィーバーか、つうが使う血式能力の」

「まあ似たようなものですね、わらわも竹の能力ですしく、ま、これでは血戦ビルに持っていった」

「——ゆる——さ」

竹の球体の中から、声が聞こえてくる。

「ま、まさか……」

メアリーが察したのもつかの間、竹を突き破り、《9本の尾》が現れる。

「許しまへんよー、下等生物がアア！」

中から出てきた橋立小女郎は、爪が鋭くなり、目の白いところが黒くなっている。

「ふーん、お前も目が黒くなるのか、それに9本の尾か……ハーメルンといい、影法師のことと言い……共通点が見えてきた気がするな」

「死ねええ!!」

橋立小女郎は、9本のうち、5尾を伸ばし、赤ずきんに向かっていく。

「赤ずきんさん！」

シンデレラは赤ずきんを突き飛ばし、自らに尾を向けた、なんとか避けていくが、柵にぶつかり、尾に絡め取られ、四肢と首を拘束される。

「うぐっ……」

「はあー！」

橋立小女郎は、尾を燃やして、シンデレラを確実に焼却しようとする。

「やめろおお!!」

赤ずきんは、咄嗟に、鋏、いや、血式能力のボディニッパーにより、切断する。

「た、助かりました」

赤ずきんはシンデレラに駆け寄る、腕や足が青くなり、折れているようだった。

「くっ……うおおお！」

赤ずきんは、一人、橋立小女郎に向かつていく、5本の尾は既に再生している。

「はあああー!」

赤ずきんは今度はボディニツパーを橋立小女郎自身に向けるが、切断はできたが、煙のように、消える。

「陽炎やで」

今度は赤ずきんが橋立小女郎に背後をとられ、振り向いた瞬間、その鋭い爪によって、赤ずきんは切り裂かれた。

「うあ——」

赤ずきんは膝をつく、多量の血液が、屋上の床を濡らす。

このままでは失血で気絶、あるいは……。

「ははは、うちが本気にかかればこの通りや、うちらのはあのマリアチャイルドラ血戦と渡り合う集団なんや!、生ぬるい地下で生きてきたあんたらとは格が違うんや!」

「ぐっ……」

「わた……くしは」

赤ずきんとシンデレラは、マチを見た。

「……代わっても良いかな」

マチの言葉に従おうと、そう思った……が、それでは今までと同じだ、自分らが何のために、マリアチャイルドに精神修行をしてもらっているのか、思い出す、マチを守るほどに強く、たくましくなるためだ。

「……駄目ですわ、まだ、やれますわよ」

「ええ……このくらい、まだまだ……」

二人はなんとか立ち上がる、しかし、このままでは殺されるだろう……二人は懐に入れていた、小瓶を取り出す、メルヒエンの血液、それをどす黒くした、そんな液体が入っている。

「……賭けるなら今ね」

「……ええ、やってやりましょうとも!」

赤ずきんとシンデレラは、蓋を開け、それを飲み干す、瞬間、二人から強烈なピンク色のオーラが溢れ出し、橋立小女郎を吹き飛ばし

た。

「ガアアアア!!」

「なっ!、なんですかいったい!、いや、これは……ブラッドスケルター化!」

「ギギギ……グガアア!!」

二人の服が消え、代わりにピンク色の模様と、禍々しい武器が身体と一体化して現れ、目がキラキラとピンク色に輝く。

「ば、バカめ!、そんなことをして自爆のつもりですか!、メルヘン・スケルター化を狙ったんやろうけど、血戦でも限られた人しかかなれないというのに!」

○

——二人の意識は奥深くまで眠っていく、殺意と憎悪の波に飲まれて。

「……………ここは」

赤ずきんが目にしたのは、黎明、だが、そこは荒れ果て、地面には博士、ハル、視子が死体となっていた。

「——これって」

そして、場面が変わり、元駅構内が変わる、そこには、赤ずきんがいた、長髪だったり、青と白の少女隊だったり、違うがあるが、赤ずきんがそこに立っていた。

『……博士を失った、視子も、ハルも、黎明の皆を失った……あたしは、こんなにも……無力だ』

その瞳はメルヒエンの血液がついていないのにピンク色に輝き、赤ずきんのほうに近づいてくる。

「あんたは……いったい」

## 最奥① 赤ずきん

『あたしは赤ずきん……あなたとは、また違った道を歩いた赤ずきんよ』

知らない、今まで赤ずきんは様々な夢を見てきたが、これは初めてのものだった。

「そのあんたが何であたしの中にいるのよ」

『さあね、あたしにもわからない……けど、今のあたしと、こちらのあたしも、変わらない、お姉さんと言っても守れなかった、いや、守ることができないあたしなんだよ』

「……違うわ」

『何が……何が違うって言うんだ！』

もう一人の赤ずきんは、ブラッドスケルター化して、赤ずきんに襲いかかる。

『あたしは何時だってあの子達を守れない！、あの無数ナイトメアとの戦いの時だって、あたしはただの時間稼ぎにしかなれなかった！、何時だってあたしは……奪われる側なんだ！』

赤ずきんはいつの間にか持っていた鍔で、もう一人の赤ずきんの攻撃を防いでいく、これで、目の前の赤ずきんを殺せと、頭に響く、怨念のような自らの考えなのか、だが、それでも。

「……地下にいた頃なら、あたしは目の前のことを受け入れずに、ただ殺していたのかもしれないね、けど」

赤ずきんはもう一人の赤ずきんを抱きしめる。

『なっ！、何なの！、こんなことしてもあたしはあなたを殺すわよ！』

「あんたはあたしなんだろうね、守れなかったあたし、復讐に囚われたあたし……あなたの言うとおり、この先、もしかしたら妹達を、マチを失うのかもしれない、けど！、あたしは諦めない！、そんな未来が待っているなら、あたしはこの手が届く距離に、妹達がいるなら、あたしは命をかけて、あの子達を守り抜くと誓うわ！」

『な、なんで、何で………何で今のあたしはそんなにも強いのかよ』

もう一人の赤ずきんのブラッドスケルター化が解け、涙が溢れる。

赤ずきんはもう一人の赤ずきんを抱くのをやめて、離れた。

「何でも何も、あたしはマチがあの時、一人で向かっていったときから、そんな強さが芽吹いていたのかもね、あたしね、猪突猛進って言うやつなの、何事も考える前に動いてしまうの」

『知ってるわ、あたしなんだもの、それは悪いことだとは思ってるわ』  
「いいや、今のあたしはそれが良いことだと思うわ」

『ええ!?!』

もう一人の赤ずきんは驚いた、それが原因で、失ったものがあるからだ。

「あたしは、考えてる時間より、今救える仲間があるなら、すぐに行動できる、この個性があたしは好きよ」

『——ああ、全てにおいて、あたしは……負けたわ』

もう一人の赤ずきんの身体が光の粒子となって消えていく。

「あんだ、それ……」

『時間みたいね、おめでとうあたし、あんだは乗り越えたのよ、悪夢の過去を……まだもう一つ残されているけどね』

「もう一つ?、何よそれって」

『時期がくれば思い出すわ……それじゃあ……さようなら、あたし、どうかあんだのその思いが、変わらないことを願っているわ』

完全に光の粒子のなると、映る世界も光となって、赤ずきんの身体に入ってくる、その感覚は、気持ち悪さはなく、何処かスッキリとしている……その際、様々なことがわかった、わかってしまう。

「……そう……たぶんもう一つの過去にも……いないわけね、マチは」  
そして、赤ずきんの意識は、現実へと帰っていく。

## 最奥②シンデレラ

……シンデレラの意識は奥深くに、沈んでいく、殺意と自己嫌悪の波に吞まれて。

「……あらう、ここは……確か、ジェイルの繁華街エリアでしたっけ」  
シンデレラは、確かに繁華街エリアにいた、しかし、何処か違うような気がするが、シンデレラにはそれが何かわからない。

「まずは、歩いてみますか」

歩いていくと、角を曲がった辺りで、それを見た。

「——これは、は」

赤い血液が地面を濡らす、その中心には、シンデレラが知ってる人物がいる、チルだ、そして、もう一人立っている、小さなシンデレラだ、しかし、その顔は、すぐにメルヒエンへと変貌する。

「!?、メルヒエンー」

「そう、メルヒエン、わたくしに化けた、メルヒエンですわ」

シンデレラは同じ声の者のほうに振り返ると、景色が変わる、シンデレラの黎明での自室だ、そしてその奥には、白の少女隊の服を着た、シンデレラが立っている。

「わたくしが、マチ、あの人がいない場合、どうなると思います?」

「どうなるって……黎明から逃げ出していたんでしょうね」

「そう……それが、全ての始まりなのです」

もう一人のシンデレラは、瞳をピンク色に変えて、話し出す。

「わたくしも後で知りました、わたくしが逃げたことで、博士がわたくしの偽物を使い、チルさんを殺し、その影響で、親指姫 眠り姫 白雪姫が、教団に帰り、かぐや姫を脅迫しました、それが影響で、様々な不運が起きました、そして最後には……つうと人魚姫を残して、皆死んでいきました」

「……………」

シンデレラは悲しげな目で、もう一人のシンデレラを無言で見つめている。

「わたくしが、わたくしが逃げなければ、皆を生きているはずですが、マ

チという人がいれば、こんなことには……だから、もう一人のわたくし、あなたはどうしたいんですか？」

「どうしたい、とは？」

「わたくしは、あなたと同じです、同じ人物ですから、ですからあなたも、この先失敗することがある、言い切れます、あなたは自己嫌悪するでしょう、それでも、これから生きていこうと思えますか？」

ここで死のう、ということなのだろうと、シンデレラは理解する……しかし。

「そちらのわたくしは失敗したわたくしなのです……わたくしも失敗はありましたとも、マチ姉と赤ずきんさんが行ったとき、一人残ってしまい、ナイトメアと戦うマチ姉の姿を見ることがすら、一緒に戦うことすらできなかつた、確かに自己嫌悪はわたくしの性です、しかし、それでも、わたくしはそれ以上にマチ姉を……赤ずきんさんを慕っているのです、あの人達のためにも、わたくしは死ぬわけにはいきません」

もう一人のシンデレラは、驚き、苦笑をする。

「そちらのわたくしは、随分と、良い姉を持ったみたいですね、羨ましいかぎりです……ああ、わたくしも、そこまで慕える人がいれば申しかしたら……」

もう一人のシンデレラの身体が光の粒子になっていく。

「——あなたに、わたくしの全てを差し上げます、それでもブラッドスケルター化の危険があります、つまり失敗です……それでもあなたは」

「やりますわ、恐れはありますけどね」

「正直でよろしいですわ——では、あなたの旅路に幸あらんことを——」

もう一人のシンデレラは完全に光の粒子となり、部屋もまた、光の粒子となって、シンデレラに入り込んでいく。

その時に、もう一人のシンデレラの記憶が流れてくる。

「……そういうことですか」

シンデレラは記憶からあることに気づく……しかし、今は胸にとど

める。

「さて……これからが大変そうですね」

シンデレラの意識は現実へと帰っていく……



## 7話 橋立小女郎 後編

二人の意識が、戻ってきた最初に感じたのは、殺意だった。頭いっぱい詰り込まれるその言葉に、二人の自我は失うと、橋立小女郎は思っただろう、しかし。

「わた……くしは、決めたんですよ、守られるだけじゃない、守る力が欲しいと！」

「ええ、こんなところで、あたし達は、止まっていられない、だから！」  
「こんなもの！、制御して見せる！」

——瞬間、二人の身体に変化が起きる。

赤ずきんの左手はピンク色のオーラだった獣の手が生物のものに、一体化していた鋏も、一本のピンク色の刃、本体は黒いものに、より鋭利となって、その手に握られ、洋服も現れ、獣耳が生え、瞳は通常のものとなった。

シンデレラの武器の具足も、硝子のような綺麗なものとなり、純白のドレスが身体に現れ、頭にティアラが現れる、まさにお姫様と形容できる姿となった。

「あ、ありえない、ありえない、ありえないんだよ！」

橋立小女郎も憤怒の声を上げて、巨大な九尾の狐へと変貌する。

「ドウシテ、コンナ下等生物ゴトキに会得デキタンダア！」

全方位に、青い炎を撒き散らす橋立小女郎、それを二人は回復し、強化されたその身体で難なく避けていく。

「凄いわね、力が際限なく溢れてくるわ」

「ええ、これならいけるかもですわ！」

シンデレラは一瞬で、橋立小女郎の顔に距離を詰めて、蹴りを入れる、巨体が浮き上がり、血反吐が吐き出す橋立小女郎、しかし、すぐに反撃に出ようとすが、

「クソが！、ナメンジャ——！」

今度は腹、肩、脚と、連続で、宙に浮いてる間に、何度も何度も、身体に叩き込まれる。

「ガアアアア!!、ダガ、その12ダツシュ！、12秒しかもたないは

ず！、スグニ合間ヲ狙えば！」

「ああ、そうですね、ですが、それは通常時でしょうか？」

12秒経過しても、その蹴りは終わらず、むしろ慣れてきたのか加速し、更に巨体が浮き上がり、威力が上がっていく

「たぶん、今のわたくしの血式能力、秒から分に格上げされておりますわ」

（な！？、ヤバい、このままこの攻撃が続けば、うちの身体はもたない……なら！）

橋立小女郎の9本の尾の中に身体を隠し、防御姿勢に入った。

「あら、小賢しいですね、ですが、ここは赤ずきんさんに任せましよう」

「ええ、任されたわ！」

赤ずきんはその鋏を、振りかぶり、9回、それを振るった、瞬間、橋立小女郎を覆っていた9本の尾は切断される。

「なっ!?、だ、ダガスグニ再生……サレナイ!?」

「やつぱりね、あたしのボディニツパーも強くなつたみたい、じゃあ、とどめはシンデレラ、今回はあんたも譲るわ、決めなさい！」

「ええー、やっつてやりますわ！」

シンデレラはその強力な足で、空気を蹴った、蹴った蹴った蹴った、はるか上空まで行くと、逆に地上に向かって蹴る、蹴る、蹴る、ソニックブームが発生するほどの速度で、橋立小女郎に向かっていき、そして。

「これで終わりですわあ!!」

橋立小女郎の身体をビルへと押し潰し、床を破壊しながら、地面へと到達した。

ビルには大きな穴が空き、橋立小女郎の身体は人間へと戻った。

「がつ——ぐはあ」

それでも瀕死ながら、橋立小女郎は生きていた。

「まだ生きてらっしゃいますのね、それじゃあとどめを」

「シンデレラ！、伏せろ！」

シンデレラは橋立小女郎にとどめを刺そうとしたとき、マチの声が

聞こえ、反射的に伏せる、瞬間、ビルが完全に切り刻まれ、瓦礫が降ってくる。

マチはそれを砕きながら、メアリーを片腕で担ぎながら、シンデレラの元に降りてくる。

ビルは完全に崩れ、かぐや姫やメアリー、シンデレラ、赤ずきんも無事だ。

「な、何だったんですか!」

「……どうやら、橋立小女郎だったか、やつは前座らしいな」

「——あら、前座ではありませんよ、母は、ただの回収しにきただけですので、あしからず」

現れたのは、つうの母を名乗る、織姫、橋立小女郎を抱え、宙に、糸を使って立ち、マチらを見下ろしていた。

「ぐっ……こんな、うちがこんなことに」

「小女郎さん、やはり貴方はまだ浅い、それほどの力を授かったのに、この有様では、マリアちゃんには程遠いですね、ま、今日もお眠り、母に抱かれてね」

「すみません……織姫——様」

橋立小女郎は眠りについた、そして、織姫はマチを見た。

「……我が子とは違い、貴方は完全な紛い物のはずなのに、その力、とても空想だけでは達することは不可能、何者なんでしょうね」

「さあ?、こればかりはマチには皆目検討もつかん、それよりも、織姫に九尾の狐、お前らのその力の源がわかった気がするな」

「……へえ、母によく聞かせてほしいですね」

織姫は柔和な笑顔でマチの言葉を待っている。

(……ヤバいな、橋立小女郎や影法師なんて雑魚に見えるくらい、えげつない力が感じられるな、マチがブラッドスケルター化すればなんとかなるか?、いやなつたことないが、赤ずきんもシンデレラも動けないし、さて)

「……織姫と彦星、中国の昔話童話で語られているが、もう一つの側面を持つ、伝説、童話とは違った人々に慣習として、子供以外のものでも知られる物だな、擬態化すれば相当の力があるだろう、何せ世界中で知

られていると言っても過言ではないからな。

影法師もアンデルセンの童話の中にあるらしいがかなり薄い、とても擬態化できるほどのものではないが、さて、何の伝説を混ぜたのかな？」

「……ふふ、賢しいとは思っていましたが、なかなかですね、マチ」

「ついでだ、橋立小女郎を向かわせたのは、目的はハーメルンだろうか？、ハーメルンもまた悪い意味で伝説として知られているからな」

「まあいなかっただけですし、骨折り損ですね……さて、時間稼ぎに付き合っただけですが」

(バレてたか)

このまま戦うのか？、と、冷や汗をかく一同、しかし、援軍は現れる。

「織姫ええええ!!」

そのような大声が聞こえ、2つの影が、織姫に向かっていき攻撃を仕掛けるが、織姫の糸によって止められた。

「あらあら、懐かしい顔ですね、ふふ、素の顔ではですが」

「お前らは……」

地下にて相まみえ、戦ったジャバウオック、いや、死後、ナイトメアの細胞を埋め込まれ、偽の記憶を与えられた悪夢少女の尖兵、茨木同時、そしてローザだ。

## 8話 今の世界 悪夢少女

「生前は世話になったわねえ！」

「おかげさまでいろいろと思い出したぞ！」

ローザは腕を獣にして。茨木童子はその元からある剛腕で糸を引き裂いた。

「あら、やっぱり舐めすぎましたか、母は今回はこの娘を取りに来ただけなので……流石に全員相手するのと、これから来るあの娘達は骨が折れるため、さようならです」

織姫は足場の糸を思いつきり踏むと、とてつもない勢いで、空高くまで飛んでいった。

「ちいー、逃したか」

「……とりあえず話を聞こうか、お二人さん」

○

マチらとローザと茨木童子は、寮に戻り、地下の血式少女達を集めて、話を始めた。

「あれ？、ハーメルンさんがいらっしやらないようですがー、おトイレでしょうか」

「いないよー、マチはなにかしってる？」

かぐや姫とラプンツェルは、ハーメルンがいないことに不安がつている、今まで会おうと思う機会が無いほどに、この都市が楽しかったために。

「……ああ、ハーメルン、それとヘンゼルとグレーテルは、別行動をしているんだ、なに、また会えるさ」

「……ふむ、あのナイトメアガールの件といい、何かあるんでしょうかね、この地上は」

「むう、ハーメルンがぶじだといいなあ」

「そうですねー……ところで、その人は何者ですか？」

かぐや姫はメアリーを見やる、それに続いて他の血式少女達もメアリーを視認した。

「お、お、俺……ああいやあたしは」

「別に取って食おうとは思ってないわよ、なんかマチに似てるけど、もしかしてマチの妹だったり？」

赤ずきんの質問に、メアリーはしどろもどろで、答えられる状態ではない様子だ、それを見てマチがそれに答える。

「ああ、そうだな、ある意味妹かもね、出生的に姉かもだが」

「？、なんか小さな声で言ったような気がするけど……やっぱり妹なのね、でも水くさいわね、あたしにも教えてくれないなんてさ」

「マチもさつき知ったからな……つう」

「ん？、なんだい？」

マチはつうの近くまで行き、小さな声で耳元で囁いた。

「後で話がある、たぶんお前が話していた事象に似てるからな」

「！、わかった、屋上でいいか？」

「よし！、とりあえずメアリーについてはこの辺にして……メアリーチャイルド、こっちは襲われたわけだ、話してくれてもいいんじゃないか？、ナイトメアガール悪夢少女について」

マチは、壁にもたれかかっていたメアリーチャイルドに視線を向ける。

「まあ、そうすることにするわね、私も詳しいことは知らないけど、一つ確かな情報を……平和な暮らしをしているわけだよね血戦都市では」

「まあ、そうだね」

「ああ、ただ世界全体から見たら、ここは奇跡のような場所なの、何せ、既に海外はナイトメアガールに壊滅させられているから」

「!?」

つまり、この都市、そしてまわりだけが人類が生存できる世界ということを、メアリーチャイルドは言ったのだ。

「それはヤバいな、だがとても橋立小女郎も影法師とかいうのもそんなことできるとは思えないが」

「新参者だからね、壊滅させたメンバーは四人、ドロシー、いやオズと呼んだほうが良いのかな、後は織姫……そしてハーメルン」

「なっ!?、なんでそこでハーメルンが出てくるんだ！」

ジャックが声を上げる、他の地下の血式少女達も同じ反応を示している。

「もちろん女のハーメルンではない、そいつは男の姿をしていた、ハーメルンの笛吹男としては合った外見だね」

「……確かにこちらのハーメルンは女だった、本来童話？はハーメルンの笛吹男……こちらのほうがおかしいと見るべきなのか？」

「そ、むしろそちらに女のハーメルンがいたことに少なからず驚いたよ、で、最後にヤオ、正直言つて情報が少なすぎる、氷を扱うつていうことしかわからない、ただ強いというのは私の身で知っている」

マリアチャイルドは袖をめくり、腕についた傷を見せた。

「ほう、あのマリアチャイルドに傷をつけたのか」

マチはマリアチャイルドの強さは知ってるため、あのヤオがそれほど強いのかと、恐れ、そして興味を持った。

「本当に強い、あの子柄から考えられないとんでもない強さだった、で、新人として影法師と裏切った橋立小女郎、この6人だな」

「ん？、マチがヤオつていうのから聞いた話だと7人だと言つていたが」

「——ほう、7人か、流石にその7人目の情報は知らないな……まあいい、後で調べよう、とりあえず私が知る悪夢少女ナイトメアガールについてはここまでだ、それじゃあ、一ヶ月後にまた」

「待て、何故一ヶ月後なんだ？」

マリアチャイルドが去ろうとするのを、マチが止める。

「……なに、時期がくれば来ることになるさ、私からは今は何も」

マリアチャイルドは、再び歩みだし、寮から去った。

○

その夜、長の部屋にいる、マリアチャイルドのもとに、ローザと茨木童子が訪れた。

「何かな、お二人さん」

二人が来ても、マリアチャイルドは書類を見ている。

「マリアチャイルド、何故神獄塔について何も言わない」

「そうよ、あれがあるからわたし達は汚染地帯の核を破壊して回つて

いるというのに」

「時期ではないからね、それと、血戦に再び来るかな」

「お断りだね、吾輩はジャックとイチレンタクシヨウのつもりだ」

「わたしは黎明についていくと決めたので」

「そうかい」

マリアチャイルドは少し悲しそうに、二人を見ると、再び書類に目をやった。

「話はそれだけかな、なら、去ってくれるかな」

「……行くぞ、ローザ」

「ええ、それじゃあまた、マリアチャイルド」

二人が去った後に、マリアチャイルドはカップのコーヒーを口につける。

「……すまなかったね、ローザ、茨木」

マリアチャイルドの夜は、まだ終わらない



## 9話ハーメルン編① 心病む悪意の嵐

——やめて！、殺さないで！

——いやあ！化け物！

——お前なんて生まれて来なければよかった

——死んでしまえ！

——怖いよお！

悪意、憎悪、殺意、恐怖、様々な声が、塞ごうとも、ハーメルンの耳に入ってくる。

「アアアアア!!」

飛び起き、奇声を上げ、荒い息を吐いた、多量の汗が流れ、身体が震えている。

「ここは？、われはいったい」

部屋は綺麗で、最低限のモノしか置かれていない。

「なんだ？……われに何が起きたというんだ」

ハーメルンは自分の今の顔を見るために、立てかけられた大きな長めの鏡を見る、そこにはいつもの自分がそこに映っていた……いや、一つおかしい点がある、右目だ、右目の本来白はずの眼が黒くなっているのだ。

「こ、これは……前に聞いたわれがブラッドスケルター化したときの……でもわれは平常だ、なのに何故？」

「それは、あなたが普通の血式少女ではないということだ」

「何者！」

ハーメルンはベッドから降りて、入ってきた少女に敵意を向ける。

「一応はじめましてかな、私はマリアチャイルド、地上唯一の都市、血戦都市を守護するものであり、長だ」

「マリアチャイルド？……どうやら敵ではにやいみいただが、何用だ」

「……」

マリアチャイルドは黙り、ハーメルンを観察する。

「……本当によく似ている、肌も、髪も、瞳も」

「な、何を言ってるんだ」

「……ハーメルン、告げておく、このまま何もせず過ごした場合、貴方の心は、悪意に侵され、やつと同じ悪夢少女、ナイトメアガール人類の敵となるだろう」「なっ!?、何をいってにゆのだ!、われはそんなことには……!」

ハーメルンは言い切れなかった、先程の夢、もしも毎日見ることになるとなれば……、ジャックやアリス、マチに危害を加える可能性が、頭を過る。

「ならない、とは言えないだろう、関係性がわからないが、もう一人のハーメルンを私は見ている」

「もう一人の……われ?」

「そう、そいつも前は貴方みたいな性格だったが、いつしか、人類の敵として、私達に牙を剥いた」

「……このままわれが、この都市に残る選択をした場合、どうするつもりだ」

「何もしないという選択を選んだなら、私が直々に、殺してやろう……一つ、その病とも言うべきモノの治す方法を一つ、教えてあげる」

「なんだ?」

「もう一人のハーメルンが言っていたことだ、アイツさえ消えれば、アイツを取り込めば、ワレは元に戻る、と、そのアイツがたぶん貴方なんだろうね」

「……今、そのもう一人のわれは何処にいる」

「わからない、ただ、最近村の大人が消えたとの情報が入った、村々を辿れば、もしかしたら……ね」

「……われは、われは仲間を失いたくない、このままあやつらを手にかけるなら……われはここを去ろう」

「……利口な考えだ」

○

その日の深夜、ハーメルンは黒い服を着て、手には食べ物や様々な道具が入った袋を持って、都市の外に立っている。

「……ではな、皆、帰ってくるときは、われは元に戻るように」

「あら、何処に行くつもりかしら、ハーメルン」

ハーメルンは都市に背を向けて、出発しようとした時、後ろから声

がかけられた、聞き慣れた声、ハーメルンは振り返る。

「グレーテル……」

「私もついていくわ」

「ぼ、僕も行くよ、グレーテルが行くなら」

そこには、グレーテルと、荷物を袋に詰めたヘンゼルがそこに立っていた。

「駄目だ、われはいつそなたらに牙を剥くか怪しいのだぞ」

「そう、でも私、今の貴方のその状態、とても興味深いと思うの、ここにいるよりも凄くね」

「われが怖いとは思わぬのか？」

ハーメルンは、失う恐怖があった、地下にいた頃の、メルヒエンを容易く屠ってきたはずなのに、仲間を、グレーテルを失うのがこんなにも怖い。

「私を満たすのは未知なるモノの解明、それとお菓子ね、大丈夫よ、もし危なくなったら、ヘンゼル兄さんと一緒に離れるわ」

「うん、僕、頑張つて逃げるよ」

「——こうきやい、後悔……しないのか」

「後悔？、そんなモノにふけるくらいなら、もっと調べることに頭を回すわ」

「……良いだろう、われも、一人は寂しいと思っていたところだ」

「そ、じゃあ……行きましようか」

ヘンゼルとグレーテル、そしてハーメルンは、地上に出た夜に、血戦都市を離れ、旅を始めたのであった。

## 幕間13 マチとメアリー、そして悪夢少女ついて 前編

「……つまり、マチ、きみはこのメアリーの分身、妄想の産物だと?」  
つうと人魚姫は、夜、血戦ビルの屋上で、マチからメアリーとの関  
連性を話した。

「たぶん、ね、証拠としてメアリー、すまん」

マチは手の甲を軽く引つ掻いて傷をつける。

「痛つてえ!、マジじゃねえか!」

同じく、メアリーの手の甲にも同じ傷ができている。

「これつて……一心同体つてやつなんですか?」

「蓮托生、まあマチが傷をおえばメアリーに傷が、逆もしかり、まあ  
何も無いとは流石に言い切れないだろ?」

「……確かに、私も前の世界でアリスさんやジャックさんの擬態人間  
を見たことがあります、完全に同じで、でもマチさん、貴方は」

「……そうだな、同じ人物にしては、容姿がかなり違う、いやもしかし  
たら、メアリーが育てばマチみたいになるのかもな」

つうと人魚姫が見た感じでは、赤い髪は同じように見えるが、マチ  
は赤い眼、メアリーは平凡な黒い眼、体つきもマチのほうがちり  
しており、性格も正反対と言った印象だ、とても同じ人間だとは思え  
ない。

「ま、メアリーから聞いた話だけだな、妄想の自分だと言ってるのは  
……さて、どうしようね、本当に」

「うん、確かにどうしよう、マチ、傷の共有はかなり痛手だ、その影法  
師がメアリーを狙ったのは、人質にするためなんだろう、最強と言っ  
ていいマチの最大の弱点と言つていいからね」

「だよなあつう、マチもそれを思ったわ、たぶんメアリーが死ねばマチ  
も死ぬ、とても手放すわけにはいかないな」

「……つまり、俺はお荷物か」

メアリーは一人不貞腐れている。

「まあ、強くもないから正直に言えばそうだな、だが、今まで狙われることが無かった理由はその影の薄さがあつたからだろうな、マチがメアリーを認識したばかりに影法師に視認された感じだな」

「……俺はこれからどうすればいい」

「そうだな……マチとしては、ここにいてほしいが、メアリー、お前には親はいるのか？、それか友人」

「親は……いない、友人、友人は……っ！」

メアリーの頭に、ある姿が映る、大切な、大切な人の姿が、顔も、どんな容姿かもわからない、けど、いたそれは、メアリーの中で断言できさる。

「いたんだ……なのに、俺は、なんで思い出せないんだ」

「……ゆっくりでいい、マチはそれを気長に待つことにするよ」

○

翌日、長の部屋のドアが開く、入ってきたのは、赤ずきんとシンデレラ、そしてマチだ。

「……要件はわかつている、ナイトメア・ガール悪夢少女についてだね」

それをメリアチャイルドは立って待っていた、振り向き、赤ずきんとシンデレラを見る。

「いい顔になったんじゃないかな、赤ずきん、シンデレラ」

「御託はいいわ、話してくれないかしら、あたし達が戦ったナイトメア・ガールについて詳しく」

「……まあ良いでしょう、その前に」

メリアチャイルドは服を脱ぎ捨て、半裸になる。

「ちよっ!?!、何してますの——!?!」

「ほう、これはまた」

「え、何その……傷」

メリアチャイルドのその身体にはいくつもの傷跡があつた、刺し傷、火傷、切り傷と、いろんな傷が身体の至るところに。

「これはドロシーに傷をつけられたものだ、ナイトメア・ガールのリーダー格にして、血戦の裏切り者だよ、それじゃあ話すでしょう、ナイトメア・ガール悪夢少女が何故そう呼ばれているかを」

○

その少女は突然現れた、華やかな美貌、綺麗なピンク色の髪、瞳、少女に合った綺麗な洋服、男も女も、その女神像のような彼女を見た者、恋のようなモノを抱いた。

『なっ、なあ、あの娘、どこから来たんだ？』

『わからねえよ、でも本当に綺麗ななあ、まだ10くらいじゃないか？』

『ああ、あんな娘がワシにもおつたらなあ』

様々な声が、歩く少女に、集まっていく、その進路を、一人の大柄の男が遮る。

『なあ姉ちゃん、迷子かよ、なら俺様のところこねえか？』

「——ごめんなさーい！、アタシ行くところあるのー！、だからおつきなお兄さん、また今度ね」

少女は男の脇を通り抜けて、目的の場所に向かおうとする。

『あっ！、待ちやがれ！』

男は怒り、少女に掴みかかろうとするが、少女はその手に持っていた杖でカツンと。地面を鳴らすと、コンクリートの地面から、男の2倍ほどあるブリキの人形が現れ、男を見下ろす。

『ひっ！、ひええええ！』

男は若干チビリながら、猛ダツシユで逃げ去った。

「ふふ……虚栄心の強いお方だなあ」

再び少女が杖でカツンと地面を鳴らすと、ブリキの人形は地面に戻っていき、穴の空いた地面は不思議と塞がった。

「皆さん、ごめんなさーい！、それじゃあこのドロシー、目的の場所に急いで向かいまーす！」

少女は杖に腰を下ろすと、杖は不思議と浮き上がり、自転車ほどの速度で移動していった。

『なっ、何だったんだあの少女は』

そのまま血戦ビルまで来ると、杖から降りて、門番に声をかける。

「すみませーん、ここの偉い人と話をしたいんですけどー！」

『なんだおま、うわスゲえ綺麗なだな、嬢ちゃんマリアチャイルド様に御

用でも？、いやもしかしくなくても血式少女さんか？』

「うーん、その血式少女がよくわからないけどー、そのマリアチャイルドさんに用があつて来ました！」

少女のほがらかな、太陽のような笑顔と言動に、門番の男はだいぶ緊張が緩んでいる。

「ふふ、案内、お願いできますか？、アタシこのことについてよくわかつてなくて」

『お、おうー、任せろ！』

門番は少女を血戦ビルに入れ、長の部屋まで案内した。

『こ、ここが長の部屋だ、俺はこの後門番があるから、その今度、お茶でも』

少女の年齢は高く見ても14だ、男は30代であり、明らかに駄目な年齢差だ。

「ごめんなさいい、アタシそういう男の人と一人で会うのは危険だつて言われてるので駄目なんです」

『そ、そうか……残念だ』

男はトボトボと、去ろうとする背中に、少女は声をかける。

「でもー、立ち話程度ならしてもいいですよー！」

『そうか……うん！、ありがとう嬢ちゃん』

男は浮き足だつて、この場から去つた。

「……あのー、入りますねー」

「——どうぞ」

少女はドアを開き、中に入る、小綺麗に整頓された、部屋、奥には机があり、椅子にはマリアチャイルドが静かに、書類を見て、判子を押ししたり、何かを書いたりと仕事をしていた。

「何か御用でも」

「はいー、アタシはドロシーー！、どうかこんなアタシを血戦のメンバーに加えてくださいー！」

——それが、マリアチャイルドとドロシーの出会いだ。

## 幕間14 マチとメアリー、そして悪夢少女ついて 中編

ドロシーは快活で、働きの者であった。

「えつとお、すみませーん、これ何処に運ばばいいんでしょうかー」

『ああ、それは右隣の奥だな』

ブリキの人形を使わず、本人でせつせと運び。

「待てー、たーべちやうぞー!」

『きやー!』

『たべられちやうよー!』

子供と元気に遊び回り。

「お、ドロシーちゃん!、ちよつと相談があるんだが」

「なんですか牛若さん、ワタシが答えられる範疇なら頑張りますがー  
?」

血式少女、少年の、良き相談相手となっていた。

「……ドロシー、か」

マリアチャイルドは、一人長の部屋で、ドロシーについて考えていた。

「何者なのだ、あの少女は、外のジェノサイド・ピンクなら本来傲慢不遜であるのが本来は普通だ、事実、私が見てきたジェノサイド・ピンクは一部の例外を除いて、全て人間を見下し、汚染動物、メルヒェン、及びそれを護る人間を殺すような連中だ、絶対に何かあるのだろう」

マリアチャイルドはドロシーに監視カメラ、盗聴器などを使い、四六時中観察した、しかしこれと言って怪しい行動、言動は見つからなかった。

「牛若丸も、カーレン、それにイツスンも、心を掴まれている……ここは一度、話を聞いてみるとするか」

マリアチャイルドは、ドロシーのもとに歩き出した。

「はわー、それは大変でしたねー、よしよしです」

『うう、ごめんなあ、おれ家族を失って、でもドロシーちゃんがついて



いてくれるなら、おれ、頑張れそうだよ』

「はい！、何時もは無理ですけど、このご時世、共に元気に！、家族の方々の分まで生きて見せましょう！」

『ありがとう、ありがとうなあ』

ドロシーは、一人の男の相談を終え、男が見えなくなると、振り返り、マリアチャイルドのほうを見る、何時もの笑顔で。

「何か御用でもありそうですね、マリアチャイルドさん」

「二人だけで話がある、ついてこい」

「はい！」

ドロシーはとてとと、マリアチャイルドの後ろをついていき、血戦ビルの地下にある、防音、監視カメラ無し、無機質な部屋に通される。

「はわー、こんな部屋が血戦にはあるんですねー、それでマリアチャ」  
「黙れ、私が言っているというまで口を開くな」

マリアチャイルドは刀をドロシーの首筋に向ける、それでドロシーは笑顔を崩すことはない、異常と言っているほど。

「……………」

「座れ」

ドロシーを奥にある椅子に座らせ、マリアチャイルドも数メートル離れた位置にある椅子に座る。

「まず一つ目、お前は何処で生まれた」

「北端にある図書館跡ですねー、住み着いていたメルヒエンでしたっけ言い方、その腹から生まれたと思いますー」

「…………痛みは無い、嘘ではないことが、マリアチャイルドの身体が伝えてくれる。」

「北端か、確かにあそこならドロシー、いや、オズの魔法使いの本があったな、次だ、そのブリキの人形以外に、お前はどんな事ができる」  
「どんなことですかー、オズの魔法使いを読んでいるならわかるかとは思いますが、勇気や心、後は無生物に脳に似たモノを与えられますねー、ライオンやカカシに似たモノも出せますしー、後魔法を少しかじってます」

嘘ではない、だが、かなりの量の血式能力だ、他のジエノサイドピ  
ンクとは明らかに違うことがわかる。

「お前は何者なのだ、どうやってそこまでの力を」

「何者と問いますかー、それはどういう存在かと言ったよ感じですかー？、ワタシは、世界を救いたいと思つてます、そのためにワタシはこのような力を身につけました、全ては世界のため、ですよ、だからワタシはワタシなのです」

これも嘘ではない、本当に世界を救いたい、そう願っているのだ。

「……本当に、そういうことなのか、すまない、話はこれで全てだ、ドロシー」

「はい」

マリアチャイルドは、椅子から立ち上がり、手をさしだす。

「これからもよろしく頼む」

「はい、こちらこそー」

ドロシーはマリアチャイルドの手を掴み、握手をした。

○

それから、ドロシーは第一戦線、マリアチャイルドと共に戦う仲間  
にまで上がり、様々な人から愛される存在となった。

だが、現実はその甘くは無かった。

「――これは、どういうことだ……ドロシー!!」

血戦都市から離れた場所、そこには人々の山、その中には太郎3兄  
弟も含まれている、ドロシーはその山を見つめながら、何時ものあの  
笑顔を浮かべている。

「……詳しくは言つてませんでしたが、世界を救う方法は……ワタシ  
はねえ、気づいちゃったんだあ、世界がどうしてこんなにも辛く、苦  
しく、哀しく、そして醜いのか……」

ドロシーはマリアチャイルドのほうに振り向き、杖を掲げる。

「答えは一つ、人は儂い生き物だからなんだ、老化で死ぬ、刃物で死ぬ、  
精神が荒めば死ぬ、食べ物が無ければ死ぬ、寝ないと死ぬし、病でも

死ぬ、死だよ、死が人を焦らせる、戦わせる、不和が生まれる、だからね」

杖が輝き、何も無い場所から、それは現れる、いや、隠されていたのだ、今まで、正しくは、視認が可能とかつた。

「——なんだ、何なんだこれは」

マリアチャイルドは些細なことでは驚かない自信があった、仲間の死でも揺るがない、だが、これはなんだ？、こんなモノが何故、この世界に存在する？。

「不老不死これはそれを叶えてくれる、擬態化なんてモノじゃない、世界を救う、世界を書き換える、これはウィツクラフトなんかよりも強い、それを芽生えさせてくれる、神獄塔!!」

塔、と、呼ぶには、それはとても、人の姿をとっている、巨人、それがいくつもの太く頑強な鎖で縛られている、だがそれでも、マリアチャイルドは初めて芽生える感情があった、恐怖、これを目覚めさせてはいけない、ドロシーが言うような、世界を救うものとは到底思えない。

「こんな、こんなモノが、世界を救えると言うのか」

「そうだよー、これは世界中にある栄養豊富な核を取り込んで完成する、いわばミイラ、白い核なんかが好ましい、これも成分的にはジェルと同質、同類、ははは、さて、あの3兄弟にも言ったけど、あなたにも質問するね……ワタシと一緒に来ない？、世界を救う、計画に乗ってほしい」

ドロシーは手を差し伸べる、それに対してマリアチャイルドは、メルヘンスケルター化して、刀と銃を突きつける。

「断固反対しよう、私は、この世界を護る義務がある」

「……なんでわかってくれないかな、不死だよ？、そうなれば世界は救われるし、争いも飢餓も、人との別れだつて経験することが無くなるのにさ、ねえ、なんで？」

マリアチャイルドは、いつそう手に力を込める。

「私の人生を侮辱する気か？、人間とは限りある人生だから人を愛し、理解をしていく生き物なんだ、死なず老いずの人間は、それはもう人

間などではない！」

「……………何もわかつちやいない」

ドロシーは、初めて笑顔を崩し、真顔となる。

「それは戯言だ、失ったから帰ってこないから理由をつけて、自分を隠す、騙す、そして人間ではない？、ならワタシは人間じゃなくなってもいいね、だって、それは新たな新人類なんだから」

「わかりあえない、と言った感じか」

「ええ、価値観が違いすぎるね、だから、押し通すよ、ワタシは」

「……………はあ！」

ドロシーとマリアチャイルドは、一瞬で距離を詰め、ぶつかりあった。

——戦いの、開幕だ。

## 幕間15 マチとメアリー、そして悪夢少女ついて 後編

その日は、満月が綺麗な夜だった、月見を楽しむために、休暇もかねて、血戦ビルの屋上に私は足を運んだ。

そこには既に先客がいた、ドロシーだ、ドロシーは一人、柵の上で月を見上げていたんだ、何時もの笑顔ではなく、とても悲しそうな表情を浮かべて。

「……あー、マリアチャイルドじゃーん！、どしたの？、こんな夜中にさー！」

私を視認すると、ドロシーは何時もの笑顔を作った、だがあの表情を見たからだろうか、私には今のその笑顔がとても作り物に見えてしょうがない。

「ああ、私は少し月見にね、団子も持ってきた……少し話でもするか」「するするー！」

私は台にピラミッド型に乗せた団子を置いて、座つてあの月を見ることにした、隣にドロシーをそばにおいて。

「……なあ、ドロシー、貴方、この都市に来て、楽しいと思つたことがあつたか」

「そだねー、楽しいよー、皆優しいしさ」「ぐうっ！」

嘘だ、それもかなりの嘘だとこの胸の痛みが教えてくれる。

「……ここでは貴方を楽しませられないみたいね」

「——ごめんね、ワタシ、この世界じゃ、心から楽しめないみたい」

ドロシーの表情が再びあの悲しいものとなった。

「なら、どうすればいい、貴方は頑張ってくれてる、私は本気で楽しんでほしいんだ、この世界で」

「……ふふ、優しいことで、もっと堅物だと思つていたのに、これは新しい発見ね」

ドロシーは団子を摘み、口に入れる。

「おいし……ねえ、マリアチャイルドさん、もし、やり直せるなら、世界を変えられるなら、きみはどうしたい」

不思議な質問だった、やり直す、世界を変えるか、私は後悔は既に過去に置いてきた、けど、そうだね。

「……私は変えたいかな、おじいちゃん達からよく聞くね、メルヒエンがない、こんなにも世界が歪んでない、平和な綺麗な世界……私はそれを見てみたいかな」

「ならー、ワタシに」

「けど、駄目なんだよ、それはここで生きる人々を否定すること、失った者達の否定、私はそれを背負って、生きていけないといけないんだ」

「……偽りを重ねた答えね」

一瞬、泣きそうな顔をしたかと思うと、怒ったような顔からまた笑顔を作る。

「何か言ったかな」

「うん、マリアチャイルドさん、きみはそんな人だ、自分というモノを押し殺して、否定して、我慢して、人々のために、その血液の一滴さえ捧げる、そんな人だよ」

ドロシーは立ち上がり、杖に乗って宙を舞う。

「……ワタシはワタシがやるべきことをする、この世界のために、悲しみをこれ以上生み出さないために」

ドロシーはそう言って去っていった、また会えると、この時はそう思っていたんだ。

——1年、ドロシーはそれ以来姿を見せなかった、何か悪いことをしたのか、あの時、ワタシに、いったい何を言いたかったのだろう。その答えは、今ここにあるのだろう。

○

「はああああー！」

空中にてドロシーはいくつもの巨大な火の玉を作り、マリアチャイルドに向けて放つ、それをマリアチャイルドは刀で斬って落とし、メアリガンでドロシーに向けて発射する。

「ぐっ！」

ドロシーの肩に命中し、その口から濁った血液が吐かれる。

「ぬあああ!!」

ドロシーは地面から神獄塔の半分ほどの巨大なブリキの人形を作り上げる、その拳をマリアチャイルドに振り下ろす、大きな破碎音が響く、マリアチャイルドは、光線にて、ブリキの人形の腕を溶かし、そのまま跳躍して、ブリキの人形の頭を切り落とした。

「何故だ！ドロシー、貴方は人々の信頼を裏切るのか！」

ドロシーから放たれる様々な属性の攻撃を避け、当たりながら、空中にいるドロシーに向かっていく。

「ワタシはワタシがやるべきことをする！、こんな歪んだ世界を救済するために、ワタシはこの世界を否定してでも、ワタシは全世界の不老不死を目指す！」

更にドロシーは攻撃を激しくしていく、それでもマリアチャイルドは止まることはない、傷つき、焼かれ、貫かれても、そして、その刀がドロシーの胸に突き刺さる。

「私は……人間を守っていく、そのためなら、たとえ違った価値観の正義だろうとも、私は己を貫く」

「ごっつ……ふふ、強い、強いだけだいくらそんなことを言っても……」

二人は落下し、地面に転がる、ドロシーから気配を薄まってい、マリアチャイルドはドロシーの死が近いことを予感する。

「私は、それが世界のためなら、強いだけでもいい」

「——あはっ、後悔はしないだろうけど言っておくよ、その正義が、近いうちに、敵を生み出すことになるだろう——予言して——あげる」

ドロシーはそう言って目を閉じ、動かなくなった。

「……」

マリアチャイルドは傷だらけの身体で、血戦都市に向かって歩き出した。

○

勝った、殺した……だが、それは生まれた。

伝令から噂から聞いた、世界の都市が壊滅したと、一人は糸を使い、

一人は氷を使い、一人は黒い光を使うと、世界に悪夢に包まれた、残されたのは血戦都市のみ……やつらはこう名乗った、悪夢を生み出す者、世界を救う者、ナイトメア・ガール悪夢少女と。

○

「……なるほど、で、殺したはずの、ドロシーが生きていたとね」

「ええ、正直言って驚いたわ、確実に死んだと、そう思えるほどに死体となっていたのに」

「……赤ずきん、シンデレラ、どう思う、マリアチャイルドの印象」

二人は数秒考えた後、口を開く。

「あなたにも正義があるんでしょうね、でもまっすぐすぎる気もするわね、別の道あっても自分の信じた道行くでしょあなた」

「わたくしは少し羨ましいですわね、悪いことを考えないその姿勢は」

「……そうか、マチ、貴方は私のことをどう見ます」

「どうも、マチはマチの信じた道を行く、正義とか悪とか関係なく、仲間を守る、助ける、そしてマチが間違っているなら、仲間をたすけてもらうよ」

「そうですか……話は以上ですか、では、また明日」

「おう、またね」

3人が去った後、マリアチャイルドは屋上に向かった、今日もまた、綺麗な月が浮かんでいる。

「——最初の友達……そう思っていたのね、ドロシー」

一人、月を見て、団子を食べる、マリアチャイルドだった。



## 幕間16 ナイトメア・ボーイ／ガール

「——ふふ、無様に負けてきたねー、お二人さん」

ある場所、ドロシーは玉座に座って、織姫とヤオと共に、影法師と、橋立小女郎を見下ろしていた。

「ど、ドロシーー！、もつとだ！、もつとうちに力をくれ！、仲間だろう！」

「拙僧にもー、あのようなやつに負けたままではいられないですよー！」  
「……まず、影法師、きみは相性が悪いと知りながら、慢心して、マチに挑み、敗戦した、無様だね……」

ドロシーは影法師に合わせて、指を軽く下に振ると、影法師の左腕がぼとりと落ちた。

「あ？……あ、あああああ？！」

痛みは無い、まるで最初から無かったかのように、落ちた左腕は骨となった。

「あまりなめないほうが良いよ、君達はワタシによって死体となった身体に神獄塔のナイトメアの細胞を移植して、力を奮っているいまば道具、その腕はペナルティだよ、任務に失敗して、挑むべきではない相手に挑んだ」

「ひ、ひい……」

影法師は恐怖で顔が歪んでいる、それを見ていた橋立小女郎も、歯をガチガチと鳴らしている。

「だが、その姿勢は評価しよう、次こそはしくじらないこと、ワタシの命令絶対に、守ってね？」

「は、はいいいいいー！」

影法師は地面にめり込むような勢いで、土下座をする。

「で、橋立小女郎だっけ」

「う、うちだって負けたただけだ！、それにイレギュラーがあったから、次はあんな失態」

「そうだね……きみは駄目だよ」

「へっ？」

「優位な状況だったのに相手をすぐに殺さず、ただ待っていた、見ていたよ、細胞を通してね、完全な負け、橋立小女郎、きみはもういらない」

「……ふぎけないですよ、うちは、うちは出世するんだ、誰よりも有名になって、男どもを侍らせて、誰にもうちを、うちを否定させないんだよおお!!」

橋立小女郎はドロシーに向かっていくが、その足が、手が、首が、一瞬のうちに斬られる。

「あつ?……」

再生しない、けど生きている、けど動けない、理解できない事柄に、橋立小女郎は思考が止まっている。

「ほほ、いい身体じゃよ、これは」

ドロシーの玉座の裏から、一人の少年が出てくる、黒い髪、異形の刀、和の鎧姿、その外見はどこかマチに似ている。

「て、めえは……まさか!」

「ふふ、紹介するね、新しく橋立小女郎の代わりに入る新人くん、名前は確か……ハナサカだっけ?」

「ほほ、よろしく頼むの、まあ、そこのおぬしとは、もう会うことはないじやろうが」

裏から兵士達が現れ、バラバラの橋立小女郎を運んでいく。

「おい!、うちを!、うちをどうする気だ!」

「なに、少しナイトメアの細胞を増やすだけ、もしかしたら、生きて帰ってくるかもね……精神がどうなるかは知らないけど」

「や、や、やめろおおお!」

扉が閉じ、橋立小女郎の叫びは、虚しく遮断される。

「……さて、ハーメルンくん、出ておいて」

「ええ」

天井から突き破って、道化師のような姿をした男が現れる。

「どうもお、ハナサカさん、同じ悪夢少年<sup>ナイトメア・ボーイ</sup>どうし、仲良くしましょう?」

「ふん、おぬしみたいなクスと仲良くする気はないな」

「つれないねえ、ま、我としても堅物シヨタ爺さんと仲良くできるとは思ってたねえけどねえ」

「はいはい、じゃあこれで、ワタシ、織姫さん、ヤオちゃん、ハーメルンくん、ハナサカくんに、影法師……一人いないけど、全員集合ということで、ワタシ達の目的言ってみようか、ヤオちゃん」

「……我ら、神獄塔を目覚めさせ、太陽に届かせ、世界を変える、世界を救う核<sup>コア</sup>を作り出す、だったか」

「そそ、そろそろ核も集まってきたことだし、行動に移ろうと思ってるけど、どする？」

「勝手にどうぞ、わたしらは、あんたに従う奴隷なんだから」

「奴隷とは思ってないよー、仲間だよ、ま、切り捨てるときは一瞬だけど、さて……織姫さん、あいつらどうなっている？」

「難しいわね、母でも手を焼く娘がいますから……確か、名前はアーサーでしたっけ？」

「アーサー、ね、そんなやつ、前の世界にいなかったはずだけど、まあマチちゃんみたいな例があるし、イレギュラーは範囲内かな、さて、教団もそろそろお終いだし、その間に進めておこ、じゃ、解散！」

5人がそれぞれ散っていった後、ドロシーは一枚の写真を見る、そこには血戦の面々が写っている。

「後悔か……するのはやった後でも、別に良いよね」

ドロシーは血戦での思いにふけながら、一人眠りについた。

# 10話 ハーメルン編② ジェノサイド・ガーディアン

ジェノサイド・ガーディアン

血戦都市の外側にいる人々を護る組織、血戦に懐疑心を抱くものや、親、あるいは子を失ったものが所属し、男の大人も護るために動いている。

殺戮の守護者という意味の名前は、殺戮する者のジェノサイド・ピンクとは違い、殺戮《から》守護する者という意味している。

ジェノサイド・ガーディアン、通称守護者は、血戦と同じく、ジェノサイド・ピンク血式少女が統括しており、その実力はナイトメア数匹すら圧倒できるほどのこと、だからだろう、一部の人々からは恐怖の対象であるジェノサイド・ピンクがリーダーの組織は血戦同様に入りづらい印象がある。

元は散り散りのジェノサイド・ピンクが自衛、汚染動物を殺すために集まった者達であり、数十の様々なジェノサイド・ピンクがおり、リーダーのジェノサイド・ピンクに更生されており、優秀な兵士として働いている。

地下の黎明と同程度の環境であり、心が荒むかと思いきや、セラピストの働きでそれは無いに等しく、皆、今を不安はあるが笑顔で生きている。

そんな組織に、ハーメルンらは訪れることとなった。

「なあ、グレーテル、何故そのようなところに行かねばならんのだ？、それでは血戦と同じような気がするが」

「あら、そんなことは無いわよ、なんでも血戦よりは敷地は少ないから暴走しても止められるジェノサイド・ピンクが多いし、リーダーらしいジェノサイド・ピンクは、マリアチャイルドと肩を並べる、とか噂で聞いたわ」

「噂なのか……」

「ところで、ハーメルン、眼帯の感じは良好かしら」

ハーメルンは右目の黒を隠すためにマリアチャイルドから貰った今つけている眼帯に触れる。

「おうー、良い感じだ！、われとしてもなかなかカッコいいと思えんだよが」

「グレーテル、ハーメルン、そろそろ……」

ヘンゼルの言うとおり、大きな木で作られた壁が見えてくる、門の前には二人の少女が陣取っており、ハーメルンを見ると、見るからに敵意を向けてくる。

『何者だ！』

3人が近くまでくると、門番のふたりは槍を門の前で交差させる。

「わ、われは」

「私はグレーテル、こちらはヘンゼル兄さん、それとこの子はエリザよ」

「な!?!、われは」

ハーメルンは自分の名を言おうとするが、グレーテルに口を手で押さえられる

「いい、ハーメルンっていう名前はどうかやら地上にもあるみたい、それも大罪人として、あまりおおっぴらに言うのは不和の元だから偽名は必要よ」

「わ、わかった、われはエリザだな」

『何をコソコソとしている!』

「ん、僕ら、流浪のジェノサイド・ピンク、だから、ここに住まわせてほしい」

『ジェノサイド・ピンクか……』

門番の一人がピンク色の血液が入った瓶を取り出し、その中の液体を軽くヘンゼルに浴びせる、当然ヘンゼルの瞳はピンクになった。

『なるほど、では、他の二人もだ』

同じことをグレーテルとハーメルンにすると、同じピンク色の瞳になった。

『よし!、入れ、アーサー様のもとまで連れて行く』

門番の一人が、門を開き、3人を案内する、中はそれなりの木の作

りの建物が並び、奥には大きな建物が存在する、門番は大きな建物のドアを開き、門番は外で待機することとなる。

「後の案内は、ケン様をお願いすることとします」

門番はドアを閉める、中は明るく、電気が通ってるようだ、しばらく3人が待つてると、部屋の奥から一人の男が現れる。

「ようこそ、俺はジャック」

「にや!?!、にやにい!?!」

確かに、ジャックと似ている外見だと3人は思える、しかし頭の耳や、飄々とした雰囲気から絶対に違うと断言できる。

「くふっ、嘘だよ、俺がケンだ、アーサーがお待ちだ、ついてこい」

ケンはそう言っつて、階段を上がっていく。

「ま、待てー!」

3人もそれに続いて、階段を上がる、上がり切ると、部屋のドアがいくつもあり、一番左奥のドアをケンが開く。

「アーサー、シャーロット、連れてきたぞ」

3人が中に入ると、書斎のような部屋に、豊かな胸の、黒髪の女性と、騎士のような姿の金髪の少女がそこにいた。

「あら、来たみたいよ、アーサーさん」

「そうだな」

「おいおいおい!、そのタンパクな反応はねえんじやないかあ?」

どこからともなく、声が聞こえる、男の声だ、ケンの口は動いておらず、3人は少し動揺している、いや、グレイテルだけはその正体に気づいてるのか、興味深そうに、アーサーを見ている。

「お?、嬢ちゃん、早速俺つちのことに気づいたみたいだなあ、見えな  
いが良い女の視線だぜ」

「黙れカリバー、口を開けていいと言った覚えは無いわよ」

「へいへいわかりやした——なんて言うと思っただか!」

アーサーが腰につけていた鞘に入った剣が一人で飛び出し、宙に浮く。

「な!?!、何だ何だ!?!」

ハーメルンは更に動揺するが、

「わあ、凄いね、グレーテル」

「ええ、これも擬態化によるものかしら、ならこの剣もメルヒエン？」  
ハーメルンをそっちのけに、ヘンゼルとグレーテルは宙に浮く剣を凝視している。

「ふふふ、メルヒエンとはシャルロットが言っていた汚染動物のことだろうが俺っちは違うぜえ？、俺っちはエクスカリバー！、アーサー王伝説の主人公的剣だ！」

「そろそろ黙ろうかカリバー」

アーサーは軽く跳躍して空のエクスカリバーを掴み、床に何度も叩きつける。

「おまじ、や、やめろお！、欠ける！、俺っち剣が欠けるう！」

「なら、黙れ」

「へい……」

アーサーは鞘にエクスカリバーを収め、ハーメルンに向きなおる。

「ようこそ、血式少女の皆さん、ワタシがこのジェノサイド・ガーディアン

のリーダー、アーサーだ、ま、この名前は偽名に近いがね」  
「へえ、つまり貴方はアーサーのジェノサイド・ピンクというわけではないと」

「そう、理解が早くて助かる、それでこの人は」

3人はシャーロットと呼ばれた女性を見る、ハーメルンとグレーテルはどこか懐かしさを覚える、が、彼女のことはまるで知らない。

「どうも、私はシャーロット、見ていたわよハーメルンちゃん、グレーテルちゃん」

「……へえ、面白いことを言うわね、貴方」

やはり地上は面白いことで満ちていると、気分が高揚する、グレーテルだった。

11話 ハーメルン編③ 子を愛し、子を護り

「な、何故われらのことを？」

「ふふふ、ごめんなさいね、私って人の視界が見えるようなの、目を瞑るとね、まあ主人公に限るけどね」

「主人公？」

「あら、それならもしかしてマチのことも見てるのかしら」

グレーテルの指摘に、シャーロットは少し驚きつつ、小さな丸を指で作る。

「正解、後はジャックくんや、つうさん、マモルくん、他にもいるわね、今回はなかなか多いわね」

「……いろいろと聞きたいことはあるけど、アーサーだけ、貴方、もう一人のハーメルンのことはご存知なのに、よく暴走するかもしれないこつちのハーメルンを匿おうと思ったわね」

「……そのもう一人のハーメルンなら、ワタシはお断りするつもりだが、ハーメルン」

アーサーはハーメルンに視線に合わせ、その瞳を見る。綺麗な赤、肌も褐色、そして、

「やはり、聞いていた通りの良い子だね、他のジェノサイド・ピンクのような傲慢さ、過剰なまでの汚染動物への殺意も無い」

「ほ、褒めているのか？」

「ええ、褒め言葉だ、話では、その内に眠る本来の暴走とは違ったモノを制御したい、かな」

「まあ、できるものならしたいぞ」

「よろしい、ハーメルン、眼帯をとって見せてみる」

「お、おお」

ハーメルンは眼帯を外し、黒い瞳をアーサーに見せる。

「……やっぱり、ハーメルン、童話とは別の、伝説の概念が混じってるな」

「へえ、面白いわね、何かしら、その伝説の概念って言うのは」

「われにもわかりやすく頼むぞー！」



「おうけえ、じゃあ端的に言うなら、子供に広く伝わってるのが童話、老若男女問わずに知れ渡っているのが伝説、ワタシがアーサー王伝説なわけだが……ワタシもこうなる」

アーサーが目を一度つぶり、開けると、両目が黒く変色していた、それもすぐに、瞬きで元に戻る。

「おお、なんかよくわからないが凄いな」

「ふむ、その伝説は特別なモノなのかしら、他の概念の擬態化ではこうはならないとは思うのだけど」

「そうだな、他にも魔法少女……勇者、それと処刑道具、様々な概念の擬態化によつて生まれるジェノサイド・ピンクだが、伝説は人々の想いが他よりも強い、ということがわかつてはいるが、正直不明だ、何か別の要因があるのかもしれないが……」

「……ねえ、酒吞童子も、その伝説に入るかしら」

「酒吞童子か、確かに、大江山伝説というのがあるから、それも伝説に入るのだろうか」

「……なるほどねえ」

グレートルは口角を釣り上げ、キミの悪い笑みを浮かべる。

「……さてと、話はこの辺に、今日は休むといい、戦う必要はない、いたい分だけ、ここで暮らすといい」

アーサーは優しい笑みを見せる。

「うむ、ならそうさせてもらおう、ゆくぞグレートル！」

「そうね、少し歩き疲れたし、休ませてもらおうかしら、ヘンゼル兄さん、行きましよう」

「うん」

「あ、案内はこのシャーロットがさせてもらいます」

ハーメルン、ヘンゼルとグレートル、そしてシャーロットは、部屋から出ていった。

「……お優しいことで、流星はゆう」

アーサーは笑みから一変、冷酷な表情で腰のエクスカリバーを抜き、居合の速度でケンの首目掛けて振るう。

「危な危な、もお、その言葉だけは短気になるねえ、誰かさんと同じだ」

それをケンは獣の腕で防いで見せた。

「囁るなよ虚言者、キサマはシャーロットの連れだからという理由だけで生かしているんだ、妙な真似は控えてほしい」

アーサーはエクスカリバーを鞘におさめ、椅子に腰掛ける。

「ガツハハハっ!!、まあ今のところは大丈夫だぜケン、俺たちから敵認定貰わない限りはその首は繋がっているからよ」

エクスカリバーは豪快に笑うが、声音に若干怒気が、混じっている。二人の殺気に、ケンは飄々と、何ごとなく、笑みを見せる。

「おお怖いよお、そんじゃ俺もこの辺で失礼させてもらうよ」

ケンはそう言って、ドアから出ていった。

「——はあああ!!」

ドアから離れ、人目のつかない自室までたどり着くと、大きく息を吐いた、汗が滝のように流れ、身体が震えだす。

「嘘嘘、あんな化け物2匹の殺意に耐えられるわけ無いでしょう普通に、ポーカーフェイスが得意で助かったわあ、何なんだよアレ、その辺のモブだったはずだろう、どんな経験があればあんなになるんだ」

ケンは自室で震えが止まるまで、筋トレに励むのであった。

「……」

アーサーは、ある家に訪れる。

「いるかな、イリナ」

「ええ、入ってきていいわ」

アーサーはドアを開き、廊下を進んでいく、奥の部屋のドアを鍵を使って開き、中に入る。

そこには仏壇があり、2名の写真が立て掛けられている。

「……アレクさん、マーベリーさん」

アーサーは部屋にいる少女と共に、お線香を上げ、手を合わせる。「……すまなかった、イリナ」

「まだ言ってるの、あの時アナタはまだ子供だったでしょ、お父さんもお母さんも、村のみんなも責めることなんて無いわよ」

「それでもだ、ワタシがもっと早くに」

「アーサー……いや、ユウシヤちゃん」

イリナはアーサーを抱き寄せる、優しく、あたたかい。

「後悔はしても良い、けど、それを乗り越えて、今を楽しく生きなきゃ、死んだ人達に顔向けできないわよ」

「……イリナ、ワタシは、アナタだけでも、いや、ここにいる皆を絶対に、護ってみせるからね」

アーサーも、イリナを抱き寄せる、哀しく、それでもあたたかい。

「ええ、でも、無理はしないでね」

「……ええ」

二人はしばらくの間、お互いの熱を感じあつた、それは二人には数分のようで、他からは数十分ほど。

12話 ハーメルン編④ 慎ましやかな平和

『あはは！、待て待てー！』

『わーい！、やっぱりお姉ちゃんはやいー』

『きやはは、まだまだ遅いね、レナサ、マナリナ』

「……………ぬおお」

次の日、ハーメルンは、少し意外な状況を目にしていた、堅物だと思っていたアーサーが、子供達と一緒に遊んでいたのだ、今は鬼ごっこをやっている。

『あはは！——あっ』

レナサと呼ばれた少女が転んだ。

「おっと、はしやぎすぎたね、待ってね」

アーサーはレナサの膝の砂を懐に入れていた水で洗い流し、絆創膏を貼った。

『ありがとう！、アーサーお姉ちゃん！』

「うん、勝手に剥がさないでよ、レナサ、怒るからね」

『はーい！』

「うん、いい返事、じゃあ今度は何で遊ぼうか」

『おままごと！』

『せんたいごっこ！』

『おてだま！』

『おにんぎょうあそび！』

「わかったわかった、そうだね、じゃんけんで決めようか」  
「……………」

夕暮れになるまで、アーサーと子供達は遊んだ。

「……………アーサー、おぬし、子供が好きなのだな」

「まあね、純粹で。それが残酷な年頃の子達だね」

大きな食事場で、アーサーと、ヘンゼルとグレーテル、ハーメルンに、ケンとシャールロット、そして多数の子供達が席にしていた、ハーメルンとアーサーは今日のことについて少し話している。

「……………ところで、一つ私から見たことを聞きたいんだけど」

「言わなくてもいい、大人がいないことでしょ」

「——確かに！」

ハーメルンはグレーテルの指摘、大人がいないことに初めて気づく。

「大人はほとんど血戦都市にいるよ、ここにいる子供達は棄てられたり、親を殺されていたりといった身寄り」

「なるほどね、じゃああのジエノサイド・ピンクでしたっけ、あの子供達はいないみたいだけど」

「あいつらは兵士ね、別の場所で食事をとっているよ、警戒も兼ねて」  
「ふうん……」

「はーいー、みんなー、食事が出来上がったよー！」

『わーいー！』

イリナが大きな鍋を学校で見る台に置いて、コロで運びながら持つてくる、他に2つ鍋があり、三食揃えられている。

「今回はカレーライスよー」

更に、子供達が騒ぎ出す、嫌いな子がまずいないポピュラーな料理だからだろう、ヘンゼルとグレーテルは知識では知っており、ハーメルンは初めて見るものだ。

「さ、貰いに行くよ」

「お、おう」

アーサーが目の前に置いてあるお皿3つを台に乗せてイリナのところに向かっていく、ハーメルンも見様見真似で後ろをついていく、続いて子供達も、ヘンゼルとグレーテルも並んでいく。

「おお……これがカレーライス……」

ハーメルンは皿に入れられた茶色の液体、白米を見る。

「見てないで、ほら、席に座って食べようか」

「おうー！」

席に座り、両手を合わせるアーサーとイリナ、子供達。

「さて、おててを合わせて、せーの」

『いただきます!!』

「いただくわ」

「いただき、ます」

「い、いただきます！」

遅れてヘンゼルとグレーテル、ハーメルンも同じく手を合わせて言う。

「……めっちゃ美味かったぞ！」

ハーメルンはおかわりもして、お腹いっぱい、カレーライスを食べた。

「ねえ、デザートは無いのかしら」

「ない……と、言いたかったが、こういうのを作っていたわけだが、イリナ」

「はい」

イリナは厨房の奥から、冷えた四角い器を持ってくる、中には白いもの、アイスクリームが入っている。

「へえ、意外ね、こういうの作っているのね、いただきわ」

「僕も、食べる」

「わ、われも！」

アイスクリームも食べて、ハーメルンは満足して、今日を終える。

「……楽しい、楽しいが……やはり、一人になると、辛いな」

ハーメルンは内から湧き出る悪意の声に寝れずにいる。

「ぐっ……」

狂いそうになる自我を、なんとか保つ、大丈夫だ、昨日も、耐えられたんだ、今日も耐えてみせると、ハーメルンは寝ようとする。

「ふふふ、寝れてないみたいね、ハーメルンちゃん」

ハーメルンの部屋に、シャーロットの声が聞こえてくる、ドア越しに、シャーロットは話しかけてくる。

「入ってもいいかしら」

「……良いぞ」

シャーロットは扉を開いて、中に入ってくる。

「寝れないなら、私が寝かしつけてあげましょうか？」

「む、そうだな……いや……」

ハーメルンは横になりながら、数分思索する、他の子供のような扱

い、少し恥ずかしい、だがこのまま暴走するのは他の人に、アーサーやグレーテルに困らせてしまう。

「よし、お願いしよう」

「じゃあ」

シャーロットは寝台の横の椅子に座りハーメルンの手を握り、歌を歌う、綺麗で、心が安らぐ、ハーメルンは少しずつ眠気がおぼえていき。

「あり……がとうな、シャーロット——」

ハーメルンは眠りにつくと、シャーロットは誰に言うでもなく、「うふふ、思い出すわねこういうの……あの子元気にしているかしら」シャーロットもうつつらうつつらと瞼が重くなっていき、自らも眠りつく。

13話 ハーメルン編⑤ 悪を挫く 人振りの剣と  
ならん

「——ふわあああ……」

ハーメルンは大きく欠伸をする。

「あら、お早いお目覚めね、よく眠れたかしら」

既に食事場には、ヘンゼルとグレーテルがおり、朝食を食べている。

「んー？、ああ、シャーロットが寝かしてくれたのだ、おかげで今日は全快だによ！」

「嚙んだわね、やっぱり何時ものハーメルンね」

「にや、なにを言うかー！」

「……………」

ヘンゼルは食べ終わった朝食の食器を片付けず、どこか遠くを見つめている。

「どうかしたの、ヘンゼル兄さん」

「……来る」

「来る？、いったいなにが」

轟音、破砕音、突如として、食事場に響き渡る。

「な、なんだ!?!……っ！」

そして、ハーメルンもまた何かを感じ取り、頭痛がする、ハーメルンは直感的に気づいた……きたのだ、目的の人物が。

「外だ、外に……出るぞー！」

ハーメルンは走り出す、それに続いてヘンゼルとグレーテルもついていく。

外は騒然としていた、敵は明らかだった、既に何人かのジェノサイド・ピンクが倒れており、その中心には2名の少年、一人は道化師のような姿、一人は侍のような和服の姿、道化師のほうはハーメルンに、侍の方はマチに似ている。

「あははー、脆い脆い！、ワレの相手は……お前だよ偽物おお!!」

もう一人のハーメルンは、黒目となり、3対の翼を背中から生やし



て、黒い光弾を数発放った。

「ちつ、やはり戦うしか」

「いや、言ったはずだ、戦う必要はないって」

ハーメルンが戦闘態勢に入ったとき、後ろからハーメルンとヘンゼルとグレーテルを護るようにアーサーが現れ、光弾を斬って落とした。

「お前か、噂の騎士様は」

「そっちもな、男のハーメルン」

「ほほ、良い剣筋だ、これは挑まぬのは無礼であろう！」

最後の向かってきたジェノサイド・ピンクを倒し、侍の少年が前に出る。

「行くぞ、エクスカリバー」

「オツケーだぜ、アーサー」

アーサーと侍の少年がぶつかり合う、侍の刀をアーサーは避け、そのまま侍の少年を縦に真つ二つにする。

「ふっ！」

そのまま跳躍して、空にいる男のハーメルンを今度は横に斬り、男のハーメルンは落下する。

「強いわね……流石に」

「うん、でも駄目だよ」

ヘンゼルの言うとおり、斬られた二人の身体の断面が脈動し、そのまま分かれた身体とくっついて、起き上がった。

「なるほど、噂に違わぬ化け物ぶりだな」

「ははは！、ワレらは死なぬ！、それにキサマには用はない、用があるのはお前だよ偽物！」

「奇遇だな、われもそなたに用があるのだ」

二人のハーメルンは睨み合う、その間に、アーサーが割って入る。「別にやっても良いが、やるなら出ていってもらおうぞ」

「けっ、余裕ぶって、知ってるぞ？、キサマは誰も死なせないんだったなあ、なら、見せてくれよお、その意志をさあ！」

男のハーメルンは飛び、先程の数倍の光弾を作り出す、全方向に。

「はははは！一人ですりきれるかあ？」

光弾は飛び散り、隠れている子供達に向かっていく。

「……ケン、約束は嘘だと違えるなよ」

「わってるよ」

瞬間、光弾が次々と消えていく、否、ケンが猛スピードでその爪で切っているのだ。

「うなっ……!?!」

「ふふふ……余裕余ゆ……ぜえぜえ」

ハーメルンは驚嘆するが、ケンの疲れた姿から、次はイケると思いい、再び光弾を。

「う・そ」

作ろうとした時、放つ前に光弾は消え、3対の翼は切り裂かれ、男のハーメルンは落下する。

「ぐっ、キサマー！、性根が悪いな」

「おまいうー」

「さて、クズどうしだ、ケン、そいつは任せた、ワタシはこのサムライを相手する」

アーサーはハーメルンをケンに任せて、侍の少年と対峙する。

「……一つ提案だ、アーサー、儂はハナサカ、最近悪夢少年ナイトメアボーイになったものだ、アーサー、そなたも儂らと同じ伝説の概念を取り込んだ者、ここは仲間になつては」

「やらんな、ジエノサイド・ピンクどもはどうでもいいが、子供達を傷つけようとした外道と一緒に共にするほど、ワタシは馬鹿ではないし、愚かではない」

「そうかい……なら死に晒せ」

ハナサカは一瞬で間合いを詰めて、アーサーの視界から消える。

「ふむ、抜き足、いや縮池だったか？」

(とつた！)

ハナサカは背後からアーサーを斬ろうとしたが、アーサーはそれを見ずにエクスカリバーで受け止めた。

「ほう、やるのう」

「なんだ？、お前は姑息な手で倒すほど弱いのか？」

「くくつ、ならお望み通りに技で競うか!!」

アーサーとハナサカは向かい合い、剣と刀をぶつけ合う、アーサーの攻撃は当たっているのに対して、ハナサカの攻撃は一撃もかすりもない。

「ちい、やるのう」

「回復身体なんだろう、だが細切れにされれば少しは回復が遅いんじゃないか？」

アーサーは速度を上げる、ハナサカは流石に防御しかできなくなり、じりじりと後退していく。

「くう……だが、だが！」

『お姉ちゃん!』

「!」

アーサーが振り返ると、そこには一人の男が、子供にナイフを首に当てていた。

「ふうん、そういうことするんだ」

「かか！、よそ見してる場合かの！」

アーサーはその胸に深々と、ハナサカの刀が突き刺さる。

「これで儂のか……ぬ、抜けん!?!」

ハナサカの刀はそのままアーサーに刺さったまま微動だにしない、その様子を見て、アーサーは笑みを浮かべている。

「すまん……言っただけじゃなかったかもしれないが……ワタシも同じなんだまあ、外道ではなく、能力だが」

アーサーは連続で切り刻み、ハナサカを文字通り細切れにして見せた。

「……よつと」

刀を抜き、血液が流れるかと思いきや、傷口が光に包まれて、一瞬で治癒された。

「後はお前だよ、下郎」

アーサーはナイフを子供に当てている男のほうに向かう。

『う、動くな！、動けばこいつの命は』

「やめろ」

『へ、へへ、わかってるならその剣を』

「やめろ、別にあんたらは戦う必要はないとね」

『へ？、何を言ってる』

次の瞬間、男の首が、ヘンゼルの斧によって切り飛ばされた。

「子供、危ない、だから、動いた、悪い？」

男の血液が噴水のように溢れ、子供とヘンゼルにかかる。

「そうだな、悪くはないが、後で洗濯してね」

「うん、頑張つて、するよ」

ヘンゼルはうんうんと頷く。

「さて、ケン、まだかかるならワタシが相手するぞ」

ケンと男のハーメルンの戦いはまだ続いており、拮抗しているようだった。

「へっ！楽勝だぜー！」

「なら死ぬまで戦え」

「あつ、嘘……ではないかも！」

ケンは獣の足で、男のハーメルンを蹴り飛ばし、ハナサカのところまで戻された。

「はは、ここまでののは流石に予想外だな、分が悪いって言うやつ……ハナサカ、退散するぞ」

「うむ、わかった」

ハナサカはなんとか人型には再生し、男のハーメルンに掴まり、男のハーメルンは翼を生やして、空を飛んで逃げていく。

「追う？」

「必要ない、子供達のほうが大切だからね」

「……」

ハーメルンは男のハーメルンを睨む。

「……今のわれでは勝てないのだろうか」

ハーメルンは先程までの戦いのレベルを痛感し、拳を握りしめる。

14話 ハーメルン編⑥ 一人ぼっちだった王様達

われは孤独であった。

いや、メルヒエンどもはいたのだ、だが、まともに会話というものはしたことがなく、本を読んだりや、メルヒエンを気まぐれに殺すことなどして孤独を紛らわせていた、われはそんなとき、勇者と魔王を知った、勇者は仲間と共に、魔王を打ち倒す存在、魔王は配下と共に、勇者を倒さんとする存在、われは魔王を選び、メルヒエンという配下と共に、ニンゲンを待っていた、現れたマモルら、そこでわれはマモルに言われた。

「お前には、仲間がいらないから分からねえんだ」

仲間、マモルらのあれが、仲間というモノなのだろうと、そう思った、それからジャックらと会い、共に助けあい、共に戦うというモノを知っていった。

これは、今のわれは存じぬことだ、だが、心に残っていたから、われは、マチらと行こうと決められたのだ、そして、今のわれは、こちらのわれが知らぬ記憶、知らぬ仲間、知らぬ敵、知らぬ世界、全てが違う、だが、われは変わらない、われは仲間を傷つけない、仲間を失いたくは無いのだ、グレーテル、そなたを失うことにはなりたくはない、本来の世界での地上なりかけたあの時、つうが血式少女の世界なつてしまったあの時、われは、われは強い、だが、この世界でのわれは弱い部類、だからこそ、われよ、その血液の一滴さえも、仲間のために――。

○ 「……アーサー」

われは、襲撃のあった翌日、起きてすぐに、アーサーのもとに向かった、眠っていたときに何か、考えていたような気がするが、一つの答えはちやんと覚えておる、それを、今、答えようとしておる。

「なんだ、手短に頼むよ」

アーサーは朝のコーヒーを飲みながら、紙を見ながら、われの言葉に耳に傾けておる。

「……正直に言おう、われは弱い、魔王と自称してはいるが、このメ

ルヒエンにも苦戦する始末だ」

「魔王、ね」

その言葉にアーサーが反応した、コーヒーを飲みのをやめて、われの言葉をわれの目を見ながら待つておる。

「そう、魔王、われは前にジェイル……地下ではメルヒエン、あの怪物どもと共に暮らしておった」

「へえ、汚染動物を支配できるのか、それは凄い」

「ま、ここに来るまで、このメルヒエンどもにはわれの笛の音は効かぬようだったけどな、話が逸れたな、単刀直入と言うのだったこういうのは、アーサー、われを強くしてくれ」

「……理由は魔王であるためか？」

アーサーは少し目を細めた、そうだな、昔のわれなら、魔王は強くあらねばならぬとか、そんな理由で言っておったかもな。

「違うぞ、われは、ただ、グレーテルを、ヘンゼルを、いや、共に戦い、笑いあつたジャック アリス 赤ずきん、シンデレラ」

われは血式少女の皆、黎明の皆の名前を言っていた、皆、われの大切な仲間だ。

「……われは、いつこの謎の衝動に負けるかわからぬ、今も苦しい、あのわれと同じようなやつを取り込むということもわからぬ、だが、今のままでは何もできないことはわかるのだ、われは！、強くありたい、そのためなら、われは」

われは膝を床につけ、土下座の姿勢をとろうとする。

「ハーメルン、もういい」

アーサーは立ち上がり、それを静止する。

「アーサー？」

「がはは！、アーサー！、こいつお前に似てねえか？、昔の勇者勇者と持て囃されたときと！、がっははは！」

エクスカリバーとやらがめっちゃわれを笑った、そういえば喋れおったなこいつ。

「ああ、汚染動物と似て相互理解をしないやつらと一緒にいたというのは似てるな」

「勇者？、そなたがかな？」

「……まあね、今はむしろ騎士かな……ハーメルン、お前の決意はわかった、正直言ってお前のことは完全に信用しきれてなかった、度々村の大人を殺していると聞く、あのハーメルンと似た容姿と名前のやつだからな、だが、お前は違うと今なら言える」

アーサーはわれの肩を叩き、笑顔で言った。

「良いだろう、そこらのナイトメア程度なら退けられるくらいには、鍛えてやる、子供達と遊ぶ時間が減るのは悲しいがな」

「アーサー……感謝するぞ」

「なに、どうってことない、ところで、ヘンゼル、グレーテル、ドアに耳を傾けているのはわかっているから入れ」

「なぬ!？」

われはドアのほうに振り向く、ドアが開き、ヘンゼルとグレーテルが入ってきた。

「あら、わかっていたのね、血式能力でとんできたから足音は無かったのよね」

「たぶん、気配だと、思うよ、勘、鋭いとも、言うね」

「なるほどね、ヘンゼル兄さんも同じような感じで私を察知したことがあるしね」

「御託はいい、用もなくくるような頭の作りはしてないだろ、グレーテル」

「そうね、でも、わかっているでしょう、私が来た理由くらいは」

グレーテルが来た理由？、おやつ時間のことか？。

「……良いぞ、お前らも鍛えてやる」

あ、そっちな。

「あら、ハーメルンとは違って意外とすぐなのね」

「このハーメルンが守りたいやつなんだ、悪いやつではないことくらいわかってるし、ハーメルンのためでもあるんだろう?」

「……かもね」

グレーテル……どこか恥ずかしそうにしてるように見えるのはわれの見間違いか?。

「……さ、善は急げだ、今日から鍛えてやる、耐えて見せてね」

「おー！」

「良いわよ」

われとヘンゼルとグレーテルの修行が始まった、それは、二ヶ月ほど続く、かなり濃いな。

○

そして、われもまた、血戦におけるジャックらと同じ変化が起きようとしていた。



## 二章

### 15話 つう編① 過去は常にあなたの側に

……、それは、とても、懐かしいと感じるものだった。

「ウウ……ワタシ、ナンデコンナニモヨワインダロ、エラバレタモノナ  
ノニ、ドウシテ？」

これは、まだナイトメアだった頃の僕だ、不完全なナイトメアとして生まれ、都庁ジエイルで、廃屋の屋根の下で、僕は泣いていたんだ。  
「……あらあら、泣くものじゃありませんよ、我が娘」

誰かに抱かれた、それは優しさに溢れて、心地良い、誰なんだ。

「ギギ……デモ、デモワタシ」

「デモじゃないわ、あなたは成長するという固有のモノを持つてるんでしよう、あんなに小さな赤子から、今では人間のように、喋り、感情を露わにしている、ふふ、本当に面白い、私の娘ね」

……ああ、これは、知らない、けど、何故だろう、この人は織姫だ、僕を子と呼んだ、でも、ちゃんと人間だ、それも血式少女特有の匂いがする、問いただしたい、けど、あちらのナイトメアの僕と、こちらの僕は別だ、不思議な感じだな。

「おーい！、織姫ー！」

「あら、お父さんが来たみたいね、さ、我が子よ、帰りましょう」

「……ウン」

ナイトメアの子と、血式少女の母と血式少年の父、ヘンゼルとグレーテルとは反対の関係なんだな。

「……ヒコボシ」

「お？、なんだい……えっと、●●？」

まるで雑音が入って聞こえない部分がある、僕の名前、なんだろうけど、いや、僕はつうだ、誰がなんと言おうと。

本当に？

？、なんだ、何処からか声がしたような。

「ネエ、ワタシハ、ドウシテイカサレテイルノ、シツテルンダヨ、ワタ

シハホンライナラ、ホカノドウシユトイツシヨニ、コロサレルツテ」  
「——ふっ、他は他、他所は他所だろ？、差別と言われようとも、僕は  
●●、お前は僕達の自慢の娘だよ」

「ムスメ……ウン、オリヒメ、ヒコボシ、ワタシハ」

そこで、世界が暗転した、いつの間にか、僕には身体が本来の血式少女の姿になっている。

「よし、ちゃんと喋れる、一体何だったんだ、あの映像は」

「ソウダネ、アレハトチヨウガ、マダホロビテイナカツタトキノコウケイ、ワタシハ、ソコデ、オリヒメト、ヒコボシニヒロワレタ、レイメイノウナソシキ、ソノオサガ、アノフタリ」

僕の目の前に、先程のナイトメアの僕、同じ背丈になっていて、鋭い視線を僕に向けている。

「ツウ、イマ、キミガレイメイデスゴセテ、タノシイ？」

「……ああ、僕は姫、そしてジャックやみんなとすごせて楽しいと思えるよ、それがどうしたんだ」

「……ソツカ、ギギ」

ナイトメアの僕は、悲しそうに顔を俯かせ、再び視線を、僕に向ける、そこには怒りが感じ取れた。

「ドウシテカコラステタノ、ドウシテ、アノママニゲタノ、ドウシテ……ワタシヲヒテイシタノ」

ナイトメアの僕から突如として、大量の触手が伸びた、反応すら出せずに、僕はそのまま、触手に飲み込まれた。

「アナタハドコマデイツテモナイトメア、ソノジジツハギタイカ、デキナイヨ」

○

「うわあああ!!」

僕は自室のベッドから飛び起きる、荒く息をして、まわりの様子を見て、あれが夢だと理解する。

「変な……夢だった——!?!」

今度は頭が割れるような痛みだ、何かが溢れてくる、これは……本来の地上？悪夢だった擬態世界？そうだ、僕らは脱獄して……、だめ

だ、うまく記憶を整理できない——数分ほどした辺りで頭の痛みは収まった。

「はあはあ……な、何なんだいったい、でも、わかったことはある、この世界は僕が初めて血式少女となった世界と同じなのかもしれない、何故処刑台少女ジェノサイド・ベインクによって荒廃したないかはたぶんマリアチャイルドのおかげかな……とりあえず、ちよつと鏡……を」

僕は自分が今どのような状態なのか、立てかけられた鏡を見る、そこには。

「……なんで、僕はナイトメアなんだ」

絶句した、今の僕の姿は血式少女ではなく、ナイトメアになっている、まだ夢かと顔をつねるが、痛い、やはり夢からは覚めている、いたいということなんだ。

「おつうちちゃん！、大丈夫！」

「!?、姫！、今はだ」

姫もまた記憶が呼び起こされたのだろう、急いでドアを開けて、中に入ってきた。

「……おつうちちゃん、その姿」

「……うん、戻っちゃったんだ」

姫は嫌悪するでもなく、恐怖するでもない、ただ、いつも通り、優しく僕に微笑んだ。

「そっか……とりあえず、その姿はまずいかもね」

「うん、他のみんなも記憶が戻ってるんだろうけど、マチとかに見られたら」

「おーい！、なんか今日は部屋のあちこちで苦しみの声が聴こえたんだが、そういう時期かなんか……か？」

「「あ」」

姫がドアを開けっ放しにしていたから、運悪く通っていたマチに、僕の姿を見られた。

「つう……その姿」

「マチさん！、違うんです！、これは」

「——新しいコスプレってやつか」

「は？」

うん、マチはよくわからないところで勘が悪いのか、それとも良いのか……。

## 16話 ジャック編① 理想的な現実

僕は護りたい、アリスを、皆を、でも僕にできるのは誰かの盾になるか、支援することしかできない。

じゆうぶんだと皆は言う、だけど僕はただ皆だけに戦わせるのは辛いんだ。

そうだ、だからこれは妥協に近いのかもしれない、イツスンさんの申し出を受けて、地上の血式少年の皆さんのように戦う力を得るために。

でも駄目だったんだ、正直に言っしまえば才能がない、元から〃殺す〃という行為に抵抗があったのだと思う、メルヒエンの死は慣れているけど、今相手する敵には人型ナイトメア・ガールがいる、悪夢少女、はたして僕に彼女達を殺す選択をとれるだろうか。

——無理だろう。

躊躇い、殺されると、イツスンさんは言っていた、その次に、その優しい心、絶対に捨てるなよとも言っていた。

これからも僕は、仲間を護るだろう、戦えなくても、僕はそれだけはなんとしてでも成し遂げるつもりだ。

○

「はん……綺麗事、甘くて愚かな考え、それができたのは運が良かっただけでしょように」

「えっ!?!」

いつの間にか、ジャックは何処かの廃墟に立っていた、知らない場所だ、壊れた家屋、小さな光が数え切れないほどにたくさん見える夜空が広がり、本物の月が辺りがほんのりと明るく照らされている。

明らかに地上の風景だ、しかし、見たことない場所にいる、夢なのだろうとは思ったが。

「夢じゃないからね、これはお前とわっちの意識の狭間さ」

月明かりに照らされて、今ジャックと話している人物が姿を見せる。かぐや姫のような和服を着たジャックと同じくらいの少女だ、しかし、髪は白く、頭からは角が、肌は青白く、広角の上がつた口の端

からは牙らしきものが見え、瞳は青く目線は鋭く、獣のようにこちらを見据えている。

処刑台少女。ジェノサイド・ベング 前の世界、ジャック達と激闘を繰り広げ、一人を除いた悲劇的な最期を迎えた少女達と同じ特徴を持っている。

「そう、わっちは処刑台少女——ジェノサイド・ベング だったんだろうね」

「……きみは誰なんだい」

ジャックは数々の疑問を一度思考の端に置き、まず目の前にいる彼女が誰なのか聞いた。ジェノサイド・ベング ジャックの記憶の中の処刑台少女のイメージは殺戮者、もし目の前にいる彼女が同じような存在なら、逃げなきやいけない、追いつかれるとわかっていても、しかしジャックは一人の例外の可能性がいたことも知っている。

もしそちらなら話し合いができるのかもしれない、だから今は、彼女が何者なのかを探ることにする、この考えが筒抜けであっても。

「ふーむ」

ジェノサイド・ベング 処刑台少女らしき少女は少し考える素振りを見せる、一応すぐには襲ってこないのだと、ジャックは少し安堵する。

少女は諦めた様子でしかめていた表情を緩め、話し出す。

「うん、ごめんわかんない、わっち自身、今ここにいること自体がわからないし、記憶も殆どさっぱり真っ白、どうしようね本当に」

なんとなく本心なのだとジャックは理解する、不思議な感覚だが嫌な気はしない、一応は警戒は解いてもよさそうだと思い、少女に一步步近づいていき、だいたい3メートルほどまで来ると足を止める、その際に少女から何も言われず、攻撃しようとしもしてこない。

「あの、なんて呼べば良いんだろう、きみのこと」

「好きに呼べばいいよ」

「好きになって……」

「ふむ、困らせてしまったか、そうだな……」

少女は地面に生えている花を見つけ、その花の部分だけをその手の鋭利な爪で切り裂いた。少し少女は満足げに見えた、もしかしたら自分も？、と少し思い、若干引いた。

「ん、そうだね、リッパーとかどうかな？」

「リップパー……切り裂く?、花のほうじゃないんだ」

「ジエノサイド・ベック処刑台少女ってそういうの多いのかなんとか記憶してるから別に良いんじゃないかな、で、ジャック、いろいろと考えていたことに答えてあげる」

「やっぱり僕の思考が読めるみたいだね、僕はわからない感じだけど」  
少女改め、リップパーの感情はなんとなくわかる、近くに来てみたらそれが不思議とそれが濃くなったような気がする、今のリップパーの感情は不安 それと好奇心。そのようなことがジャックは頭の中に浮かんだ。

ここが普通の場所ではないのは確かなのだろう、夢と違い意識は明瞭、足を踏みしめる、夜の風が冷たいという感覚もある。

本当によくわからない場所だ、でもまずはリップパーからの話を聞こうと耳を傾ける。

「まずわっちが知ってることだと、今わっちとジャックは一心同体つてところかな、ほれ」

リップパーが腕をつねる、するとジャックにもそこと同じ痛みのような感覚がする、試しに自分もと頬をつねる、やはりリップパーにも同じところが赤くなっている。

「不思議でしょ、それとそちの考えはわっちはわかるが、そちは別のモノがわかる感じかな?」

「うん、僕はきみの感情がわかる感じみたいだ、今は好奇心と不安……と、侮蔑?」

「うん当たり、ジャック、そちは本当に患者だね、それほどまでに理想的な現実を味わってきたのだろう」

「理想的な現実?」

その言葉に、少し眉をひそめる、しかし確かに僕が思い描いた、理想にほぼ近い世界なのだろう、今までも一人も死なずに、つうや人魚姫も復活して、辛くても皆生きてる今は本当にその言葉がぴったりなのだろう。

「今までは良かったが、だがこれからはどうする?、正直言つて護れるか怪しいところだ、相手はナイトメアなど雑魚とも思える連中だぞ」

「悪夢少女を知ってるの!？」

「少しね、記憶におぼろげながら恐怖が染み付いている、今までがハードならこれからはベリーハード、ジャック、それでも護るだけだと愚考するか？」

「……何か力があるのかな」

リップパーの話しぶり、試すような感情が流れてきて、そうなのだろうかと思う。

「まだわっちとしても測りかねているけどね、ジャック、わっちを受け入れよそうすればもしものとき、そちに力が宿る……と、思う」

「受け入れる?、それってどういう」

「わからん、とりあえずイエスかノーか言え」

「い、イエス」

ほぼ即答だった、力があるなら欲しい、護るだけではない戦う力が、それを聞くとリップパーの姿がおぼろげになっていくのが見える。

「ま、とりあえずはここまでかな」

「え?、ちよつと!、ここから出る方法は!」

「知らん、勝手に目覚めるんじゃないかな」

「そんなむちやく——」

リップパーが完全に消えた瞬間、ジャックは目が覚める。

「ちや……な」

昨日眠ったベッドの上、確かな朝日、見覚えのある部屋、どうやら戻ってきたようだ、帰ってこれて良かったとジャックは安堵し、起き上がる。

「よつ、おはようジャック」

ふと、何処からか先程まで聞いていたリップパーの声が聞こえた、声のした方向、部屋の隅に目をやると、そこには確かに、リップパーの姿があった。

「えつ……えええええ!!」



## 17話 動き出す現状

その場には、地下組の血式少女達と一部の黎明関係者やヒカリ、それにメアリーを加えた面々が集められていた。地上の血式少女達は今日はおらず、皆寮で一番広々としているリビングにいる。

「……どういこうっちゃこれ」

マチはかなり困惑している。メアリーの件でも驚きはそこまですたが、ジャックだけが見えるリツパーなる少女、半異形となつたつう、一つでも結構なことだがいっぺんにくると流石に反応に困る。

「僕にもなんとも、リツパーは敵意は無いとは言ってるんですけど」

「ジャックはまあ、最低でも疲れているで済ませられるけど」

「それは酷くないですか!？」という声を無視し、マチはつうを改めて見る、人型ではあるが、左半分がナイトメアやメルヒェンに近いものとなっている、最初こそコスプレと思つたが、他の血式少女達は見覚えのある姿だという、なんでもこれがつうの本来の姿だとか。マチが知らないことだ、メアリーも知つてると言うが本人は知らんと言う。

「私はジャックのことは信じてるわ、おかしな夢を見たのでしよう?」  
アリスはそうは言うが半信半疑と言つた少し困つた表情だ、ジャックもリツパーの存在が疲れなのか本当に自身の精神に住み着いているのかわからない。

「夢……というには少し変なモノだったな、リツパーが言うには精神世界に近いモノだとか、ははは、グレーテルが飛びつきそうな話だよ  
ね」

「……んで、これはお前ら」

マチはメアリーを除いた皆に視線を送る。

「マチだけが知らないんだ、知つてること洗いざらいはけ誰でもいいから」

そこは怒りはなく、単純な疑問だ、心の準備はできている、それがどんなことでも受け入れる、というよりほぼ自分の中で答えは出ているのだ。

「それはあたしから言うわ」

赤ずきんが一步前に入る、そこにおどけた感じはなく、真剣な表情だった。

「……覚悟はできてるかな」

「話せ、マチだけ仲間外れは嫌だからな、覚えている記憶によつては他の者を頼るがいいかな」

「ええ、それじゃあまず——」

赤ずきんは1から話し出す、その内容は一言で言うなら、メタ的に言うなら神獄塔メアリスケルターの全てだ、その内容にはマチの影はなく、地下にはメアリーがおり、シャルロットというメアリーの姉のような存在、博士の野望から、地上の本来の荒廃ぶり、処刑台少女ジユウウのこと、地上をより荒廃させた黒幕、そしてすべての顛末……。

「……つまり、やはり、マチはそこにはいないんだな」

「いや、あたしとしては知らないところではいたのかなつて、ほら、メアリーやジユウのようなことがあつたし」

「メアリーから生まれたという線もあるが、メアリー、お前のマツチつてここまで人間が作り出せるのか？」

「え？、いやそれは……簡単な物なら核に放り込めばいけるけど、それができるとしたら」

「ウィッチクラフトか、まあ人間一人くらいは創造可能か、ま、マチがないこととかはどうでもいいとして」

「あんた、本当に精神がヤバいくらいカチカチね、達観してるって感じ、まあそんなところがあたしは好きなんだけど」

赤ずきんは話を終えるいつものおちやらけた表情を見せる。

その表情にマチ含め、皆安心を覚える、過去のこともあるが、それが正常で、皆がよく知ってる赤ずきんだからだろう。

「ありがと、じゃ、一番の問題から話そうか……」

## 18話 救われぬ者と救われた者のその後

一人、ある老人が歩いている、老人は流れに沿うようにある者の命令を受けて行動した、思考に霧がかかり、まともに抵抗できなかったが彼は知っている、あの存在は自分の敵だと。

「……ふむ」

老人の身体が崩れていく、いな、擬態化が解けているのだと、老人は考える。

その姿は数分のうちに変貌した、少年がそこには立っていたのだ、眼鏡を整え、思考する、今の状況はどういうことなのかを。

「これはどういふことなのだろうか、私、いや僕は確かにあの監隊塔で終わっていたはずだ、妻と再開し、ああは言ったが死んだとは思っていたさ……そうだ、妻は今何処にいるんだ」

『ここにおりますわ』

少年の頭の中から声が聴こえる、見知った声だ、その声がすぐに妻だと気づき、安堵するが、思考はまだ止めない。

「これは妻の意識と僕の意識が融合されたのだろうか、だが誰がなんのために？、いや、そもそも僕は本当に僕なのだろうか、擬態化にはマモル達や僕のような例がある、そもそもこの世界だ」

少年は遠くに目を向ける、そこには荒廃した、侵食された大地があるが、ある一点だけ緑が、綺麗な建物がそこにはあった、復興にしては早すぎる、あのデジャブしか感じない地下でのこともある、だとするならば。

「……この世界全てが擬態化によるもの、そしてあそこにあるのはその擬態化が解けたと言ったところか、ジャック達は監隊塔のウィッチクラフトに無事願えたか。さて、アイツの動向も気になるところではあるが、まずは僕がどうすべきかだな」

『あなたの好きなようにするべきでしょう』

「……そうかもな、僕はジユウ、今再び、彼女らと共に進むべきだろう」

ジユウは血戦都市に行こうとするため歩を進めようとした瞬間、妻が先程までよりも強い声で叫ぶ。

『ジユウー、上です！』

今の名前を、ジユウの名を妻が言うよりも少し早くに、ジユウはその場から飛び退いた、その直後、ジユウが元いた場所に拳が振り下ろされ、地面を抉った。

「ふん、やはりそう上手くはいかないものだ。不意打ちは、害虫の分際でも察知能力は高いことは知っていたからな」

ジユウはその顔に見覚えがあった、服こそ黒いフード付きのローブになっていてもわかる、元の世界での黒幕――。

「賀東か、お前もこつちに来ていた、いや、蘇ったが正しいか」

「まさか貴様の顔を2度も見る事になるとはな、まあいい、これで最後のだからな」

賀東が指を鳴らす、すると一人の少女が彼の側に空から現れた。

ジェノサイド・レンク

処刑台少女なのは確かだろう、しかしまるで見たことない少女だ、髪は綺麗に切り揃えられたボブカット、ゴアスーツらしきその服装はギロチンのようなスーツにプレートの鎧を身に纏い、角は額からの一本角、武器は丸みを帯びたメイスのようにも見えるが、持ち手には柄の部分に何か回転しそうな部位がつき、メイスの殴打部分には割れそうな切れ目が4つあり、開く仕組みがあるのだろう、それがどのような使い道かは考えるのも恐ろしい。

「一応紹介してやろう、苦悩の梨だ」

「……………」

苦悩の梨と呼ばれた少女は一礼する、明らかに敵意と呼べるものを感じられない、今まで見てきた3人は性格破綻者ぶりを見せてきたが、目の前の苦悩の梨と呼ばれた少女は武器を持っていなければ無口の普通の少女にも見える。

「……………」

苦悩の梨はそのメイスを構え、一瞬で間合いを詰める。

（やはりはや――！）

なんとか避けようにも身体が追いつかず、そのまま苦悩の梨のメイスのフルスイングをくらう、メキメキという腕と肋骨から鈍い痛みが伴う音が響き、ジユウは3メートルほど滑空した後、地面に転がった。

「ぐあ……くっ」

息ができない、肺が痛い、骨が刺さってはいるだろうが、強い力が加えられ、空気が通らないのだらうと痛みの中でなんとか思考する、苦悩の梨はそのままゆっくりとジユウにトドメをささんと歩み寄ってくる。逃げなければ、このまま寝転がってれば死ぬのは確定だ、しかし、身体は起き上がることはできずにただ悶るだけ。

(くそ、こんな死に方では、駄目だろう、まだこの擬態化世界のことを何も知らないと言っていい状況で……)

苦悩の梨はジユウの頭の前で歩みを止め、また「ごめんね」という言葉の後にメイスを振り上げる。

「すまない、赤ずきん……」

メイスはそのままジユウの頭に振り下ろされる。

——ことは無かった。

「ぐっ！」

誰かが苦悩の梨にぶつかり、彼女はそのままよろめき、攻撃してきた相手を睨む。

「だれ」

「正義の味方……なんてね！」

ジユウを救ったその男は、その顔はジャックに似ているが、野性的な笑顔はとも彼にはできない表情だ、

「間に合ったようでは何よりだよ」

その彼の後ろから一人の女性が現れる、ジユウは直感的だが、理解できた、知り合いだと、気配から、声音から、そして内なる妻から。

『ジユウ、あの人、ワタシ知ってる、いや、もしかして——！』

妻の声に涙声と呼ぶべき、感嘆の声音をしていた。

既に会っているのだ。老人の身体、博士と呼ばれたときに、その時の女性は名をフユと名乗っていた。だが今ならわかる、驚嘆、ありえない、不可思議、彼女はここにいないはずの存在なのだ。

『姉さん！』

「チェシヤラミリカ！」

二人はフユを母星での、本来の彼女の呼び方で叫んだ。

「改めて久しぶりだね、ハウテハロテ、それにチエシヤラエミイ」

正体を明かすように、フユもまた二人の母星での呼び名で応えたのであった。